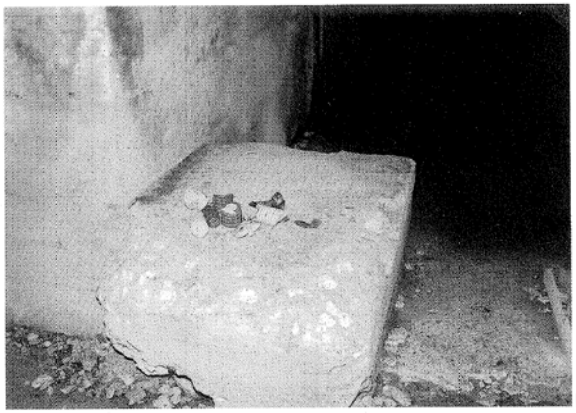
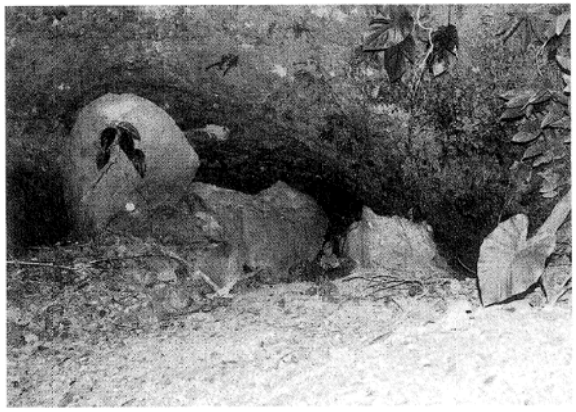


B壕内部（発電機の台座）

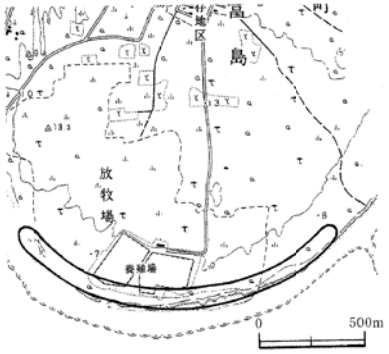
B壕入口前石積（爆風除け）



ヘーギナー壕入口

第2節　竹富町

1.竹富島南海岸の銃眼



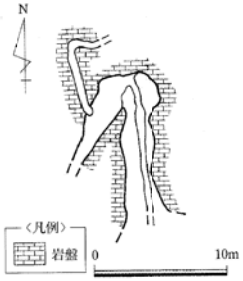
所在地：竹富町竹富
立地（標高）：海岸（約０ｍ～５ｍ）
形態：人工壕
種別：銃眼
現状：銃眼内部は埋没している箇所有り
保存状況：南海岸に放置
築造者：独立歩兵第301大隊第１中隊
　　竹富島住民
築造年月日：1945年（昭和20）
戦時中の使用状況：内部に機関銃を設置
主な遺構：壕、銃眼、銃眼内部に至る塹壕

概　要

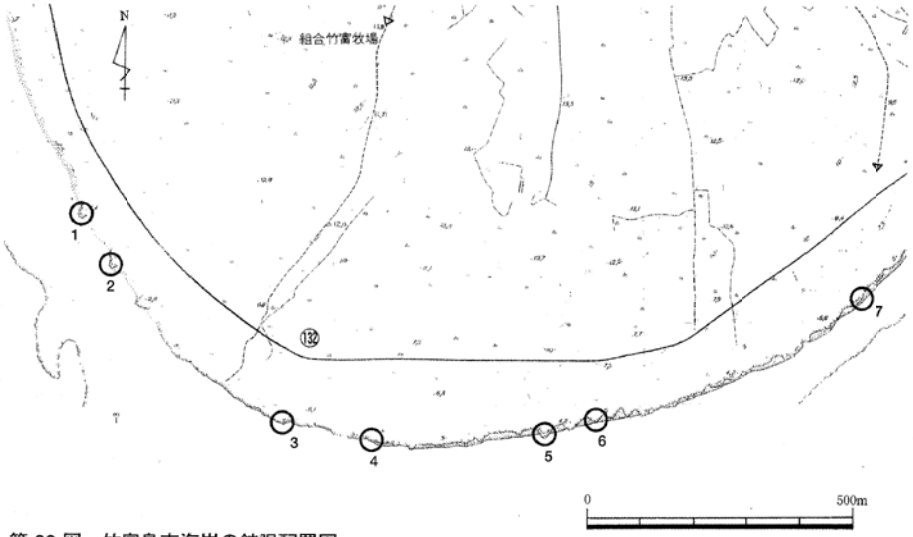
竹富島の南海岸は琉球石灰岩の岩礁と砂浜が混在しており、岩礁に掘り込まれた７基の銃眼をもつ壕が約1.8㎞にわたって点在しているのを確認した。海岸から銃眼内部へ入ることができる壕は壕③以外見当たらないことから、内陸部から石灰岩を掘り抜いてつくられているが、雑木の繁茂や、砂の流入で殆ど埋没している。壕①～壕③は銃眼は１ヶ所、壕④～壕⑦は銃眼を２ヶ所有しており、銃眼の大きさは縦10㎝～20㎝、横20㎝～30㎝の長方形である。また、銃眼の周囲をセメントで補強している箇所も見られる。海岸から銃眼内部に入ることができる壕③は平面形で「Ｖ」字状になっており、銃眼方向には内部の幅、高さともに漸次狭まる。また、壕内部から内陸部への抜け穴があり、そこから石灰岩を掘り抜いてつくられた塹壕が続いている。

遠景（南から）

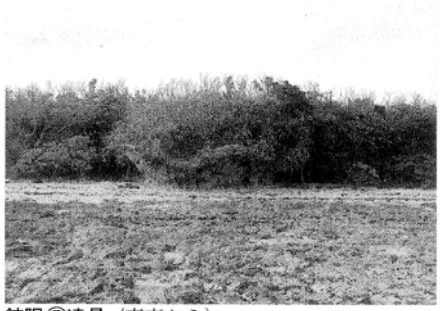
竹富島に駐屯した部隊は独立歩兵第301大隊の第１中隊（以下・大石部隊）で1944年（昭和19）12月17日から竹富国民学校（現・竹富小中学校）に駐屯した。米軍の予想上陸地域を島の南海岸と想定し、大石部隊は水際陣地として当該地域に銃眼を構築した。構築作業には兵隊だけでなく島民の男子も徴用され、石鑿と爆薬を使用したという。大石部隊は島の最高標高であるンブフルの丘の地下に南北に通ずる壕を構築したが、構築作業の途中で終戦した。現在、４ヶ所あったとされる壕口は全て埋められてしまっている。

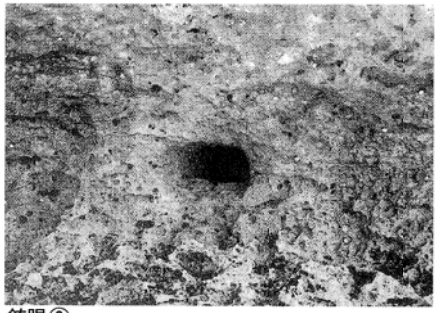


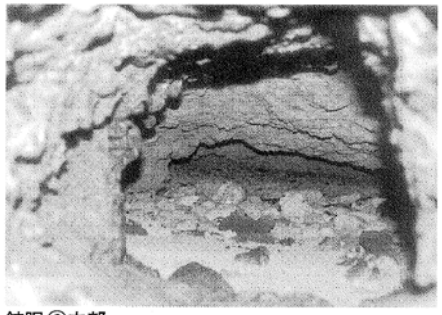
第 32 図　銃眼③内部平面図



第 33 図　竹富島南海岸の銃眼配置図


銃眼⑦遠景（南東から）


銃眼②


銃眼②内部

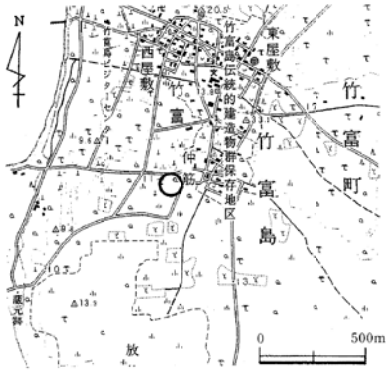
銃眼③内部に繋がる塹壕

竹富島の避難壕

戦時中の竹富島の避難壕は聞き取り調査などで２ヶ所確認することができた。1945年（昭和20）４月頃から竹富島も空襲が激しくなり、住民は集落の周辺にある自然壕に避難していたが、後に西表島の東部に位置する由布島や、由布島の対岸に位置する慶田城山などに疎開させられた。

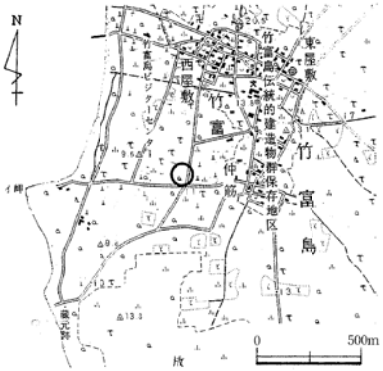
2.ヤンガー

仲筋集落の西はずれに位置する自然壕で、戦時中は仲筋住民が避難壕として利用していた。南東向きの開口部から内部に下りる階段がつくられており、二方向に分岐する。北方向へ進む壕は壕口からの流土が著しく、奥は完全に埋没している。一方、北西方向へ進むと内部は広く、奥行も25m程ある。地下水が天井から染み出しているため内部の湿度は非常に高い。また、内部には石積み、石段が見られるが、これは戦後構築されたものである。



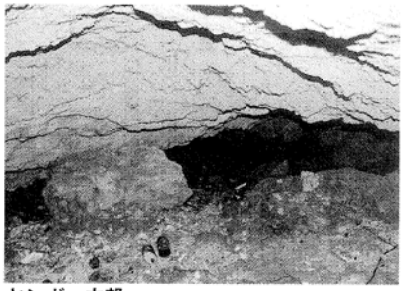
3.ティラクガマ

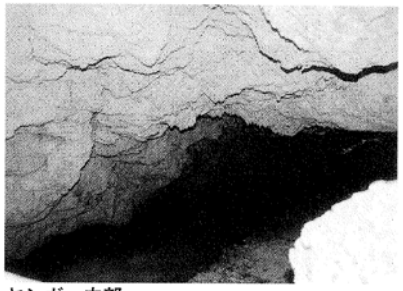
集落の周りを走る外周道路からコンドイ浜へ行く交差点の北側に位置する自然壕で、西集落の住民が避難したといわれる。雑木に覆われた壕は西方向に開口し、付近には石積みや石段も見られる。内部はヤンガーよりは狭く二方向に分岐している。南東方向に進むと別の壕口が見られるが、ほとんど埋没している。聞き取り調査で確認された避難壕で、今回初めて報告するものである。



ヤンガー遠景（南から）

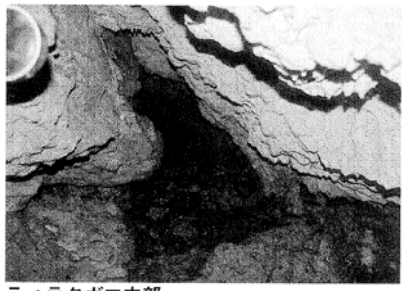
ヤンガー入口


ヤンガー内部


ヤンガー内部

ティラクガマ遠景（北東から）

ティラクガマ入口


ティラクガマ内部

ティラクガマ入口埋没状況

8.アールムティの特攻艇秘匿壕

所在地：竹富町小浜
立地（標高）：海岸（約0ｍ～5ｍ）
形態：人工壕
種別：秘匿壕
現状：内部は落盤している箇所有り
保存状況：海岸に放置
築造者：第26震洋隊
築造年月日：1945年（昭和20）
戦時中の使用状況：特攻艇の秘匿壕として利用
主な遺構：壕

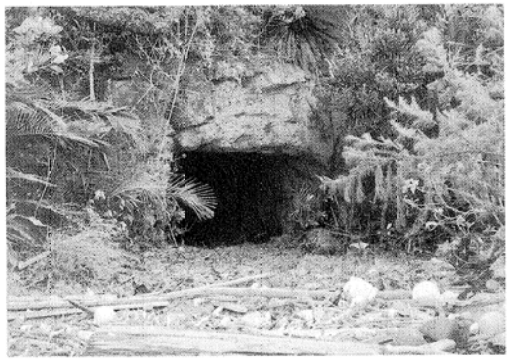
概　要

小浜島の東部に位置するアールムティと呼ばれる海岸には、戦時中、第26震洋隊が構築した特攻艇秘匿壕が現存している。砂岩の岩盤が露頭している地域に掘りこまれた秘匿壕は、壕口が海岸に迫っていることから、特攻艇を秘匿し、迅速に出撃するのに適した地形であることが窺える。

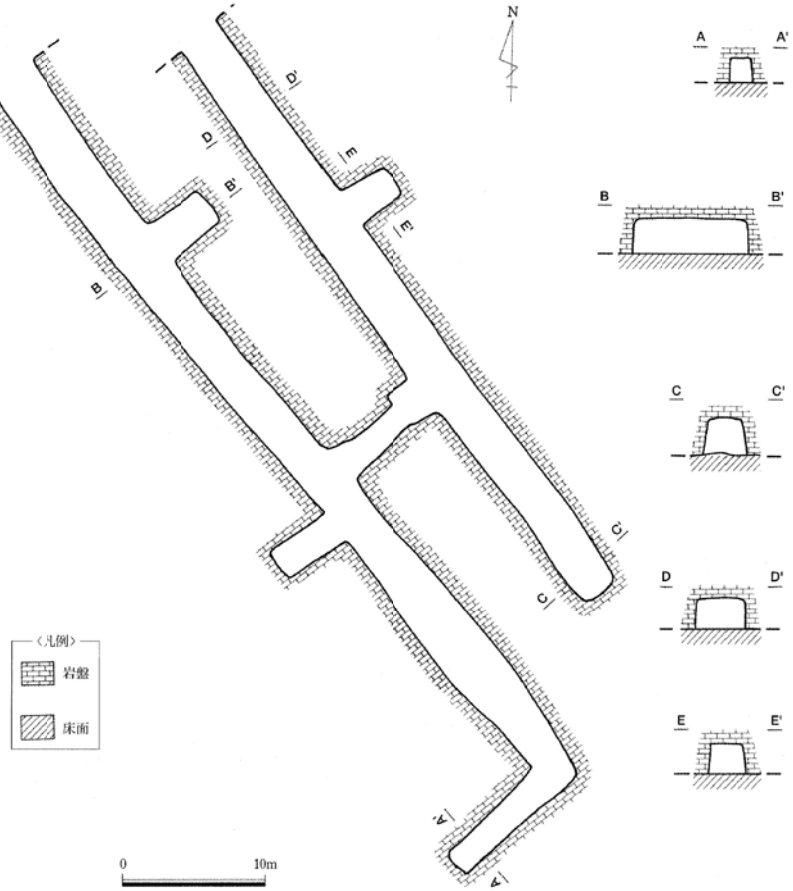
壕は開口部が北西向きの２本の壕を内部で連結した平面形で「H」状の構造をなしている。壕の総延長は約130ｍの距離を測り、奥行４ｍ～５ｍの小部屋を３ヶ所有する。壕の幅は2.6ｍ～3.5ｍ、高さは2.0ｍ～2.6ｍで方形に近い形でに掘られている。開口部は壁、天井ともにほぼ原型を留めているが、内部は粗加工になり崩落して土砂が堆積し、連結部の入口は埋没しかかっている。開口部付近の壁と天井の角にあたる部分には坑木をはめ込んだ円形の部材痕が３ヶ所確認できた。また、開口部には、秘匿壕を構築した第26震洋隊の戦没者供養の卒塔婆が置かれていたが、現在は壊されたまま放置されている。

小浜島には1945年１月31日、第38震洋隊（旅井部隊）が駐屯したが、基地の作戦配備上の問題で１ヶ月後、石垣島の宮良に移動したため、後任部隊として第26震洋隊（以下、引野部隊）が小浜島に駐屯することになった。引野部隊は当該地域であるアールムティの海岸に特攻艇の秘匿壕を構築した。構築作業には

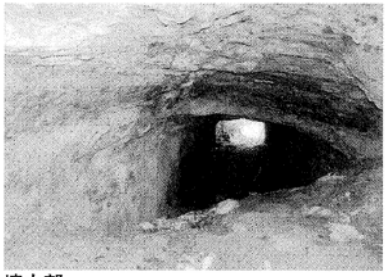
遠景（北から）

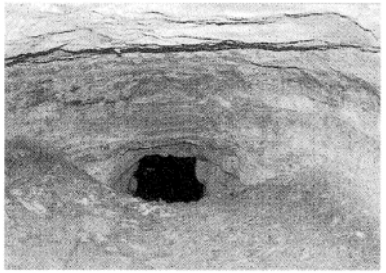

秘匿壕入口

朝鮮人軍夫をはじめ、地元住民も徴用された。壕内は坑木で補強するために松木が利用された。当時、島内は松林が繁茂していたが、壕や兵舎を構築するためにほとんど伐採されてしまったという。戦後になって、壕内部の坑木は全て小浜住民が解体したとのことである。



第 34 図　アールムティの特攻艇秘匿壕平面図・断面図


壕内部


壕内　連結部入口

壕内部　小部屋

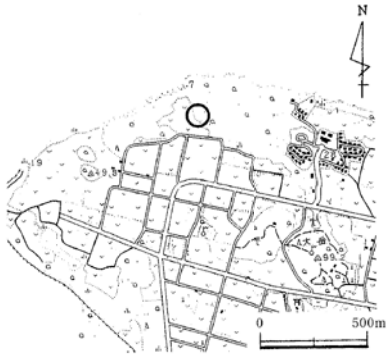
壕内部天井　部材痕

壕入口付近　卒塔婆散乱状況

小浜島の避難壕

小浜島で現在も残る避難壕は２ヶ所確認することができる。戦時中、小浜島では住民に対する島外への疎開命令が出されていなかったため、終戦まで島内避難することとなった。空襲が始まった際は、住民は各家の中にあらかじめ掘り込んであった簡易な防空壕や畑小屋などに避難し、後に空襲が激しくなると、島内にある自然壕も避難所として利用された。　現在、各家につくられた防空壕は一つも残存していない。また、島の北西端に位置するアカヤ崎周辺には、ウスメアブと呼ばれる自然壕があり、戦時中、住民が避難していたが現在はすでに崩落し、場所も明確ではないという。

9.インメーアボー



島の北側にある牛の放牧場内に位置する自然壕で、かつては住民の避難壕として利用されていた。開口部一帯が陥没しているため、現在は周囲に牛が侵入しないよう牧柵が施されている。開口部は北向きで、内部は広く不定形な部屋状になっている。一部、床面を平坦に造成したと思われる箇所も見られる。内部は広い部屋状の箇所から傾斜しながら北方向に向かっており、聞き取りによると北側の海岸まで続いているとのことである。

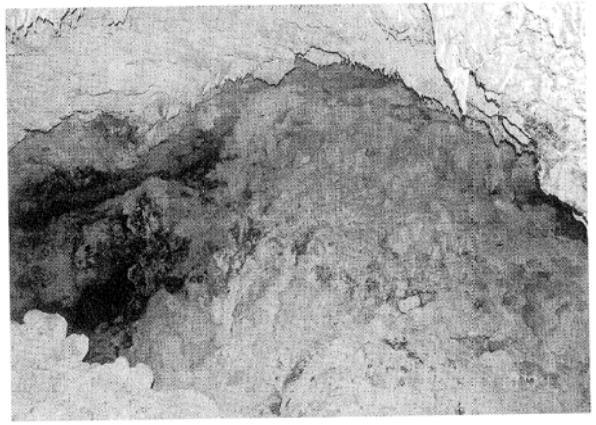
10.ニシヌハマの壕

島の北側の海岸はニシヌハマ（北の浜）と呼ばれ、琉球石灰岩の崖下に見られる海食洞をかつて住民の避難壕として利用していた。入口は狭く、内部から地下水が流れ出ている。内部は岩盤が崩落し、現在は進入することができない。聞き取りによると内部には戦前の生活道具（陶器等）が散乱しているという。

ニシヌハマ一帯は最近までリゾート施設の建設計画があったが、建設途中で中止となったため、避難壕周辺は地形の改変はなされず、当時のまま残存している。

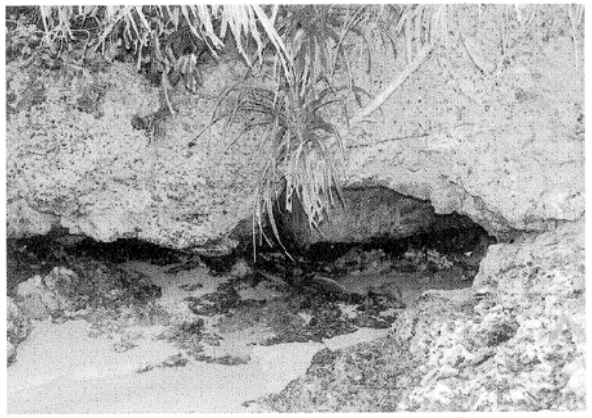
インメーアボー遠景（南から）

インメーアボー入口

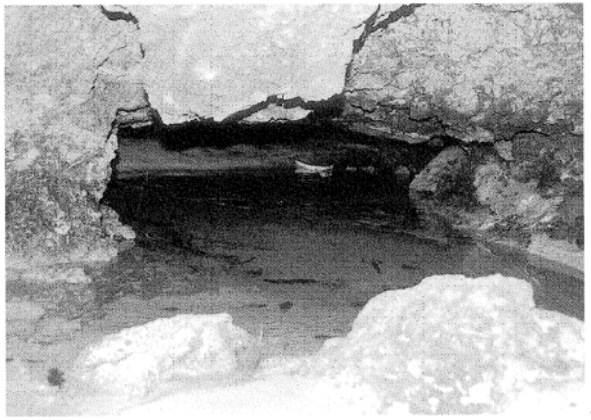


インメーアボー内部

ニシヌハマの壕遠景（西から）



ニシヌハマの壕入口



ニシヌハマの壕内部

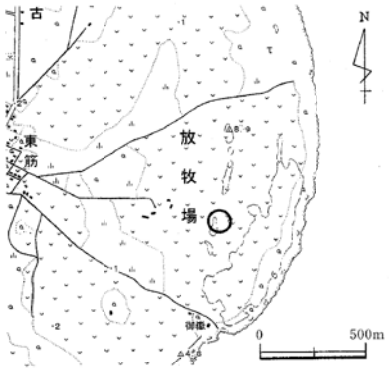
黒島の避難壕

戦時中、黒島には旧日本軍の部隊が配備されていなかった。住民は空襲に備え各家に簡易な防空壕を構築し、黒島国民学校（現・黒島小中学校）にも敷地内に９ヶ所の防空壕を掘り、『教育勅語』及び重要書類などを保管したという。これらの防空壕の他に自然壕も避難場所として利用された。後に、空襲が激しくなると住民は軍命により、西表島に強制疎開させられた。

現在は住民が構築した人工の防空壕は一つも残存せず、沖縄戦時に関係する戦争遺跡としては集落周辺に２ヶ所、認めることができる。戦後、黒島は集落以外の土地を牧場として利用するため地形改変が進み、戦時中、住民が避難したいくつかの壕も埋められたと想定される。

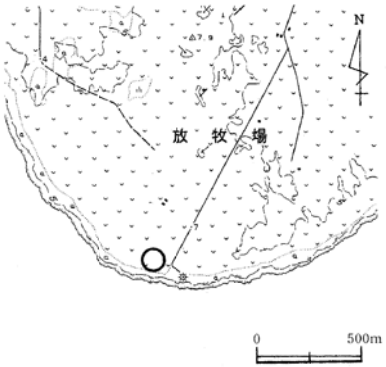
11.東筋の避難壕

黒島で最大の集落である東筋集落の南東に位置する牧場内には、かつて東筋の住民が避難した自然壕が現存する。壕周辺は平坦な牧草地で、当時の面影を残すものは見られない。開口部は長さ90㎝の三角形状となり垂直に開口しているため、普段は牛が内部に落下しないように鉄板が敷かれている。内部は南東・南西・北西の三方向に広がり、遺物や加工痕が見られないことから、おそらく一時避難の壕として利用されたものと考えられる。

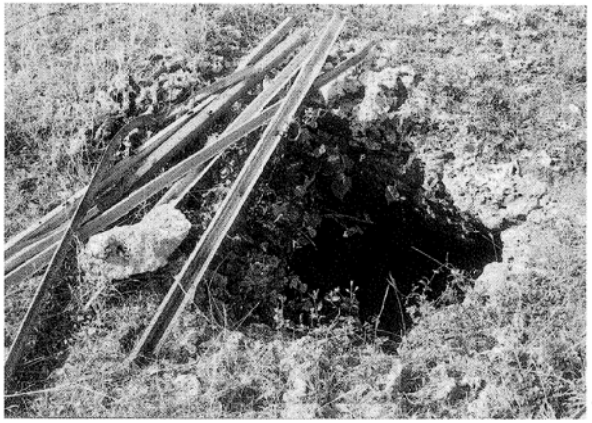


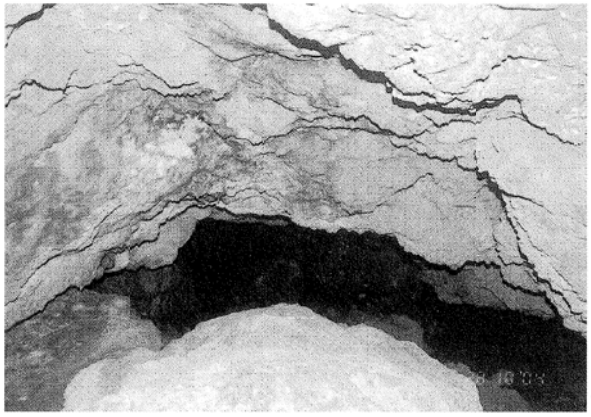
12.仲本の避難壕

島の最南端に位置する黒島灯台の西側には戦時中、仲本集落の住民が避難した自然壕が現在も残る。海岸近くに位置する壕は牧場の敷地からわずかに外れており、現在はアダンが密生している。開口部は東向きで幅90㎝、高さ80㎝を測る。内部は狭く、大人数を収容することはできないが、床面が平坦で、加工した可能性も考えられる。内部は狭まりながら北西方向に向かって続いていく。

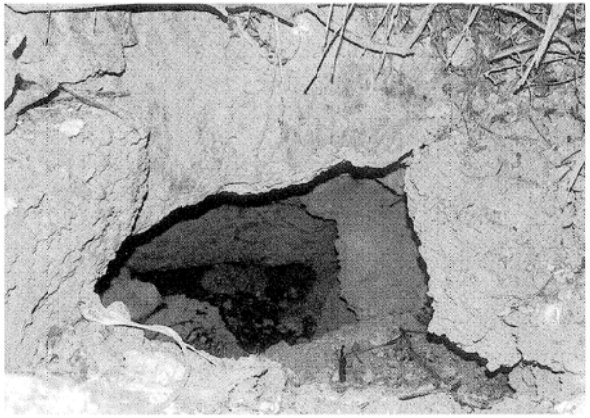


東筋の避難壕遠景（南西から）

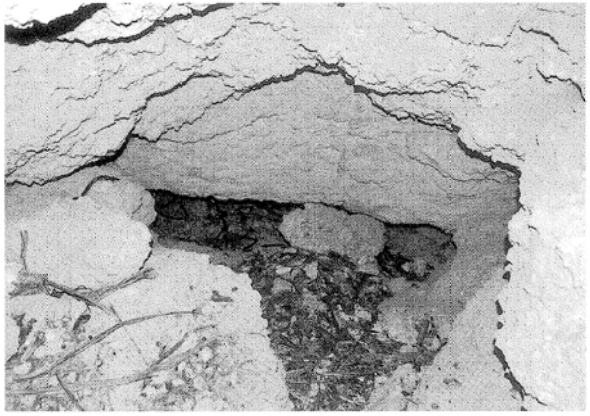

東筋の避難壕入口


東筋の避難壕内部

仲本の避難壕遠景（北から）



仲本の避難壕入口



仲本の避難壕内部

新城島の避難壕

新城島の避難壕は上地に２ヶ所、下地に１ヶ所確認することができた。1941年（昭和16）に沖縄県営自作農創設未墾地開発事業計画に基づいて、西表島の大原に新城島（上地・下地）の住民を移住し、新集落を創設していた。当該地域の避難壕は、移住せずに島に残っていた住民が空襲の際に使用した壕である。

13.ニスヌガマ

上地の港桟橋の北西側にはニスヌガマ（北のガマ）と呼ばれる波の浸食を受けた石灰岩（ノッチ状）の地形が北西―南東方向に約40ｍにわたって見ることができる。聞き取りによると、ニスヌガマは上地に空襲が始まるようになった際の最初の住民避難地とのことである。戦時中は、住民が避難できるように石灰岩をはつり、柱を建て茅葺で擬装していたという。現在、石灰岩をはつったという加工痕を確認することはできなかった。後に、空襲が激しくなるとニスヌガマは危険となり、上地の住民は島の中央部に位置する自然壕に避難した。

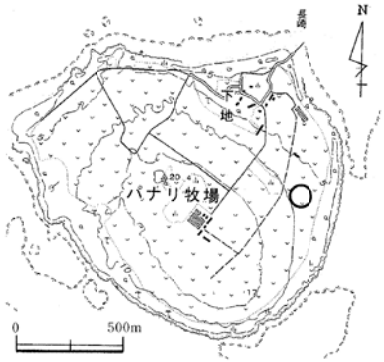
14.ゲーツヌアブ

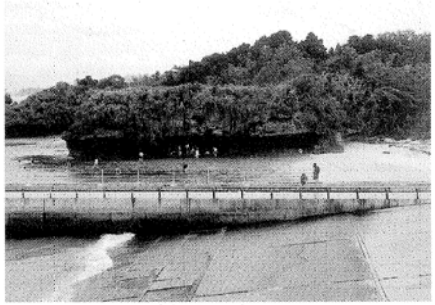
先述したように最初、ニスヌガマに避難していた住民が、空襲が激しくなり後に移動した自然壕である。ゲーツヌアブは上地集落から南東に位置する旧畑跡に立地し、現在は原野となっている。開口部は西向きで、開口部の側壁、天井は長方形に加工されている。幅1.6ｍ、高さ0.6ｍを測る。内部は開口部からすぐ円形に近い部屋状になっており、東方向に続いているが埋没しており、侵入は困難である。内部は湿度が非常に高く、結露している。聞き取りによると壕は島の東海岸まで続いていたという。

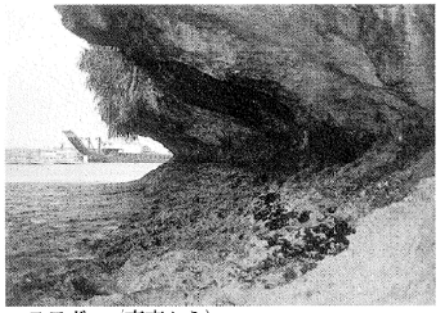
15.フツァーミアブ

戦時中、下地の住民が避難したといわれる石灰岩の自然壕である。島の東部に位置し、牧場の敷地内に現在も残る当該の壕は、周辺が平坦に造成されており、旧地形を窺い知ることはできない。壕は開口部を２ヶ所有し、いずれも南西向きである。２ヶ所とも開口部は狭く幅70㎝～80㎝、高さ40㎝～60㎝程であるが、内部で連結し広くなっている。

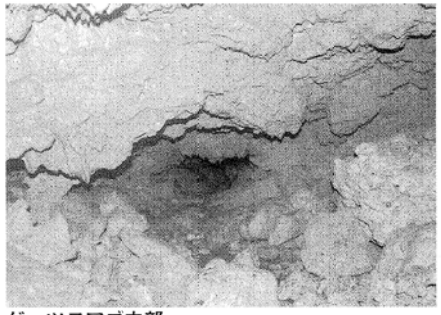
下地の住民が戦時中、避難した自然壕は当該の壕であるフツァーミアブとウフフツアブと呼ばれる２ヶ所であったが、ウフフツアブは今回、確認することはできなかった。

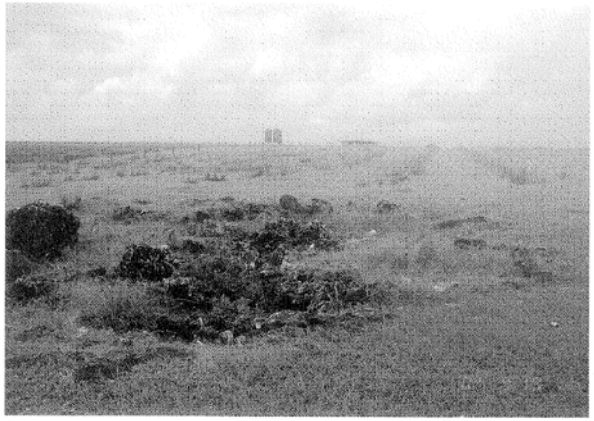



ニスヌガマ遠景（南西から）

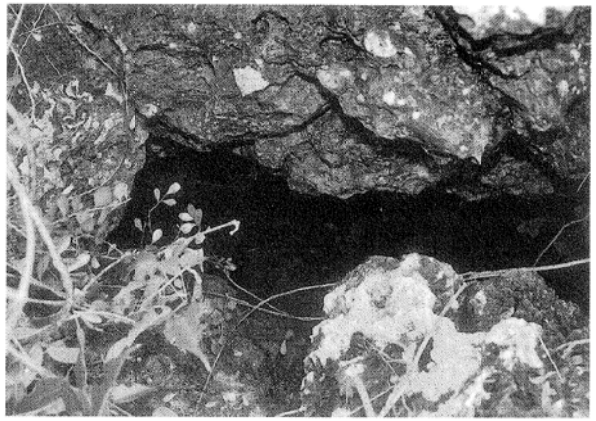

ニスヌガマ（南東から）

ゲーツヌアブ入口


ゲーツヌアブ内部


フツァーミアブ遠景（南東から）

フツァーミアブ入口


フツァーミアブ内部

波照間島の避難壕

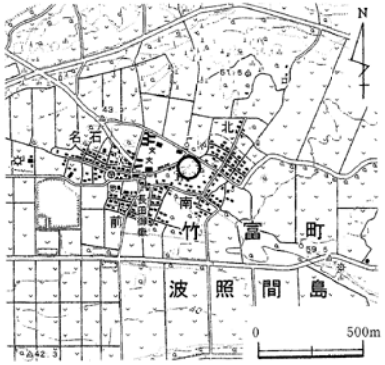
波照間島の住民は戦時中、疎開先の西表島の南東部に位置する南風見避難所でマラリアに罹患し、多数の死者を出したことで知られている。波照間島の戦没者は全住民の約3割で、全戦没者のうち、マラリア罹患死者は約9割以上に達するというものであった。

波照間島の沖縄戦時に関係する戦争遺跡は自然壕が2ヶ所、認めることができるが、住民避難壕と、先述した「マラリア地獄」のきっかけとなる疎開命令に対する協議が行われた壕について報告する。

17.北集落の避難壕

波照間島の中央に集中する4集落の内、北集落の住民が戦時中、避難したといわれる自然壕が現存する。壕は北集落の西に位置し、一帯はドリーネ状の地形になっている。開口部は南東向きで、開口部を塞ぐように石積みが構築されているが、いつ頃構築されたかは不明である。内部は産業廃棄物と土砂が堆積し、奥は埋没している。

聞き取りによると、当該の壕の北側には、現在鉄塔が建てられているが、その地下にはかつてさらに大規模な自然壕が存在していた。当時はそこから壕の中に避難し、当該の壕まで貫通していたとのことだが、鉄塔の建設工事をする際に埋められてしまったという。



18.キッパリヤマの壕

波照間島の南東部には、キッパリヤマと呼ばれる、グスク時代に構築したとされる石墨遺構が現存しているが、遺跡の東に位置する農道沿いには自然壕が有り、戦時中、軍と地元住民が疎開命令に対する協議を行った場所である。壕の開口部は北向きで、内部は南西方向に延びていくが、開口部、内部ともに埋没しかかっており、進入することはできない。内部は産業廃棄物が流入している。

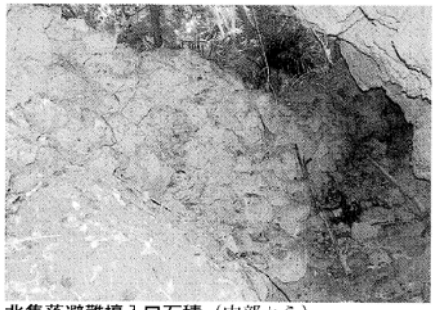
先述した当該の壕が疎開命令に対する協議に使用された、という記述は『沖縄県史　10沖縄戦記録2』の155頁に記載されている。一部要約すると、戦時中、波照間島には旧日

本軍の部隊は配置されてはいなかったが、軍命により離島残置工作員である山下虎男氏（本名·酒井清）が青年学校の教員と称して島に赴任した。1945年（昭和20）1月頃から波照間島にも空襲が行われるようになり、同年3月下旬、疎開命令が玉盛淳博竹富村長を通して、学校長や集落の各班長に伝達された。その後、疎開に向けての協議が数回行われ、先述したようにキッパリヤマの壕も協議に使用された。この時協議に居合わせた山下氏は、疎開を拒否する人に対し、抜刀して威嚇、疎開を強要した。このキッパリヤマの壕での協議を最後にして、翌日から疎開の準備が急速に行われたという。

当該の壕が疎開に向けての協議に使用された後に、住民が「マラリア地獄」といわれる程多数の死者を出したという歴史的事実を踏まえると、キッパリヤマの壕は重要な意味をもつ戦争遺跡として認識できるといえる。

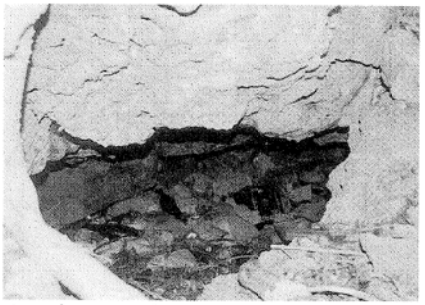
北集落避難壕遠景（南西から）

北集落の避難壕入口


北集落避難壕入口石積（内部から）

キッパリヤマの壕遠景（南東から）

キッパリヤマの壕入口


キッパリヤマの壕内部

鳩間島の避難壕

鳩間島は戦時中、大型爆弾や焼夷弾の投下、機銃掃射など米軍の空襲が激しかった地域である。その理由を住民は「集落の海岸線に建つカツオ工場を軍事施設と間違えていたのではないか」と推測している。空襲が始まりだした頃は、後述する島内の自然壕などに避難していたが、後に空襲が激しくなる中で、軍命により、西表島への強制疎開が住民に下された。西表島に疎開した住民は、食料を確保するため、空襲の無い夜間にクリ船で島に渡り、畑から芋などを掘って疎開地に戻るという生活を度々繰り返していた。

19.アンヌカー

鳩間集落の東側に位置する井戸で、鳩間島に集落を立てる際、最初に発見された井戸であるとの言い伝えが残っている。戦時中は集落の東側に住む住民の避難壕として利用されていた。

アンヌカーは自然洞窟の中にある下り井戸で、南向きに開口し、内部まで石段が続いている。その左右には土留めの石積みが造られているが、聞き取りによると、石積みがいつ頃造られたかは不明であるが、戦前には既に現在の状態にはなっていたようである。井戸の深さは約７ｍ程で、奥の方は現在でも水が溜まっている。内部は比較的湿度が高く、外部に比べ気温が高いように感じられた。内部には貝殻などが多く散乱しており、おそらく戦後のものと思われる陶器片も見られた。また、外からの流れ込みなのか、大きな石が入り込んでいた。

アンヌカーは、現在でも特別な場所として島の住民が大切に管理している。

アンヌカー遠景（南東から）

アンヌカー入口

20.パチンガカー

島の中央部に位置する原野に垂直に開口する自然壕があり、戦時中は集落の西側に住む住民が避難壕として利用されていた。

開口部は三角形状で長さ約１ｍ弱である。開口部を下りると、王府時代から造られたとの言い伝えが残る、石積みを伝って下ることができる。石積みを下ると、北方向に続く横穴が見られる。内部は非常に湿度が高いため、滑りやすくなっている。

当該の壕は聞き取り調査によって、戦時中の避難壕として確認されたもので、今回、初めて報告するものである。

アンヌカー内部（最奥部）

パチンガカー遠景（南から）

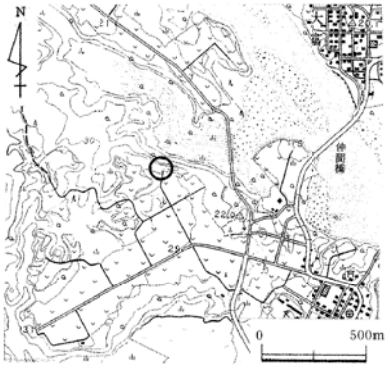
パチンガカー入口

パチンガカー内部石積

西表島の避難壕

西表島は東部から西部にかけて点在する集落によって、戦時中の住民の避難状況が異なっている。東部の大原、古見、北部の船浦、上原は自然壕を利用し、西部の干立、祖納、白浜、船浮には人工壕を構築している状況が見られる。とくに西部においては1941年（昭和16）から建設された船浮要塞によって軍隊が駐屯し、近隣住民に壕掘りなどの陣地構築を奉仕作業として行わせた背景があり、上記した人工の避難壕も各集落の住民が自力で構築できる状況であったと考えられる。また、加工が施しやすい砂岩に掘り込まれているのも特徴である。

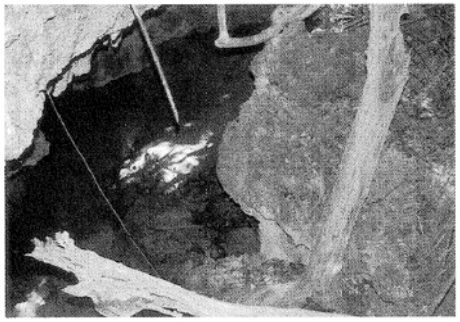
21.大原のフサトゥルバー



大原集落の北西に位置する自然壕。戦時中は大原集落の住民が避難壕として利用していた。壕は開口部を２ヶ所有し、南北方向に貫通している。壕の北側は急斜面で下部には仲間川の支流が流れている。内部には長さ約５ｍに亘って石灰岩の石積みが見られるが、戦時中に構築されたかは不明である。

大原集落は1941年（昭和16）に沖縄県営自作農創設未墾地開発事業計画に基づいて、新城島（上地島・下地島）の住民を移住して形成された集落である。戦時中は区画整理された集落が米軍から軍事施設と間違えられ、攻撃目標となったため、機銃掃射や爆弾投下が激しかった。当該壕へ避難していた人への聞き取りによると、壕内にはおおよそ100人程避難しており、茅葺きの屋根を葺いて生活していた。昼間は空襲を避けるため壕内で過ごし、夜間に畑に行って芋などの食料を確保していたとのことであった。

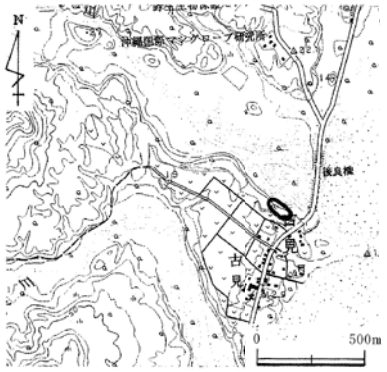
大原のフサトゥルバー遠景（南から）

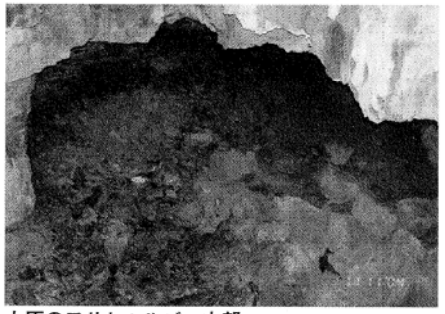

大原のフサトゥルバー入口

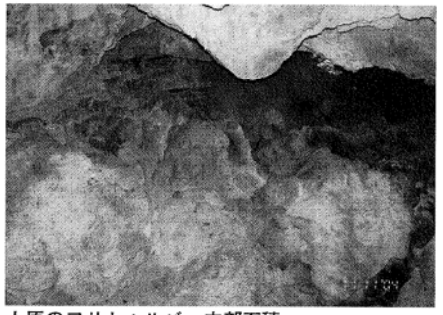
22.古見の避難壕

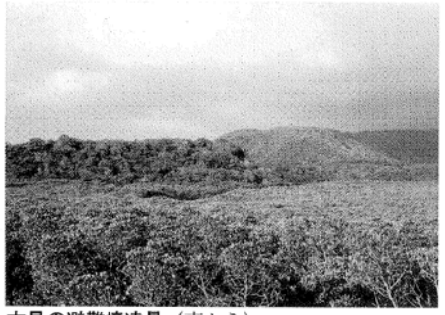
古見集落の北方を流れる後良（シイラ）川の南岸には石灰岩崖が形成され、岩陰が点在している。戦時中はその岩陰を古見集落の北側に住む人々が避難場所として利用していた。避難壕となった岩陰は３ヶ所確認された。２ヶ所は北向きに開口し、いずれも奥行は浅い。壕の北側は後良(シイラ）川まで下る急斜面になっている。もう１ヶ所は南向きに開口し、畑に隣接している。聞き取りによると壕周辺は、戦時中荒廃地であったとのことである。

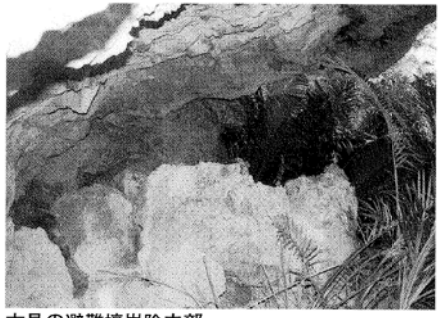
また、集落の西側にも自然壕があり、集落の南側に住む人々が戦時中、避難していたが、現在は畑地に圃場整備され、埋められてしまったという。



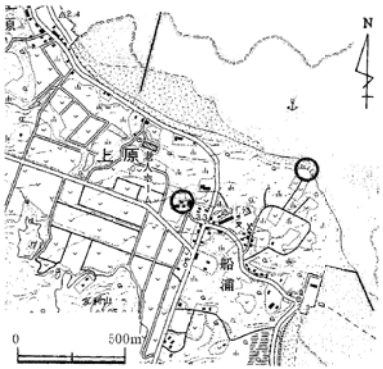

大原のフサトゥルバー内部


大原のフサトゥルバー内部石積


古見の避難壕遠景（東から）


古見の避難壕岩陰内部

23.船浦の避難壕・ヒナイ崎の壕



船浦地域には戦時中に避難壕として利用された自然壕が２ヶ所現存する。共に鳩間島の住民が使用した壕である。

船浦集落の西、現在、宿泊施設へ至る道路の地下には石灰岩の自然壕が見られる。南北方向に貫通し、高さは目測であるが約６ｍ近くある。内部には小川が流れ、現在は南側開口部に産廃物が堆積している。

船浦集落の北方、通称：ヒナイ崎と呼ばれる海岸には、戦時中、鳩間島の住民が避難した自然壕が現存する。砂岩が侵食されてできた自然壕で、北向きに開口する。開口部は流土が著しく、内部は産廃物が堆積している。内部は高さ1.2ｍ、奥行約10ｍを測り、何ヶ所か崩落しているところが見られる。

船浦・上原地域を含む西表島北部は、戦前から鳩間島の住民が通耕農業を行っており、稲作や畑作など農地として利用してきた。戦時中も、船浦で農作業をしていた住民は、空襲を避けるために当該壕へ避難していたという。

24.上原の避難壕

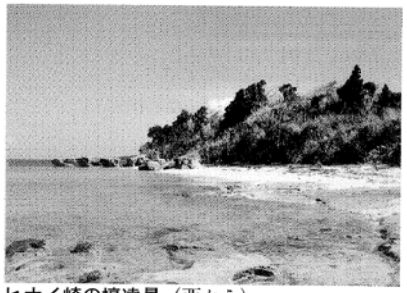
上原集落の北西、現在は牧場の敷地内に戦時中、上原の住民が避難した自然壕が現在も残る。石灰岩で形成された自然壕で南向きに開口する。内部は下方へ傾斜しながら進むが足場は極めて悪い。聞き取りによると、戦時中は開口部前で炊事を行い、開口部付近の内部で莫蓙や板を敷いて生活していたとのことだが、現在はその痕跡は見られない。

上原集落は近世期に西表村番所が祖納から上原に移転したことに伴い、上原村を立村したがマラリアなどで大正末期に廃村に追い込まれた。戦時中の上原は、炭鉱の坑夫の家族や、通耕農業を止め、定住した鳩間島の住民などが小規模な集落を形成していた。

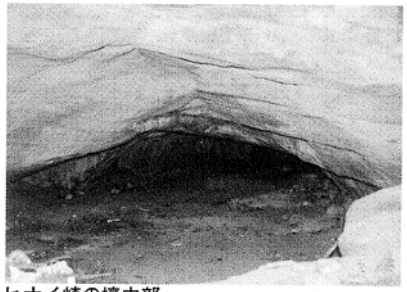
船浦の避難壕遠景（南東から）

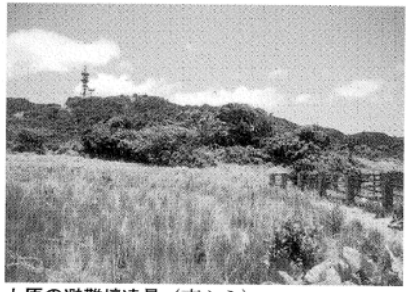
船浦の避難壕内部

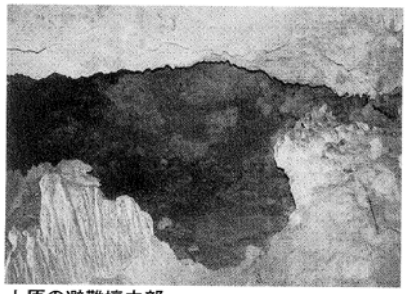
船浦の避難壕　壕口左側集石


ヒナイ崎の壕遠景（西から）

ヒナイ崎の壕入口

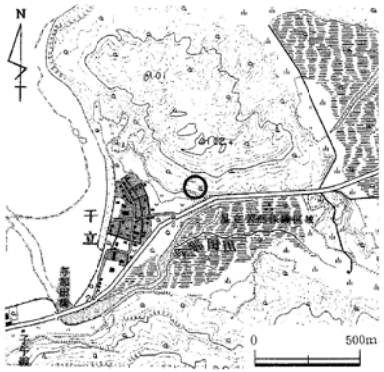

ヒナイ崎の壕内部


上原の避難壕遠景（東から）


上原の避難壕内部

25.干立集落入口の壕

所在地：竹富町西表
立地（標高）：丘陵（約10ｍ）
形態：人工壕
種別：住民避難
現状：開口部が一部埋没
保存状況：集落入口脇に放置
築造者：干立住民
築造年月日：1944年（昭和19）頃
戦時中の使用状況：干立住民の避難壕として利用
主な遺構：壕



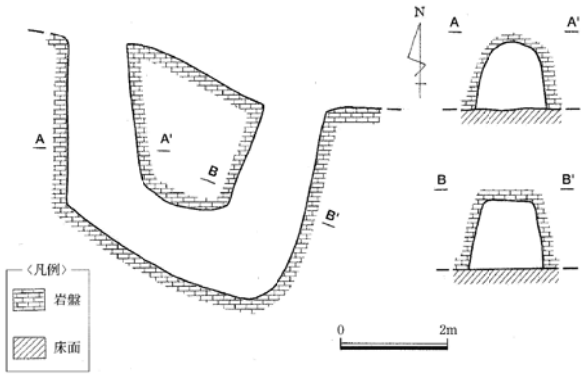
概　要

県道215号線を浦内から干立方面へ進むと、干立集落に入る直前に標高102ｍの金座山が右手に見えてくる。その金座山の麓に位置する用水路沿いには戦時中、干立集落の住民が第１避難所として利用した避難壕が１基、現存する。

壕は砂岩に掘り込まれており、南向きの開口部が２ヶ所、内部で「コ」の字状に連結している。開口部は１ヶ所土砂で半分ほど埋没し、内部にまで流入している。内部は幅１ｍ～1.4ｍ、高さ1.2ｍ～1.4ｍを測り、天井は一部崩落している箇所が見られるものの、場所によって、アーチ状や台形状に形成されている。壁や天井にはノミやつるはしによる掘削痕が多く残り、壁の両側に対応した部材痕が３ヶ所ずつ見られる。

戦時中、空襲の激しかった西隣の祖納に比べて、干立には空襲による直接の被害はなかったといわれる。しかし、軍命により住民は当該の壕から干立集落の南東に位置する祖納岳東方の山中に避難させられた。

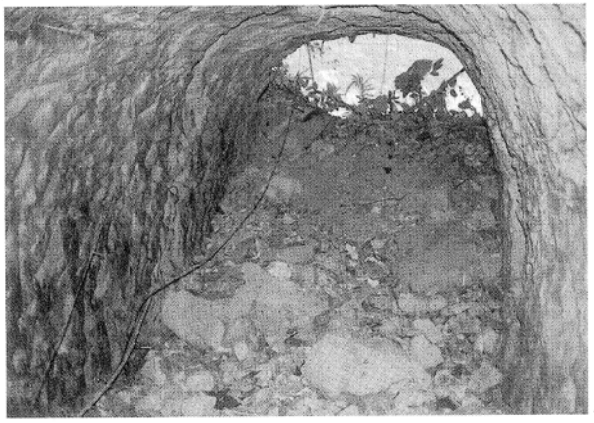
遠景（南西から）



第 35 図　干立集落入口の壕平面図・断面図

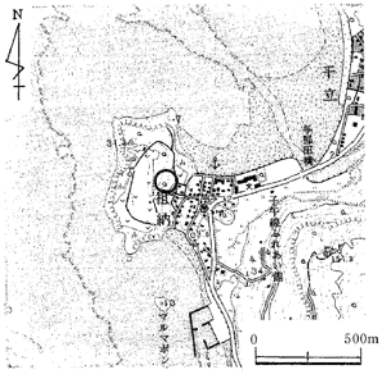
壕入口

壕内部　部材痕


入口埋没状況（内部から）

27.金田家の壕

所在地：竹富町西表
立地（標高）：平地（約10m）
形態：人工壕
種別：住民避難
現状：残存状況は良好
保存状況：粟野家が管理
築造者：祖納住民
築造年月日：1941年（昭和16）頃
戦時中の使用状況：祖納５班の避難壕として利用
主な遺構：壕

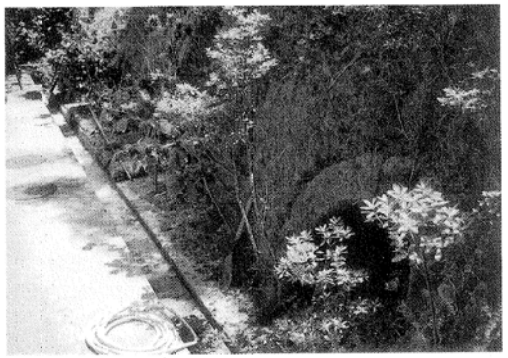


概　要

祖納集落の西側は半島状の丘陵地形を形成し、麓には砂岩の岩盤が露頭している地域が見られる。戦時中は、祖納５班の住民が砂岩を掘り込み避難壕として利用していた。祖納に在住する粟野ユリ氏宅の敷地内には砂岩の岩盤が露頭しており、掘り込まれた避難壕が現存する。

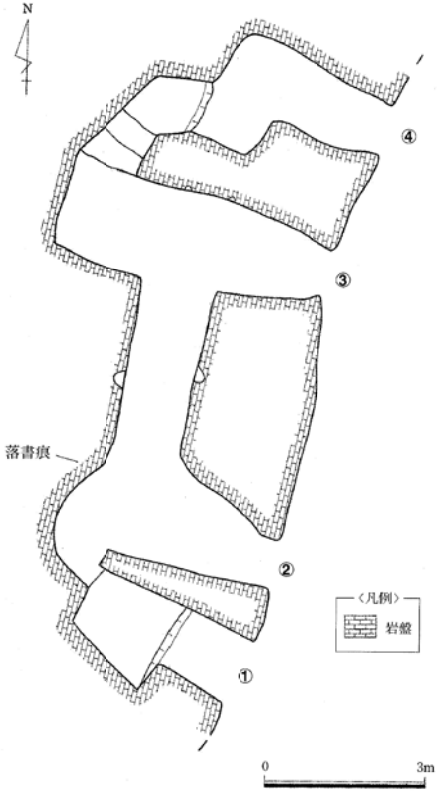
４ヶ所の開口部は全て東向きで、内部で連結した複雑な構造をなしている。開口部の幅は0.9m～1.3m、高さ0.7m～1.1mで、天井の形状がアーチ状やかまぼこ状、半アーチ状など様々であり、内部においても場所により形状の違いが見られる。内部は砂岩に掘り込まれているため、壁や天井の至る所に工具の掘削痕が見られ、丁寧に構築されているのが窺われる。また、内部には小部屋が１ヶ所、階段が２段、部材痕や灯り取り等も見られ、側壁には「昭和廿年五月」と当時のものと思われる落書痕が現在も見ることができる。一部冠水している部分も見られるが、内部の現状はほぼ保たれている。

金田家の壕を所有する粟野ユリ氏への聞き取りによると、壕は1941年（昭和16）から空襲に備えて構築されたという。祖納集落では戦時中、１～５班に分かれており、当該の壕は５班の避難壕として利用された。空襲の際には10～20名が壕に避難しており、壕に入りきらない時には、金田家の南隣に構築されていた森山家の壕も利用したという。

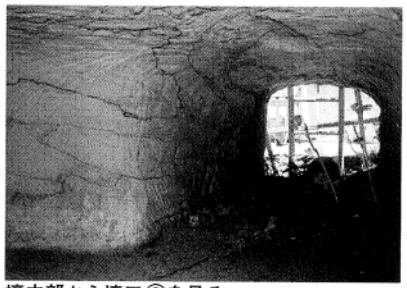

壕口近景（北から）

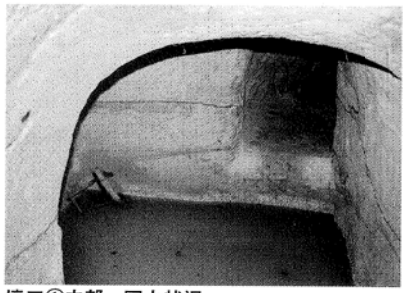
壕口③

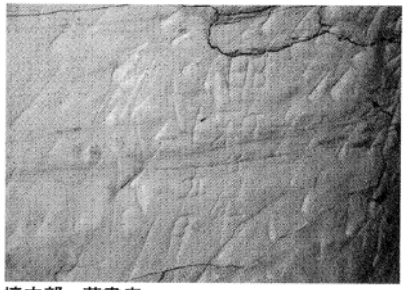
森山家の壕は金田家の壕と同様、祖納5班の避難壕であるが、砂岩の岩盤に２ヶ所の開口部が確認できる程度で、内部は完全に埋没している。聞き取りによると、森山家の壕は２ヶ所の開口部が内部で「コ」字状に連結し、段を有していたという。また、戦時中の状況では祖納集落への空襲が激しくなってきた頃に、住民が森山家の壕へ避難する途中、機銃掃射により壕前で命を落としたといわれている。



第 36 図　金田家の壕平面図


壕内部から壕口②を見る

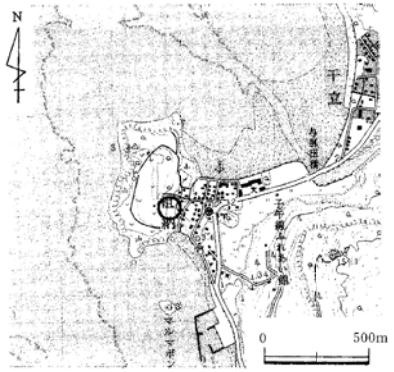

壕口①内部　冠水状況


壕内部　落書痕

森山家の壕　入口埋没状況

28. 松山家の壕

所在地：竹富町西表
立地（標高）：平地（約10ｍ）
形態：人工壕
種別：住民避難
現状：残存状況は良好
保存状況：松山家が管理
築造者：祖納住民
築造年月日：1944年（昭和19）頃
戦時中の使用状況：祖納５班の避難壕として利用
主な遺構：壕



概　要

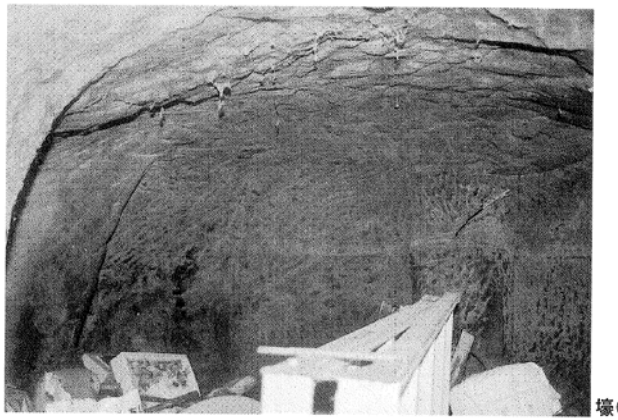
金田家の壕から約50ｍ南に位置する松山家の敷地内には、戦時中、祖納５班の住民が避難した壕が現在も残る。

金田家の壕と同様、露頭している砂岩の岩盤に掘り込まれている。壕は３ヶ所で開口部は壕①が東向き、壕②が西向き、壕③が北向きである。開口部の形状は壕①がかまぼこ状で幅1.1ｍ、高さ1.3ｍ、壕②は半アーチ状で幅0.9ｍ、高さ1.1ｍを測り、２ヶ所とも開口部に縁取りの加工痕が見られる。なお、壕③は2004年（平成16）10月の台風により当該の壕が一部崩落したという情報を得た後に、調査したところ新たに確認された壕で、開口部がほとんど埋没しかかっていた。壕①、壕②の内部は現在、松山家の倉庫として利用されており、内部に進入することはできない。壕①と壕②の間には３ヶ所小さな横穴が掘られ、そのうち１ヶ所は壕①の内部まで貫通しており、内部からの覗き孔として使用されたと思われる。

聞き取りにより、松山家の壕の南にも砂岩を掘り込んでいる壕を２ヶ所確認した。松山家の敷地内ではなく、壕一帯は雑木に覆われた状態である。２ヶ所の壕は開口部が東向きで、そのうち１ヶ所は開口部からほとんど埋没しかかっている。もう１ヶ所は奥行5m程で崩落している。いずれも戦時中は、祖納５班の住民が避難壕として利用していたという。

壕②近景（西から）

壕①入口

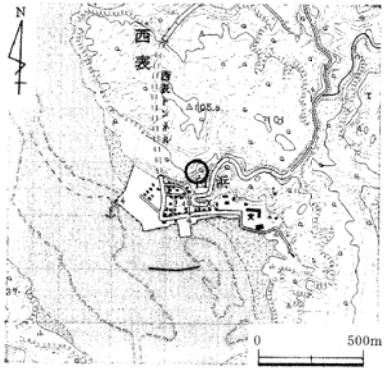

壕①内部

壕①、②間　横穴

祖納五班壕入口

29.白浜の避難壕

所在地：竹富町西表
立地（標高）：丘陵（約15m）
形態：人工壕
種別：住民避難
現状：埋没した箇所有り
保存状況：果樹園脇に放置
築造者：白浜住民、炭鉱坑夫
築造年月日：1944年（昭和19）頃
戦時中の使用状況：白浜住民の避難壕として利用
主な遺構：壕

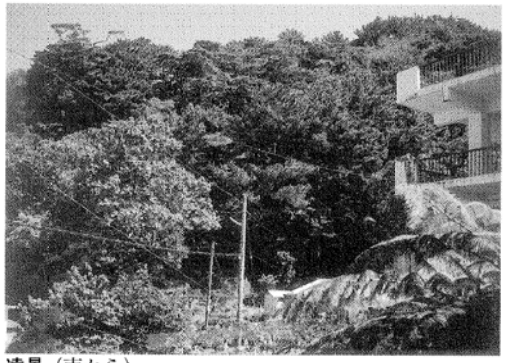


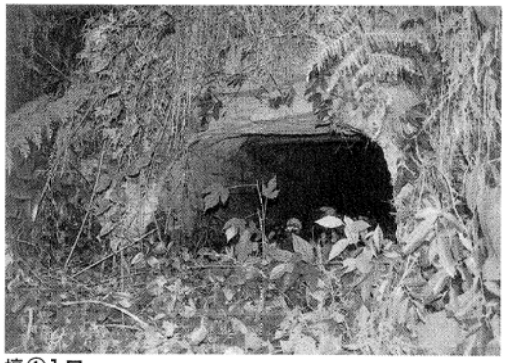
概　要

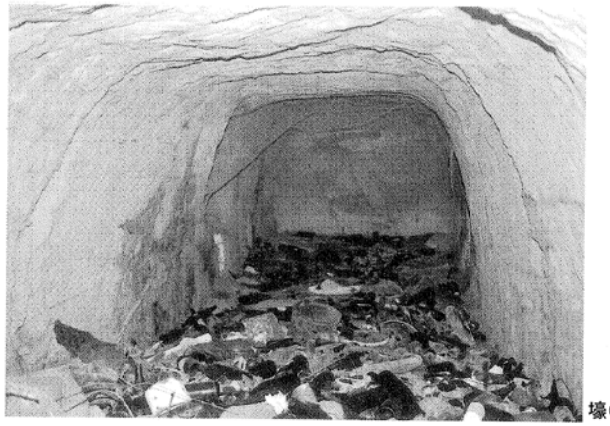
白浜集落の北側に位置する果樹園の敷地内には、戦時中、白浜集落の住民が利用した避難壕が３ヶ所現存する。

壕は谷部の南東側斜面に露頭する砂岩に掘り込まれており、３ヶ所とも南東方向に開口している。内部は現在、産廃物の捨て場となっており侵入が困難で、産廃物で殆ど埋没しかかっている壕も見られる。開口部の幅は1.5m、高さ１mで奥行は長いもので約15mを測る。平面形で一直線状に掘られ、天井はかまぼこ状に丁寧に構築されている。落盤は殆ど見られない。内部は壁・天井を廻る部材痕が残り、棚状の小部屋を有する壕も見られる。

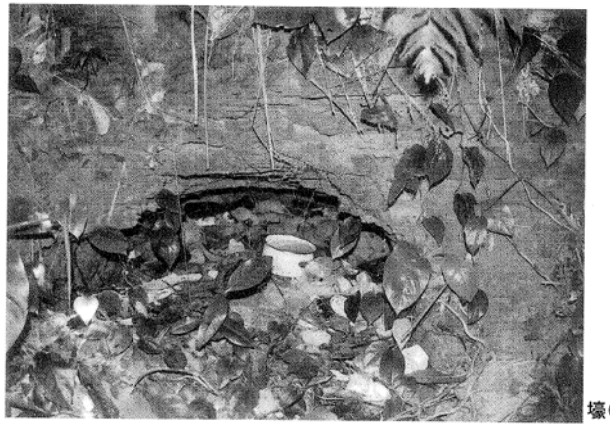
白浜集落は1913年（大正２）に炭鉱により形成された集落で、炭鉱が隆盛を極めていた時期には、住民は殆ど炭鉱関係で生計を立てていた。1941年（昭和16）に船浮要塞が設置されると、白浜もその一部に組み込まれた。集落内には電話海底線室、製氷所の他に憲兵隊分駐所も設けられた。1944年（昭和19）末頃から白浜地域を含む西表島西部は米軍機による空襲が始まり、白浜住民と炭鉱の坑夫は当該の壕を構築し、避難していたが、1945年（昭和20）３月頃には軍命により、集落の南東を流れる仲良川流域周辺に避難させられた。


遠景（南から）


壕①入口

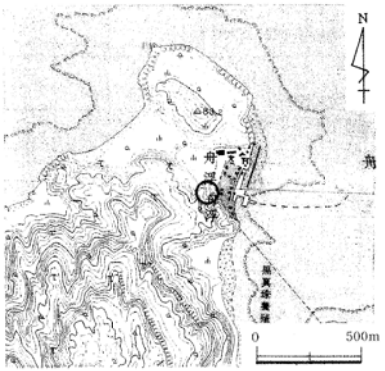

壕①内部

壕②入口


壕③入口埋没状況

30.船浮の避難壕

所在地：竹富町西表
立地（標高）：平地（約10m）
形態：人工壕
種別：住民避難
現状：開口部が一部崩落
保存状況：集落脇に放置
築造者：不明
築造年月日：1944年（昭和19）頃
戦時中の使用状況：船浮住民の避難壕として利用
主な遺構：壕

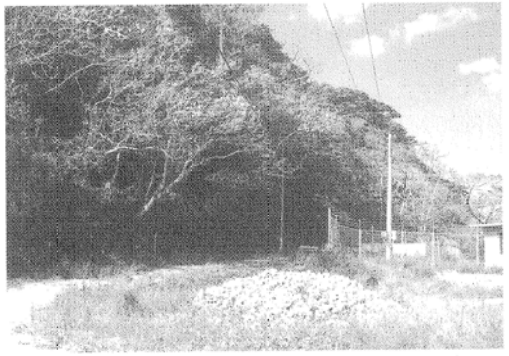


概　要

船浮集落の西、集落から裏手にあるイダの浜に通じる道沿いに、戦時中、船浮住民が利用した避難壕が現存する。集落の民家からやや坂を登った場所に位置している。

壕は露頭した砂岩に掘り込まれ、北東方向に開口するが、現在は開口部が落盤が著しく、内部に進入するの困難である。内部のつくりは概ね粗加工で、開口部に比べ崩落はとくに見られない。現在は産廃物が散乱、堆積している。規模はそれほど大きくなく幅は約３ｍ、高さ1.5ｍ、奥行は5.2ｍをそれぞれ測る。

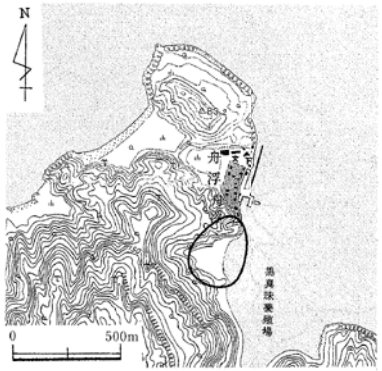
調査に御協力して頂いた船浮西表館の館長である池田豊吉氏によると、戦時中、後述する船浮の軍事施設が配置されると、軍は住民を大原や祖納、干立に強制疎開させていた。池田氏の実父である池田稔氏は野菜作りなどで軍に食料を提供していたため、船浮に残り、当時６歳であった豊吉氏と共に当該の壕へ避難することがあったとのことである。


遠景（東から）

入口落盤状況

31.船浮の戦争遺跡群

所在地：竹富町西表
立地（標高）：海岸、丘陵（約０ｍ～15ｍ）
形態：人工壕、構築物
種別：陣地
現状：残存状況は良好
保存状況：集落南方に放置
築造者：石垣島海軍警備隊
築造年月日：1941年（昭和16）頃
戦時中の使用状況：海軍警備隊の陣地として利用
主な遺構：壕、水源用地跡、桟橋跡



概　要

船浮集落の南方に位置する地域一帯は戦時中、石垣島海軍警備隊が構築したといわれる特攻艇の秘置壕や発電機壕、海軍桟橋跡などの多種多彩な軍事施設跡が現在も見ることができる。

集落の南側には海岸までせり出した独立丘があり、砂岩を掘り込んだ大規模な壕が見られる。壕は独立丘を２本貫通させている。壕①は北東―南西方向に一直線状に、壕②は内部で２ヶ所屈曲しながら海岸に開口し、壕①、壕②を内部で連結する支道を２本有している。壕①は幅2.9ｍ～3.9ｍ、高さ２ｍ～2.8ｍで、長さは80ｍを測る。落盤は殆ど見られず、壁と天井の角には円筒形の坑木痕が数ヶ所見られる。壕②は幅1.5ｍ～2.3ｍ、高さ1.5ｍ～1.9ｍで長さは60ｍを測る。壕②の２ヶ所の開口部には戦時中、15糎機関砲が設置されていた。落盤は見られないものの、粒子の細かい砂が床面に堆積している。２本の支道は落盤のため出入口が封鎖されており、侵入することはできなかった。支道内は現在、コウモリの棲息地となっている。

壕①の南西側開口部から南西に17ｍ進むと、特攻艇を格納したといわれる壕が見られる。南向きに開口する壕は一直線状で長さは21ｍである。岩盤を掘り込んだ後に開口部から内部、５ｍに亘って壁、天井をコンクリートで固められている。コンクリートの部分は天井がアーチ状で幅2.7ｍ、高さ2.2ｍ、内部の素掘りの部分は幅約４ｍ、高さ約３ｍをそれぞれ測る。素掘りの内部は概ね粗加工だが、円筒形の坑木痕が２ヶ所見られ、床面には側溝が一部残存している。

特攻艇の格納庫壕から南西に約34ｍの位置には、コンクリートで構築された発電機壕が見られる。南向きに開口し幅４ｍ、高さ3.6ｍ、奥行10ｍを測る。内部の中央には発電機を設置したと思われる長さ1.6ｍ×1.2ｍの台座が見られ、鉄筋が２列各５本の計10本が露頭した状態である。また床面の隅には幅15㎝の側溝が廻っている。壕の開口部から南東には、砂岩の石積みが南北方向に約７ｍに亘って残存している。

発電機壕の南西約51ｍの位置には、コンクリートで構築された弾薬庫壕が見られる。南向きに開口し幅2.6ｍ、高さ1.8ｍ、奥行26ｍを測る。内部は壁に鉄筋や鉄製品が埋め込まれ、アーチ状の天井にはＨ鋼が３ヶ所露頭している。また最奥部の天井には通気孔が見られる。現在はコウモリの棲息地となっている。

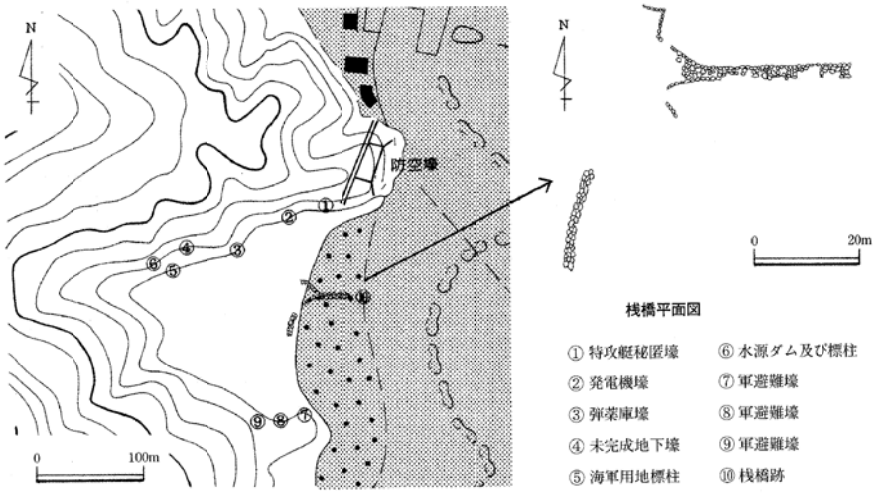
弾薬庫壕の西約60ｍの位置には砂岩を掘り込んだ壕が見られる。開口部に土砂が堆積し、また開口部の南約15ｍの位置には、壕を掘り込んだ際に削られた砂岩の石積みが見られる。聞き取りによると、当該の壕は未完成で、用途は不明とのことである。

未完成の壕の西には小川が流れており、戦時中、軍が水源地として構築したダムが現在も残る。ダムの周辺には「海軍用地」と刻まれた石製の標柱が２ヶ所見られ、小川内の石に先述した標柱を嵌め込む柱痕が１ヶ所確認できた。

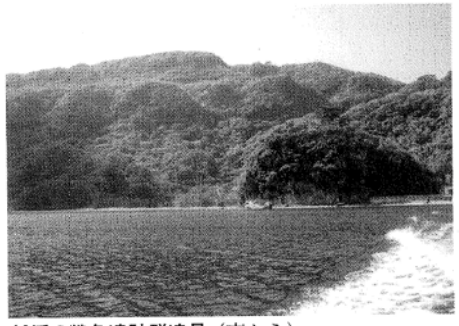
特攻艇の格納庫壕から南に約80ｍの海岸には海軍桟橋跡が見られる。桟橋の根石となる切石の石積みが

幅2.1m、干潮時には長さ約27mに亘って東方向に延びている。桟橋跡の周辺にも平面形で一直線状やL字状の石積みが見られる。聞き取りによると、桟橋跡に残る石積みの石材は内離島から運搬されてきたとのことである。また、桟橋跡から約100m南に位置する海岸には、砂岩に掘り込まれた奥行2m～3.5mの小規模な壕が3ヶ所見られる。

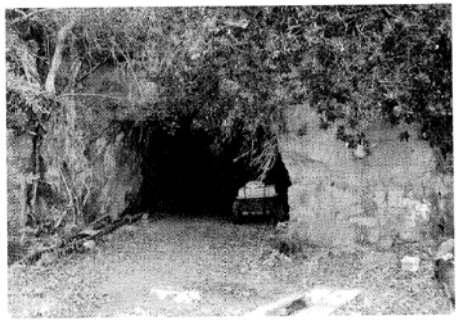
聞き取りによると、当該の軍事施設は、既に配備されていた船浮要塞の主力部隊が石垣島に移動した後、引き続き西表に残留した一部の部隊が施設を構築したとのことである。構築作業は炭鉱の坑夫や朝鮮人が徴用された。船浮に駐屯した軍は集落を含めた当該地域を軍事基地化するために、住民を東部の大原や祖納、干立に強制疎開させている。



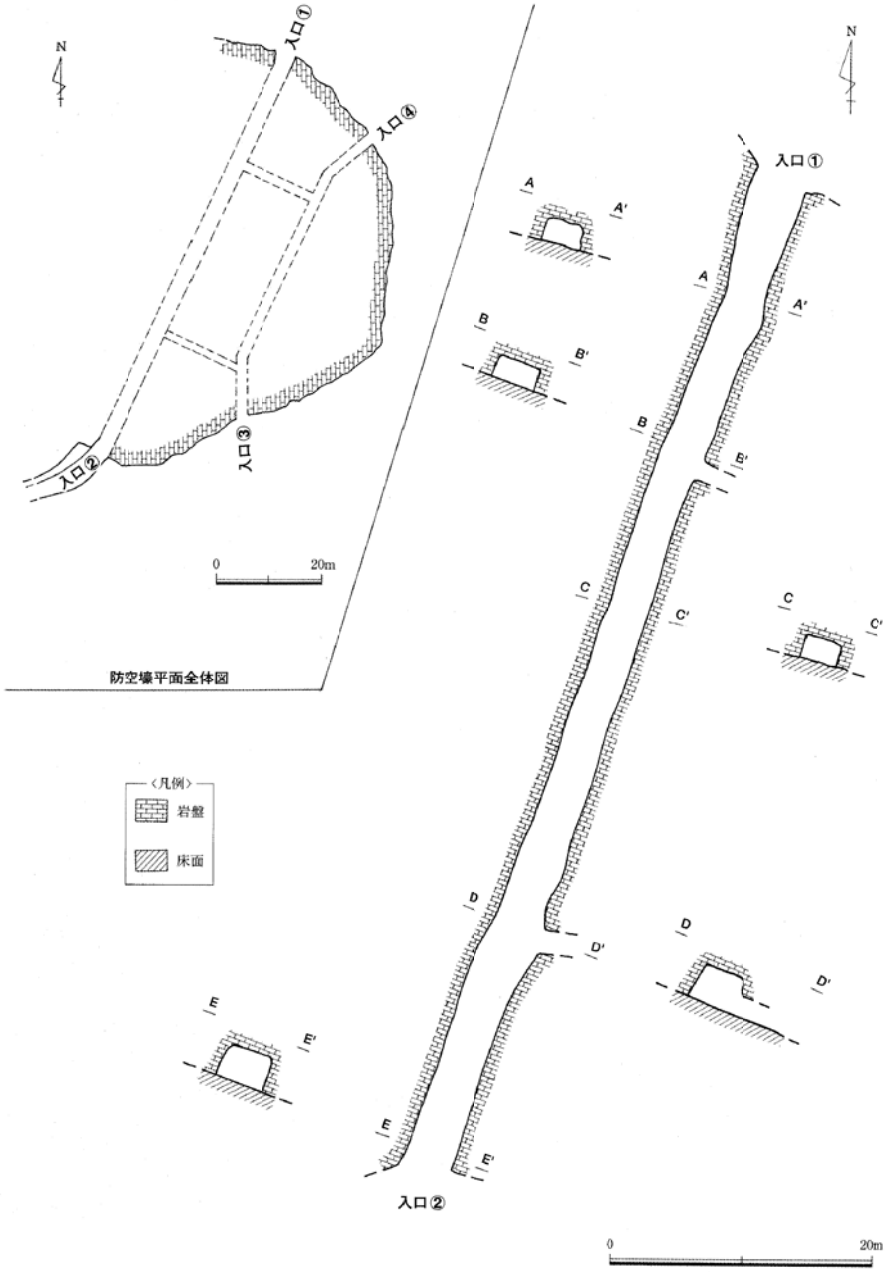
第37図　船浮の戦争遺跡群配置図



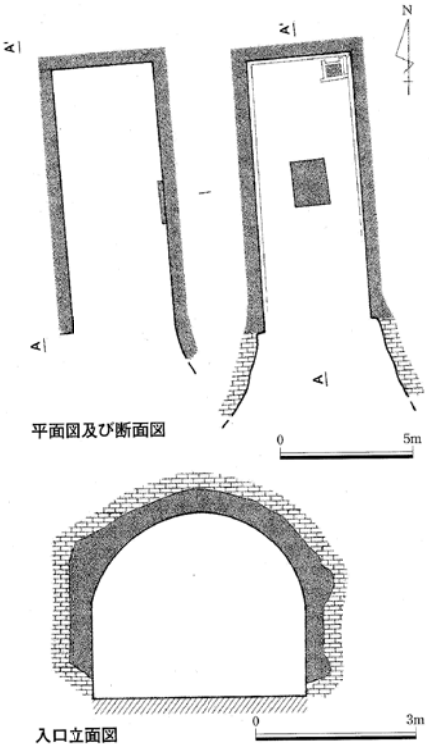
船浮の戦争遺跡群遠景（東から）



防空壕入口①

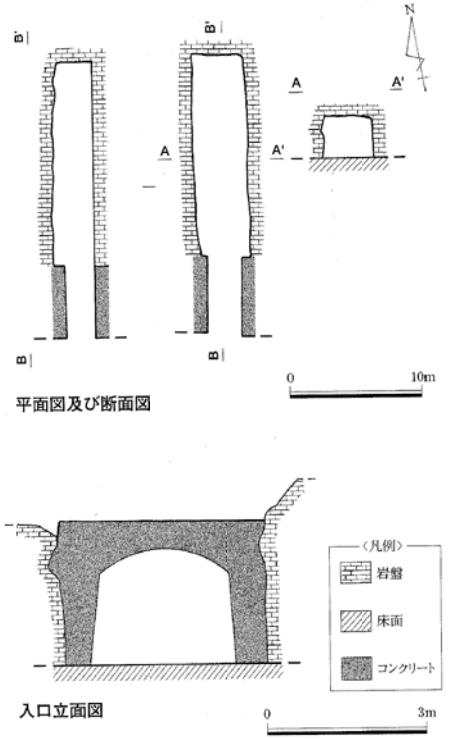


第38図　防空壕の平面図・断面図



平面図及び断面図

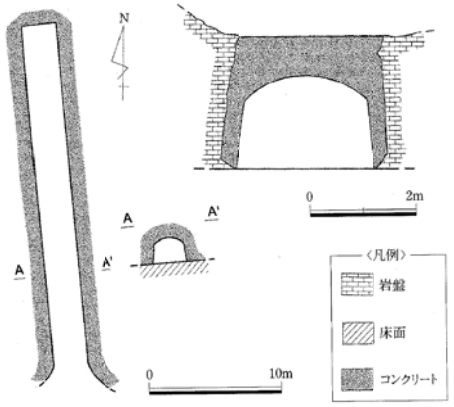
第 39 図　発電機壕



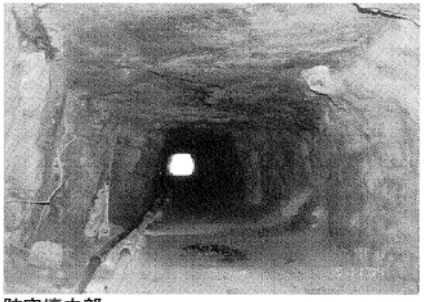
平面図及び断面図

入口立面図

第 40 図　特攻艇秘匿壕



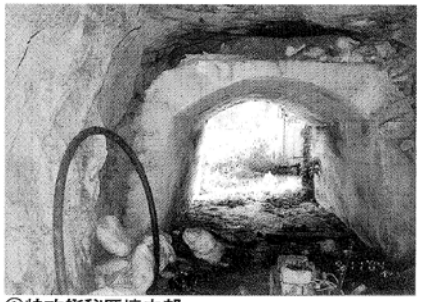
第 41 図　弾薬庫壕



防空壕内部

防空壕入口④

①特攻艇秘匿壕入口



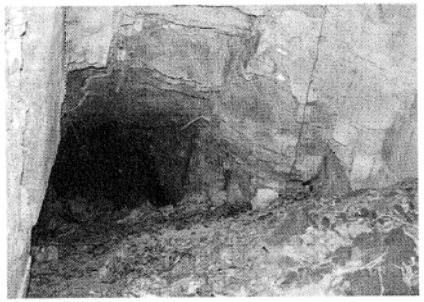
①特攻艇秘匿壕内部

②発電機壕入口

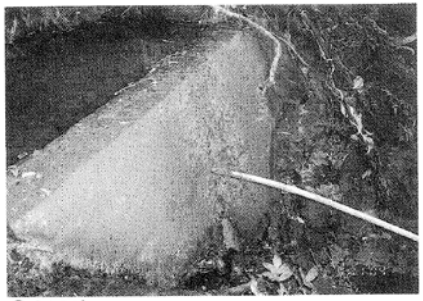
発電機壕内部　台座跡

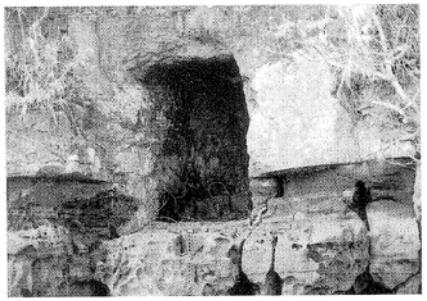
③弾薬庫壕入口

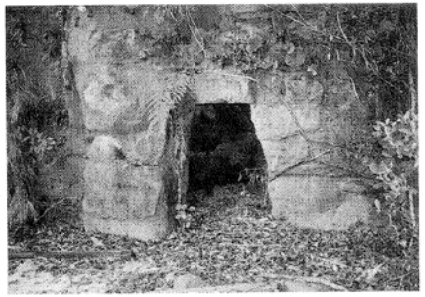
③弾薬庫壕内部奥壁

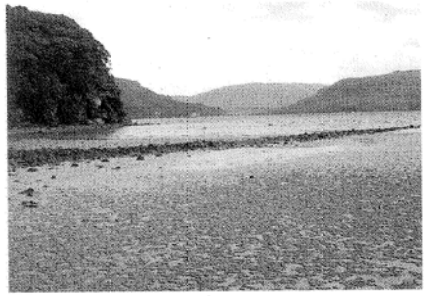

④未完成地下壕入口

⑤海軍用地標柱


⑥水源ダム


⑦軍避難壕入口

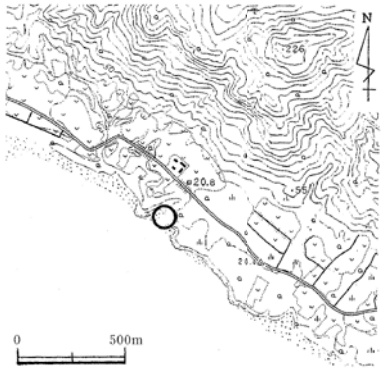

⑨軍避難壕入口


⑩桟橋跡全景（南から）

⑩桟橋跡石積

調査状況

32.南風見田の忘勿石



所在地：竹富町南風見
立地（標高）：海岸（約０～５ｍ）
形態：碑銘
種別：記念碑
現状：記念碑が隣接して建てられている
保存状況：文字が掘り込まれた砂岩の風化が進行
築造者：識名信升氏
築造年月日：1945年（昭和20）
戦時中の使用状況：波照間住民の疎開地
主な遺構：砂岩に掘り込まれた文字

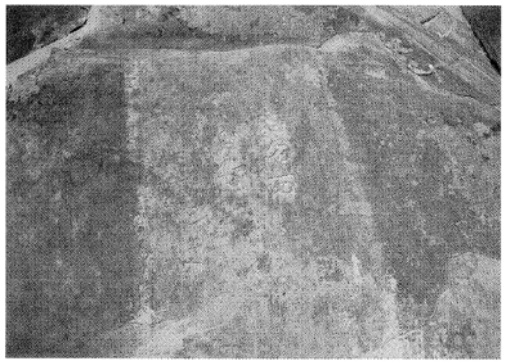
概　要

西表島の南東部に位置する南風見田の海岸には戦時中、波照間国民学校の校長であった識名信升氏が岩盤に文字を刻んだ忘勿石が現在も残る。

南風見田の海岸を含む南風見地域は、波照間島の住民が軍命により1945年(昭和20)４月から強制疎開させられた地域である。多数の住民が当該地域でマラリアに罹患し、死者が続出していく中で、識名氏は疎開解除を独立混成第45旅団の宮崎旅団長に直訴した。疎開の窮状訴えは認められ、住民の帰島は同年８月までに終了した。識名氏は疎開生活を終える前にマラリアで亡くなった児童を悼み、海岸に露頭する砂岩の一角に「忘勿石　ハテルマシキナ」の文字を彫ったといわれる。

忘勿石は岩盤の風化が進行しているため、1992年(平成４)８月に「忘勿石之塔建立事業期成会」(平田一雄会長)によって「忘勿石之碑」が建立された。碑は忘勿石の西隣に建てられ、識名氏の胸像とマラリアで犠牲となった80名の児童の刻銘、碑文と「忘勿石の歌」の四節が刻まれている。

忘勿石の碑


忘勿石

船浮要塞戦争遺跡群

1）船浮要塞の概要

1941年(昭和16）に臨時要塞として建設された船浮要塞は、天然の良港である船浮港を囲むようにして北から祖納半島、外離島、内離島、サバ崎の４管区に設置された軍事施設である。要塞の中核となる司令部は、第１区の内離島に設置された。司令官は下永憲次(陸軍大佐)。その他重砲兵連隊 (隊長･山崎豊吉陸軍少佐)本部、高射砲隊、歩兵隊、陸軍病院も同島に配備された。第２区は祖納で、第２中隊(隊長･北村杢角中尉）が配備。第３区は外離島で第１中隊（隊長･小野藤一中尉）が、第４区はサバ崎でサバ崎守備隊がそれぞれ配備された。要塞の任務は南方から石油などの資源を運ぶ艦船の待避・停泊などを守備することであった。

要塞は初期の築営隊による建設作業は約３ヶ月で終了したものの施設は完成せず、先述した各部隊が自活をしながら陣地構築を継承し、また地元の住民、児童生徒を動員して約３年かけて構築された要塞施設であった。しかし、その施設は高射砲は地上に露出、弾薬庫や兵舎なども上空露出のままであり、航空機が主力となった太平洋戦争においてはもはや時代遅れの施設であった。1944年（昭和19）４月１日には、沖縄全島の守備軍･第32軍の指揮下に入り、同年５月８日船浮要塞司令部は解消された。また同年９月には船浮要塞重砲兵連隊を改称した重砲兵第８連隊は小野隊を残し主力部隊を石垣島に移駐するなど、要塞としての戦略的地位は次第に失われていくこととなった。

2）戦後の状況

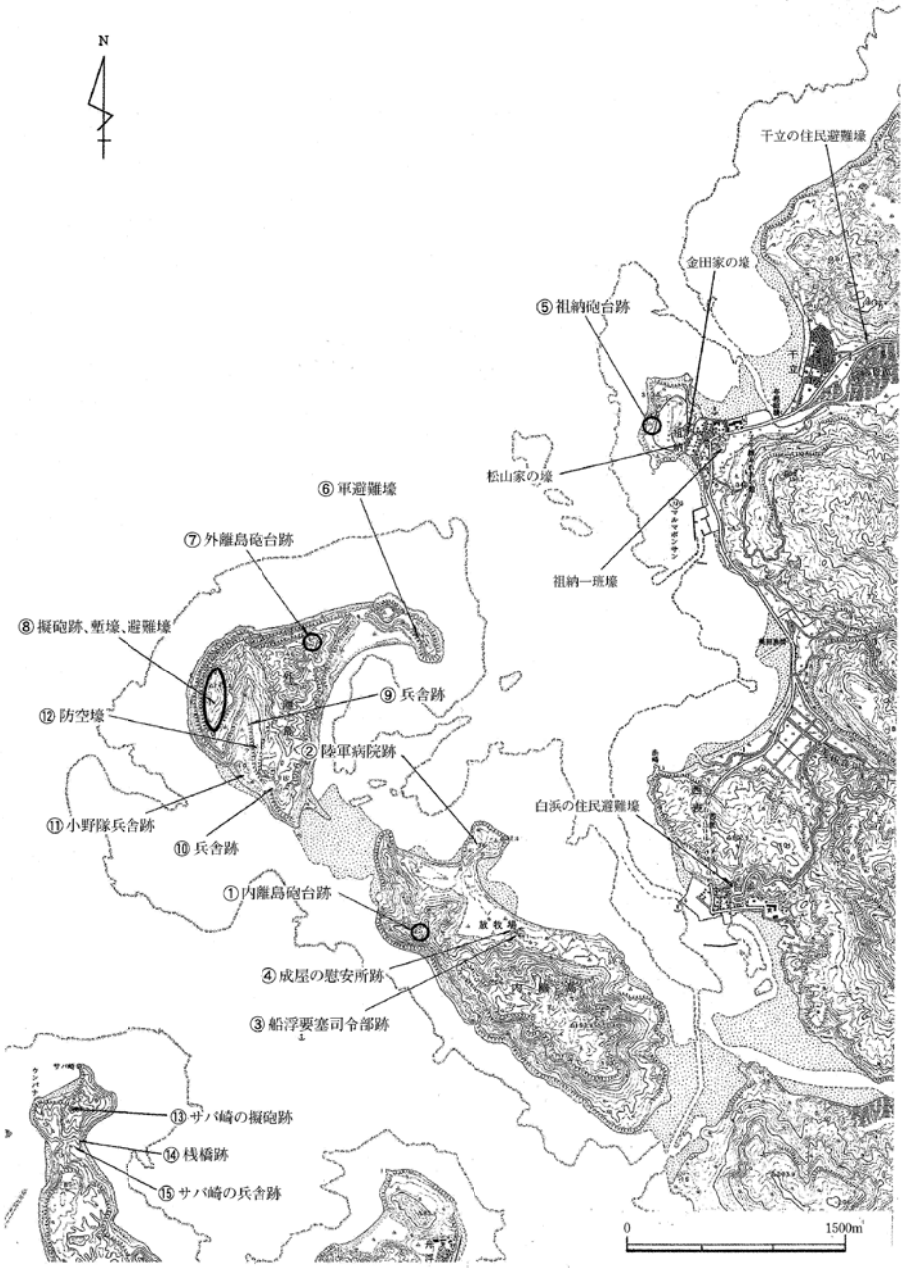
終戦後、要塞内に配備されていた兵隊が復員したため、要塞地域に建設された施設跡は使用されることもなくそのまま放置された。内離島、外離島は戦後約30年間に亘って放牧地として利用され、祖納住民の畑地もつくられていたが、現在は外離島は真珠養殖場として利用されているものの、両島とも無人島である。サバ崎は灯台が建設された以外は特に改変されていない。祖納に関しては周辺に畑地があるが、施設跡は現在竹林となっている。つまり、先述した地域はいずれも地形改変等が全く行われなかったため、戦時中使用したこれらの施設跡が現在に至るまで、破壊されることなく残存している。

3）調査方法･成果

今回の船浮要塞の調査は既に実地調査されている資料、聞き取り調査等を基に２回に分けて行った。調査には県文化財保護指導委員でもある石垣金星氏、竹富町町史編集室係長の通事孝作氏、現・沖縄県平和祈念資料館主査で1986年（昭和61）に竹富町立白浜小学校に教員として赴任し、当時「西表島の戦争」を調査研究していた城間良昭氏も同行して頂いた。調査の結果、４管区で15ヶ所の遺跡を確認することができた。各遺跡の分布図は右図のとおりである。

今回の調査で特に外離島、内離島、サバ崎は船でしか到達することができない地域で、且つ自然環境が戦時中と比較しても激変していることから、踏査は困難なものであったが、その中で15ヶ所の遺跡が確認できたのは大きな成果であったといえる。しかし、時間的な制約も有り、全てを把握することはできなかったため、未だ確認できない戦争遺跡が存在する可能性が高いことを補足しておく。

なお今回の本報告では戦時中、船浮要塞で区分されていた４管区の名称を踏襲し、第１区（内離島）から第４区（サバ崎）までの順に、各地域ごとで確認した戦争遺跡を詳細に報告することとする。



第42図　船浮要塞配置図

内離島(第１区)

内離島で確認された戦争遺跡は①内離島砲台跡、②陸軍病院跡、③船浮要塞司令部跡、④慰安所跡の４ヶ所である。島の北側に位置する成屋の海岸にはかつて安東丸事件（戦時中、船浮港沖に漂流した安東丸の中国人・朝鮮人乗組員を旧日本軍が強制労働で酷使し、後に西表島の南西に位置する鹿川の海岸に乗組員を置き去りにした事件）で知られる安東丸の船底部の残骸や遺物が最近まで残存していたとのことだが、台風（時期不明）により海に流されてしまったため、今回の調査では確認できなかった。

①　内離島砲台跡

島の西部に位置する独立丘の頂部に１基残存する。砲台跡はコンクリート製の枠が厚さ20㎝、高さ120㎝で平面形が「Ｃ」字状に立ち上げられている。南側の約３ｍに亘って枠がない部分はおそらく砲門に相当し、その方向は船浮湾に向けられている。内枠は直径約６ｍで、内壁には弾薬を保管する貯蔵穴が３ヶ所見られる。貯蔵穴は幅１ｍ、高さ80㎝，奥行１ｍで３ヶ所とも同規格である。床面にはコンクリートは貼られておらず、直径約５㎝～10㎝程度の砂岩をバラス状に敷き詰めている。

記録によると戦時中、内離島には斯加式12㎝速射カノン砲を２門装備していたとのことだが、今回の調査では当該の１基しか確認できなかった。また、調査に同行していただいた城間良昭氏によると、約20年前城間氏が当該の砲台跡を調査した際には、砲台跡がある独立丘一帯は雑木が繁茂した現在とは景観が異なり、ススキに覆われており、砲台跡まで容易に登坂できたとのことである。

②　陸軍病院跡

島の北側には丘陵地形の小半島があり、その小半島の突端部付近には戦時中、陸軍病院が建てられていた。周辺地形は西側を除き急崖もしくは急斜面であるが、病院跡一帯はある程度面積を有した平場が確認できる。平場には建物の基礎枠と思われるブロック片が散乱し、残存する基礎枠も一部しか見られないため当時の建物の規模などを把握することはできなかった。ブロックの材質は砂岩を芯にして周囲にサンゴ石を含んだコンクリートで形成されている。

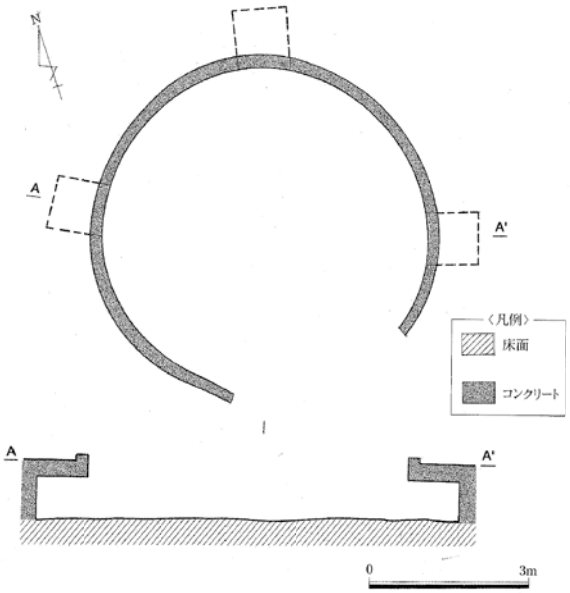
陸軍病院は1941年（昭和16）10月５日、大阪陸軍病院において編成され、同月13日内離島に上陸した。病院は配備されると要塞司令部の指揮下に入り、内離島を拠点に連隊医務室を祖納に置き、隊付軍医は各隊を巡回した。陸軍病院は重砲兵第８連隊と同様に1944年（昭和19）９月、独立混成第45旅団の命令により、一部を西表に残し、主力は石垣島に移動。石垣島では石垣国民学校（現・石垣小学校）に病院を開設し、診療活動に入ったが、後に空襲が激しくなると、於茂登岳の山中に移り診療を行ったという。

③　船浮要塞司令部跡

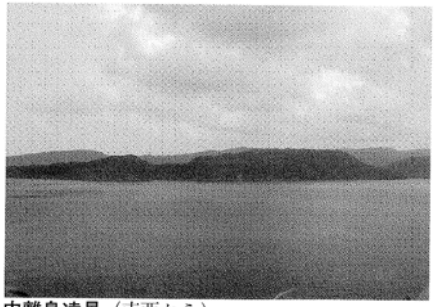
島の北側に位置する旧成屋村地域には戦時中、船浮要塞司令部が配備されていた。今回の調査で旧成屋村地域を踏査したところ、建物跡の痕跡は確認できなかったが、南側にある独立丘（通称・成屋山）の頂上付近には擬砲跡が３ヶ所確認できた。擬砲跡はいずれも地面を掘り込み、３ヶ所のうち１ヶ所は円形、残り２ヶ所はドーナツ状となっている。擬砲跡の規模は直径約３ｍ～3.5ｍ、深さ約0.8ｍ～1.2ｍである。そして擬砲の円から南側に掘り込みが一直線状に伸びているのが３ヶ所に共通している特徴である。

④　慰安所跡

旧成屋村地域には戦時中、要塞司令部の他に慰安所も設置されていた。慰安所跡は先述した擬砲跡がある独立丘から北西側の海岸に近い平地に見られる。雑木等が繁茂した慰安所跡は建物の基礎枠は残存せず、コンクリートとレンガ片が散乱しているが、五右衛門風呂と思われるレンガ製の遺構が現在でも残る。また慰安所跡の周辺には戦時中にコンクリートに構築し直したと思われる井戸跡も見ることができる。



第 43 図　内離島砲台跡


内離島遠景（南西から）

①内離島砲台跡　内壁（貯蔵穴）

①内離島砲台跡　砲門

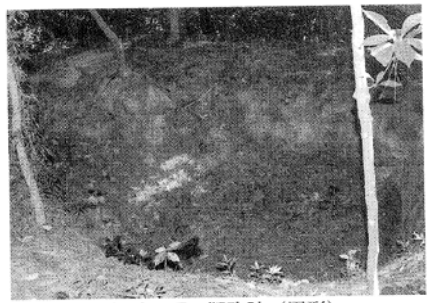
内離島砲台跡　内部床面（砂利敷）

①内離島砲台跡　調査状況

②陸軍病院跡　基礎枠散乱状況

②陸軍病院跡周辺　コンクリート残存状況

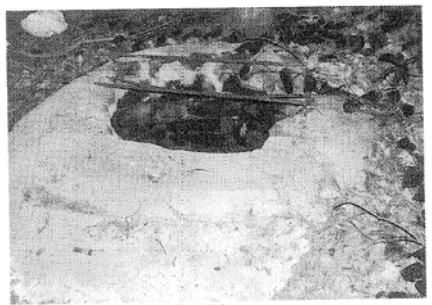
③要塞司令部跡周辺　擬砲跡（ドーナツ状）



③要塞司令部跡周辺　擬砲跡（円形）

④慰安所跡　コンクリート片散乱状況

④慰安所跡　五右衛門風呂跡



④慰安所跡周辺　井戸跡

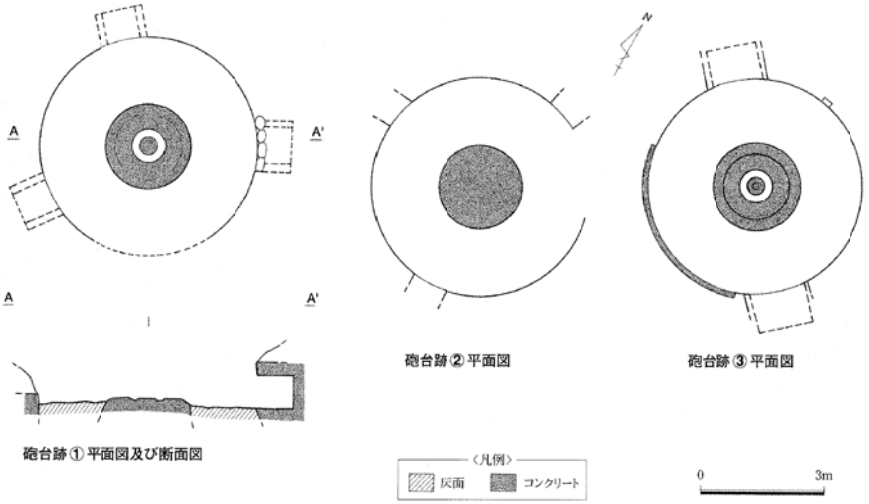
祖納半島（第２区）

祖納半島の西端部に位置する丘陵には祖納砲台跡が４基確認されている。上村と呼ばれる同地域は戦前、畑作地として利用されていたが、要塞建設に際して旧陸軍省は私有地を強制的に接収。建設用地には監視兵を配備し、住民の立ち入りを禁止した。

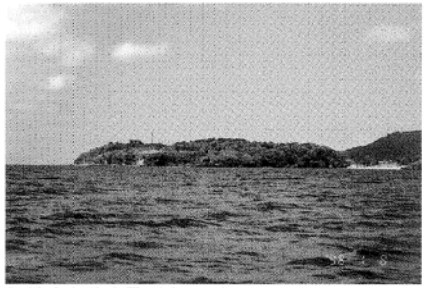
⑤　祖納砲台跡

祖納砲台跡は現在、周辺の畑作地から外れた竹及びアダン等が密生した原野になっている。４基の砲台跡が南北に並び、いずれもコンクリートで円形の外枠を造り、外枠の直径が5.2ｍと共通している。砲台跡①は弾薬を保管する貯蔵穴を３ヶ所有している。貯蔵穴は幅、高さは80㎝、奥行は90㎝で、３ヶ所とも同規格である。枠の内部には円形で直径２ｍのコンクリート製の砲座跡が見られる。砲座の中心には重砲を設置できるように直径15㎝の穴が開けられている。また、外枠の上に土留のために砂岩の石積みを構築している。砲台跡②は①と同様、貯蔵穴を3ヶ所有し、内部の砲座も土砂が堆積しているものの、構造は①と同様である。①と異なる点は外枠の下に排水溝が見られる事である。砲台跡③、④は貯蔵穴が２ヶ所で、対角線上に位置している。貯蔵穴の規模は幅120㎝、高さ85㎝、奥行95㎝で全て共通している。内部の砲座は規模、構造とも①と同様であるが、③の砲座はコンクリートの下に砂岩を円形に加工して、①よりも砲座の部分が盛り上がっている。また、②と同様に外枠の下に排水溝が走っている。④に関してはアダンの密生が特に著しく、内部は土砂が堆積して貯蔵穴が半分ほど埋没している部分も見られる。

戦時中、祖納には重砲兵連隊の第２中隊(隊長･北村杢角中尉）が配備され、38式野砲４門が設置されていた。当該の４ヶ所の砲台跡はそれに相当する。1942年（昭和18）10月、重砲兵連隊は第２区（祖納半島）と第４区（サバ崎）の全部隊を外離島に集結させたため、以降、祖納に設置された砲台は使用されたかは不明である。砲台①のすぐ東側には、砂岩をブロック状に加工し、コンクリートを繋いで積み上げた建物跡（用途不明）や、側壁を砂岩ブロックで構築した塹壕と思われる掘り込みを見ることができる。



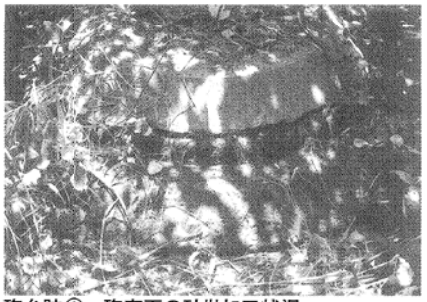
第 44 図　祖納砲台跡


祖納砲台跡遠景（南から）

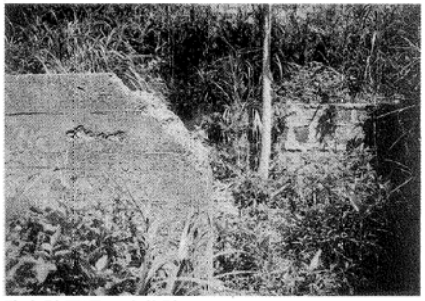
砲台跡①　砲座と貯蔵穴

砲台跡①　砲座

砲台跡③　円形枠


砲台跡③　砲座下の砂岩加工状況

砲台跡④　貯蔵穴埋没状況


砲台跡周辺　建物跡

砲台跡周辺　塹壕

外離島（第３区）

今回の調査で４管区の中で最も多い７ヶ所の戦争遺跡を確認できた。特に島の南部に位置するＶ字谷地形一帯には⑪小野隊兵舎跡をはじめ、５ヶ所の戦争遺跡が点在している。４管区の中で最も外洋に近い外離島は４管区の戦争遺跡の中でより実戦向きの陣地を構築していること、先述した重砲兵連隊の全部隊を外離島に集結させたことなどから、要塞地域の最前線として戦略的に重要視していたことを窺うことができる。そして、未確認の戦争遺跡が残存している可能性は４管区の中で最も高いと思われる。

⑥　軍避難壕

島の北東部に位置する独立丘（通称・ボウシ山）の中腹に戦時中、旧日本軍の避難壕として利用された自然壕が現在も残る。壕は砂岩が侵食されてできた大規模なガマで、南西に開口する。幅は約25ｍ、高さは約３ｍ弱、奥行約３ｍをそれぞれ測る。ガマの内部は砂が堆積しており、加工痕は特に見られなかった。ガマの入口前には軍が構築したと思われる土留の石積みが見られる。軍が避難した壕ということで、周辺に軍の施設跡が残存しているのか、独立丘の頂部などを踏査したが、確認することはできなかった。

⑦　外離島砲台跡

島の北部にある山間部に位置し、２基確認されている。砲台跡の北側は海岸からすぐ２段階に発達した急崖地形が続いている。砲台跡①は祖納砲台跡と同様コンクリートで円形の外枠を造り、外枠の直径は5.2ｍと共通している。異なる点は２ヶ所の貯蔵穴が外枠から外れた位置に造られていることである。貯蔵穴は対角線上に位置し、幅80㎝、高さ75㎝、奥行85㎝で２ヶ所とも同規格である。内部の砲座は直径2.8ｍと祖納砲台跡よりも規模が大きく、砲座の外枠がはっきり確認できる。砲台跡①から南西約50ｍの位置に砲台跡②が残存する。砲台跡の外枠は規格、構造とも①と同様であるが、外側に設置されている２ヶ所の貯蔵穴の周囲にも砂岩ブロックにコンクリートを流した石積みを施し、平面形で「Ｃ」字状に構築している。貯蔵穴の規格は砲台跡①と同様であるが、対角線上に配していない。また、貯蔵穴を囲う石積みから北向きに塹壕が走っている。

戦時中、外離島には斯加式12㎝速射カノン砲を２門設置しており、当該の砲台跡はそれに相当する。砲台跡①の北東側約30ｍの位置には、砂岩ブロックをコンクリートで繋いだ石積みで通路を構築している。西向きに開口する入口を造り、内部の通路は平面形で逆「Ｌ」字状となっている。石積みの高さは１ｍ～1.2ｍで推移している。しかし、この構造物がどの種類の施設跡かは今回の調査で明らかにすることはできなかった。

⑧　擬砲跡・塹壕・避難壕

島の西部は海岸、内陸から２段階に発達した急崖地形が続いており、その急崖の頂部は標高約100ｍ～140ｍの緩やかな山岳地形となっている。その山岳一帯から先述したＶ字谷地形の東側（内陸側）斜面にかけて擬砲跡が４ヶ所、塹壕・タコ壺が１ヶ所ずつ、避難壕が２ヶ所確認できた。

擬砲跡は当該地の中で北側に位置し、南北方向に４ヶ所並列している。内離島にある擬砲跡と同様、地面を掘り込み、内部は円形とドーナツ状に分かれる。直径は約3.2ｍ～3.8ｍ、深さは約50㎝～60㎝程である。そして、擬砲の円から一直線状の掘り込みが伸びているのも内離島の擬砲跡と同様である。擬砲跡の南側にも塹壕とタコ壺が１ヶ所ずつ残存している。

山岳地域の南端部には人工壕①が残存する。人工壕①は南北方向に連なる尾根部の南端に位置し、３ヶ所の開口部から平面形で「Ｔ」字状に掘り込まれている。開口部は土砂が堆積し、内部も天井が崩落している箇所も見られる。東西に貫通する通路が幅約1.2ｍ、長さが約10ｍ弱である。「Ｔ」字の交差する部分の天井には垂直に貫通する円形の竪穴が見られる。当該の壕は西方向から東方向まで一望に見渡せる箇所に

設置していることから、監視を目的とした陣地壕の可能性も考えられる。人工壕②は当該地域の東側斜面に残存する。壕は開口部前から地面を掘り込んだ塹壕を有している。塹壕は西向きから途中北西方向に折れながら約10ｍに亘って続き、開口部に至る。壕は砂岩に一直線状に掘り込まれ、南東方向に開口する。入口部分がやや埋没するが、残存状況は概ね良好である。幅約1.6ｍ、高さ約1.3ｍ、奥行は約6.5ｍをそれぞれ測る。内部の側壁には部材痕がはっきりと見ることができる。人工壕②の周辺、つまり先述したＶ字谷地形の東側（内陸側）斜面には土留の石積みが２ヶ所、または傾斜がきつい斜面を往来しやすくするための道路跡も確認されている。

⑨・⑩　兵舎跡、⑪　小野隊兵舎跡

島の南部、３ヶ所の地域に戦時中、兵舎として使用された建物の基礎跡が現在も残る。⑨の兵舎跡はＶ字谷の西側（内陸側）斜面の中腹に２棟確認できた。２棟の兵舎跡は南北に約30ｍの距離に位置し、斜面が連続している当該地にわずかに残る平場をある程度造成して設置したと想定される。兵舎跡は２ヶ所ともに長方形で出入口と思われる階段跡を見ることができる。雑木に覆われた当該の兵舎跡は時間的な制約もあり、建物の規模等を計測することはできなかった。

⑩の兵舎跡は島の南端部、急崖地形の上部に１棟確認できる。現在は雑木に覆われているが、兵舎跡の南側は急崖が迫っており、先述した人工壕①と同様、西方向から東方向まで一望に見渡せる位置に設置されている。兵舎跡は東西に長い長方形で、南北に約６ｍ、東西に約12ｍ、基礎枠の幅は約30㎝である。兵舎には約1.4ｍ四方の幅で入口跡も北側に付設されている。なお⑨、⑩の兵舎跡は今回の調査で初めて確認された戦争遺跡であるが、1942年（昭和17）10月に重砲兵連隊の全部隊を外離島に集結させていることから、すでに外離島に駐屯していた小野隊が構築した兵舎かは不明である。

⑪の小野隊兵舎跡は戦時中、重砲兵連隊の第１中隊（隊長・小野藤一）の兵舎として利用した建物跡である。小野隊兵舎跡は島の南部に位置するＶ字谷の平野部、海岸付近に２棟残存し、建物跡や隣接するトイレ跡の規模などから下士官と上官クラスとの兵舎に分類される。

下士官で使用された兵舎は北西ー南東方向に長方形で設置されており、長辺部が約30ｍ、短辺部が約6.4ｍである。建物の内部は長辺部、短辺部の中心に通路を十字につくり、面積が同等の４ヶ所の部屋を有している。通路の幅は長辺部が約1.6ｍ、短辺部が約２ｍで、建物の基礎枠の幅は30㎝で統一されている。兵舎の周辺にはトイレ跡や井戸跡も付設している。トイレ跡は兵舎跡の北東側約10ｍに位置し、兵舎跡の方向と並列している。トイレは通路を中心に左右対称に便器を６ヶ所ずつ設置しているが、アダンの密生が著しく計測等を行うことができなかった。井戸跡はトイレ跡の南東に位置する。コンクリートで構築された直径約１ｍの井戸と井戸を囲う方形の基礎枠が残り、基礎枠の四隅には柱跡も見られる。また、トイレ跡の東側には砂岩を利用した土留の石積みが一部残存している。

下士官の兵舎跡から南東約50ｍの位置に上官クラスの兵舎跡が残存する。兵舎跡は北西ー南東方向に長方形で設置されており、長辺部が約13ｍ、短辺部が約6.5ｍである。建物の内部は面積の異なる４ヶ所の部屋を有している。兵舎跡の北西側にはトイレ跡も隣接している。トイレ跡はＬ字形で便器を１ヶ所設置し、排泄物を溜め込む枠も付設している。内部にはビール瓶などの遺物が散乱している。

小野隊兵舎跡が設置された当該地は、外離島にわずかに残る平坦地を利用している。周辺地形は船浮湾を望める海岸とＶ字谷地形の急崖地に囲まれていることから、外敵に発見されにくい当該地は駐屯地として外離島で最も適した場所である。戦時中は当該地を拠点に訓練、陣地構築などの軍事活動を島の各地で行っていた。

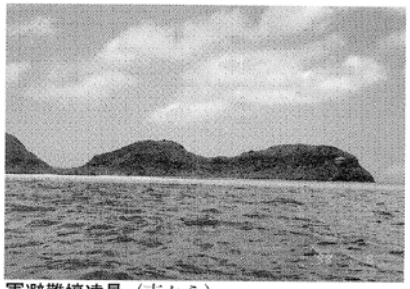
⑫　防空壕

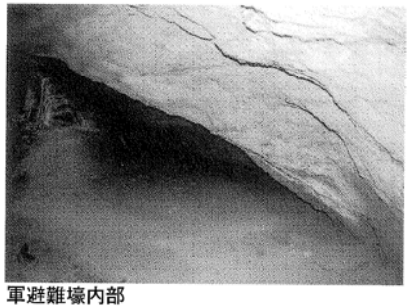
島の南部に位置するＶ字谷の西側（内陸側）斜面に戦時中、防空壕として利用された人工の壕が残存する。壕は砂岩が露頭した箇所に掘られ、南向きに開口する。入口前は砂岩のガマ状になっているが、自然に侵食されたかあるいは人工的に構築したかは不明である。また、入口前には戦時中使用されたと思われる金属製の鍋やヤカンが放置されている。入口はコンクリートで側壁、天井を階段状に枠を構築し、幅、高さともに約２ｍを測る。内部は入口付近の床面（コンクリート製）が一部崩落し、崩落した下部から垂直に埋め込まれた木材片が露出している。壕内部は時間的な制限もあり、実測等の調査が行うことができ

ず、位置の確認のみに留まった。内部は目測ではあるが広く、途中で北西方向にカーブしているのが見て取れる。

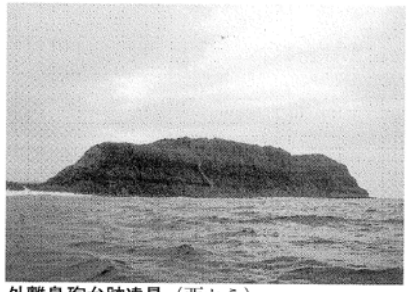
当該の防空壕も今回の調査で初めて確認された戦争遺跡である。『竹富町史　第十二巻　戦争体験記録』によると戦時中、西表島の干立・祖納・白浜・船浮・網取・崎山集落（現在、網取・崎山は廃村）の住民は旧日本軍の奉仕作業として外離島に渡り、壕掘り作業などを行ったという証言が複数記載されており、当該の防空壕が証言に相当する壕の可能性も考えられる。当該の防空壕は今後、壕内部の実測や証言者への聞き取りなど、詳細な調査が求められる重要な戦争遺跡といえる。

外離島遠景（北東から）

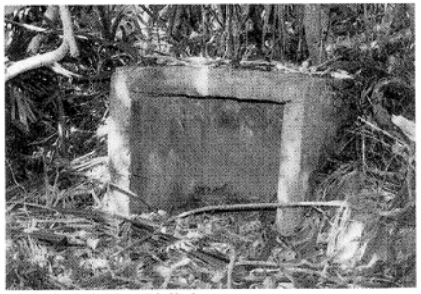

軍避難壕遠景（南から）


軍避難壕内部

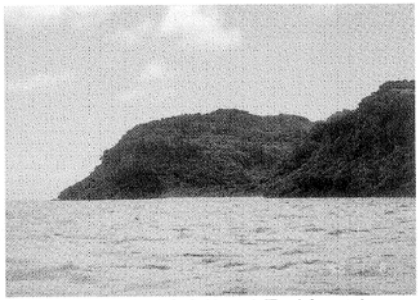
軍避難壕　入口前石積


外離島砲台跡遠景（西から）

外離島砲台跡　中心部砲座と外枠

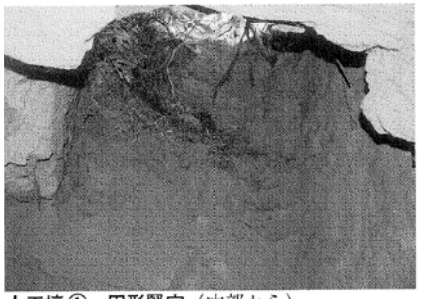

外離島砲台跡　貯蔵穴

外離島砲台跡周辺　構造物（用途不明）

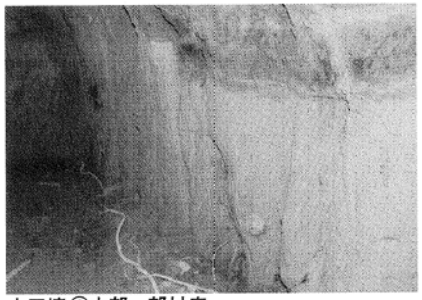

外離島南部　遺跡点在箇所遠景（南から）

擬砲跡

人工壕①　東側入口


人工壕①　円形竪穴（内部から）

人工壕②　入口前塹壕


人工壕②内部　部材痕

⑨兵舎跡　建物入口階段

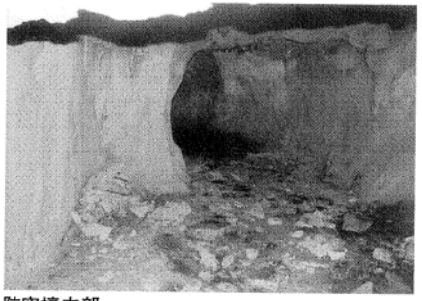
⑩兵舎跡　建物内柱跡

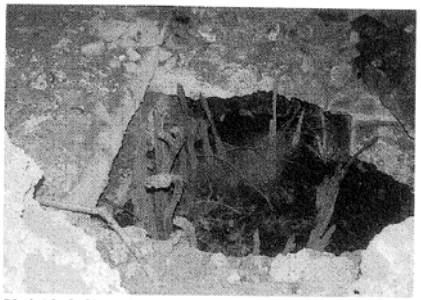
小野隊兵舎跡　下士官兵舎通路

小野隊兵舎跡　下士官兵舎周辺　井戸跡

小野隊兵舎跡　上官兵舎用トイレ跡

防空壕入口


防空壕内部


防空壕内部　木材片露出状況

サバ崎（第４区）

サバ崎一帯は現在、灯台のみが設置されており、ほとんど人の出入りはない状況である。確認された戦争遺跡は⑬擬砲跡、⑭桟橋跡、⑮兵舎跡の３ヶ所である。記録によると戦時中、サバ崎には38式野砲が２門設置されたとのことだが、他の３管区の施設と比較しても戦略的な重要度が低い印象は否めない。しかし、桟橋跡などサバ崎以外で見ることができない戦争遺跡も残存し、他の３管区の戦争遺跡とは異なる特徴を備えている。

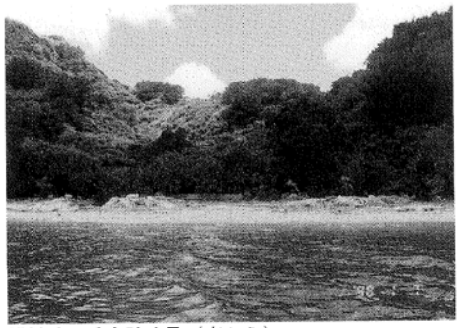
⑬　擬砲跡

現在のサバ崎灯台の後背部（南部）に立地する丘陵の中腹に擬砲跡が２ヶ所確認できた。擬砲跡一帯はススキに覆われており、判別は困難であった。２ヶ所の擬砲跡は円形とドーナツ状にそれぞれ掘り込まれ、円形の擬砲跡が標高の高い位置に設置されている。擬砲跡の規模は直径約３ｍ～3.4ｍ、深さ約50cmを測る。擬砲の円から一直線状の掘り込みの方向は内離島、外離島の擬砲跡と同様共通している。

サバ崎遠景（北から）

⑭　桟橋跡

先述した擬砲跡が設置されている丘陵の南側は若干であるが平地が見られる。その東側の海岸に戦時中、桟橋として利用された基礎部分の石積みが残存する。桟橋跡は干潮時にのみ確認することができる。幅は約３ｍで北西方向に伸びており、石積みは砂岩の切石を使用している。桟橋跡の付け根部分には海岸に埋め込まれた突起物が２ヶ所見られ、突起物は金属製と木製に分かれる。戦時中、要塞地域の各管区を往来する手段は、船舶以外の方法はなく、各管区の海岸には船舶を停泊するための桟橋を築いていた。しかし、今回の調査ではサバ崎以外に桟橋跡は確認することはできず、その意味では貴重な戦争遺跡といえる。



桟橋跡、兵舎跡遠景（東から）

⑮　兵舎跡

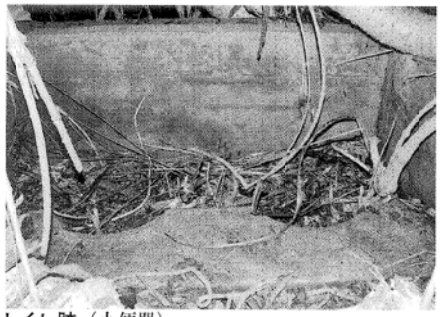
桟橋跡から南東に位置する平地には戦時中、サバ崎守備隊が使用していた兵舎跡が現在も残る。サバ崎の兵舎跡は基礎枠の列の一部が残存している箇所が点在し、コンクリートが散乱している状況も見られる。兵舎跡一帯はアダンの密生が特に著しく、建物全体の形状、あるいは何棟設置されていたのか正確に把握することはできなかった。しかし、兵舎跡に隣接するトイレ跡はほぼ完形で残存している。トイレ跡は一辺 3.8ｍの正方形で東側に出入口の床面が見られる。内部は中心を通路が東西方向に走り、北側は大便所４ヶ所、南側は大便所２ヶ所と小便所３ヶ所が設置されている。その他兵舎跡の周辺には砂岩を粗く加工した土留の石積みや、井戸跡と思われる方形のコンクリート枠も見ることができ、位置関係まで把握することができた。

桟橋跡

桟橋跡　金属片・木片露出状況

サバ崎兵舎跡　コンクリート散乱状況

トイレ跡（大便器）



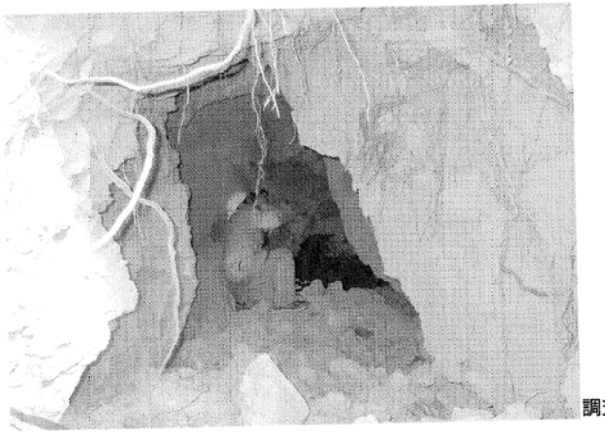
トイレ跡（小便器）

兵舎跡周辺　井戸跡

兵舎跡周辺　土留石積

聞き取り調査（西表白浜公民館にて）

調査状況（内離島　砲台跡）



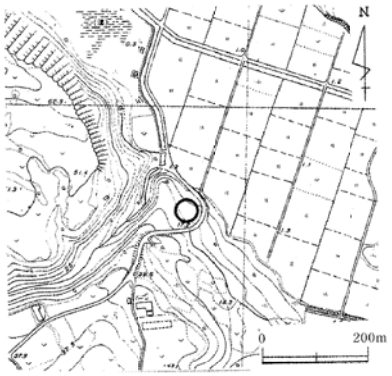
調査状況（外離島　人工壕①）

第３節　与那国町

与那国町の避難壕

与那国町の避難壕は、戦争体験者による現地案内などもあって、６ヶ所確認することができた。全て自然壕を利用しており、町内に所在する３ヶ所の集落近辺に位置する。与那国町では土地改良事業による圃場整備が進んでおり、それによって、戦時中の住民避難壕として利用された自然壕が破壊されたところも聞き取りなどにより、確認されている。

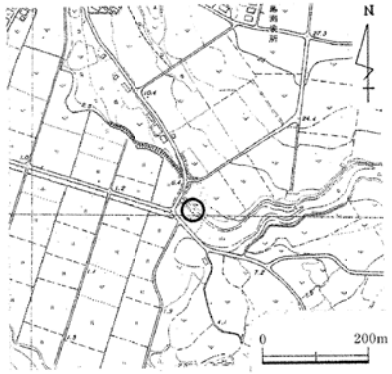
１.田原川の壕



祖納集落の南方には、集落前の「波多の浜」を河口とする田原川の上流部分にあたり、その近くに石灰岩の自然壕が１ヶ所、現在も残る。

沖縄戦時には祖納集落住民の避難壕として利用されていた。壕は緩やかな丘陵の中腹あたりに位置し、現在は開口部脇を農道が走っている。壕は北東方向に開口する。内部は広く、下りながら奥へ進むが、現在は産廃物が最奥部まで堆積しているため、入口周辺までしか進入することができない。

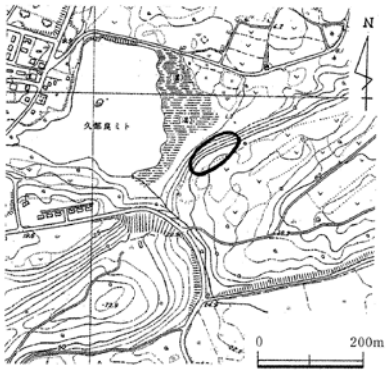
２.カマヌタ



祖納集落の南東には、石灰岩の段丘地形が南東―北西方向に走っている。そこに自然壕が数ヶ所あり、戦時中は与那国国民学校（現・与那国小学校、中学校）の生徒や先生が避難した場所となっている。現在は、周辺の圃場整備によって地表面がかさ上げされており、開口部の上部が残るのみで、内部に進入することはできない。

聞き取りによると、当該の壕は学校の避難壕として利用されただけあって、大規模な壕であったとのことで、戦時中は学生がここへ避難して授業も行ったという。当時と比べると、現状は約２ｍ程地表面がかさ上げされているのではないかという。

３.ブナビダヤ

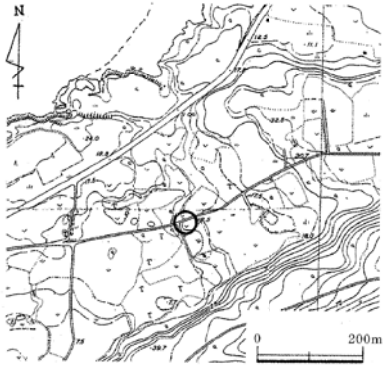


久部良集落の東方にある石灰岩の段丘に位置する自然壕。段丘の下部は町の天然記念物に指定されている湿地帯、「久部良ミト」にあたる。

壕は北向きに２ヶ所、南向きに１ヶ所それぞれ開口し、内部で連結している。北向きの開口部前に石積みが１ヶ所見られる。内部には床面を平坦に加工した部分も確認できた。

当該の壕に案内して頂いた久部良在住の長濱一男氏によると、戦時中は、久部良の小字である満田原の分団が当該の壕に避難し、70人～100人程いたとのことである。また、学校の授業もここで行ったという。因みにブナビダヤとは与那国の方言で「夜なべの壕」という意味である。

４.クブラバルダヤ



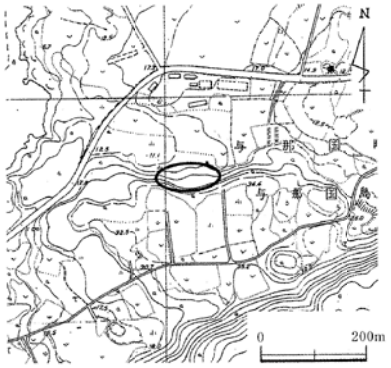
久部良集落の北東に位置する原野には、戦時中、久部良の小字である久部良原の住民が避難した自然壕が現在も残る。

壕は小規模なドリーネ地形の下部に位置し、素掘りでつくられた階段でドリーネを下りることができる。開口部は東向きで幅は約３ｍ、奥行は約６ｍ程である。壕があるドリーネ内には地下水が湧き出る小規模な横穴も見られ、現在は取水パイプが取り付けられている。周辺は土地改良による畑地が広がり、旧地形を窺い知ることはできない。

5.桃原の避難壕

久部良原の壕から北東の位置には東西方向に走る石灰岩の段丘地形が見られるが、段丘に点在する岩陰を戦時中の避難壕として利用していた。ほとんど岩陰には手を加えておらず、かつての居住地の裏手にあることから緊急避難用の壕として利用されていたことが窺える。

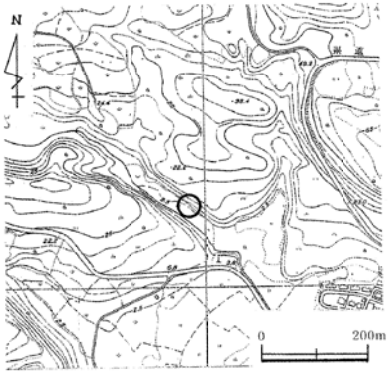
当該壕に避難していた住民は、大正期につくられた桃原集落の住民である。桃原は沖縄本島で農業を営んでいた人たちが移住して形成された集落で、当該の壕の近辺に位置していた。桃原の住民は戦後、沖縄に引き揚げ、集落は消滅してしまったが、現在でも壕周辺には、当時使用していた井戸跡などが現在も残っている。



6.比川の避難壕

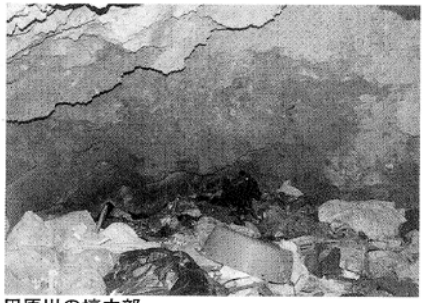
比川集落の西方には北西―南東方向に走る緩やかな谷状地形がある。その斜面に石灰岩の自然壕があり、戦時中は比川住民の避難壕として利用されていた。

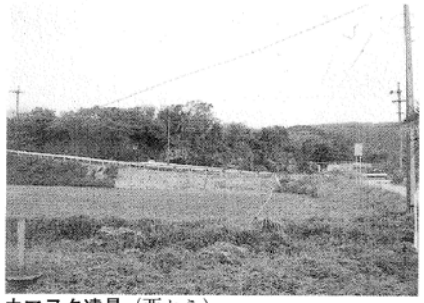
壕は開口部を3ヶ所有し、全て南西向きである。うち2ヶ所は内部で逆「く」の字状に連結している。壕はいずれも小規模で、高さ約1m強、奥行は最大で約3m程である。壕口前には、幅約1m程の平坦に造成された道が見られる。平坦に造成された箇所は内部の床面にも一部、見ることができる。

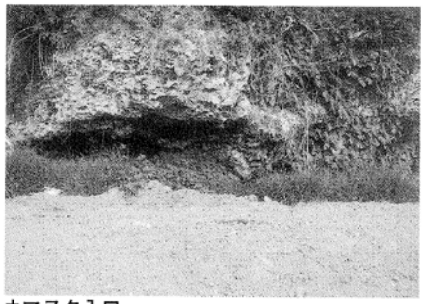


田原川の壕遠景（東から）

田原川の壕入口


田原川の壕内部


カマヌタ遠景（西から）

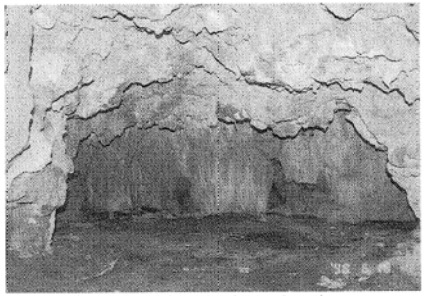

カマヌタ入口

カマヌタ内部埋没状況

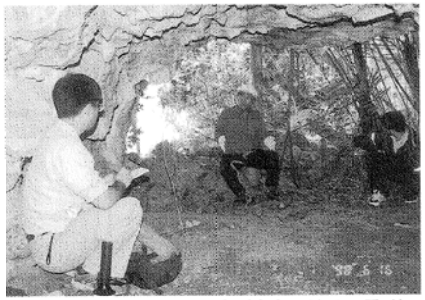
ブナビダヤ遠景（南西から）

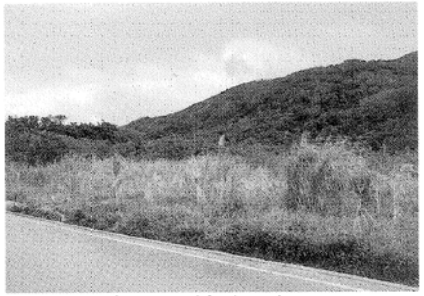
ブナビダヤ入口

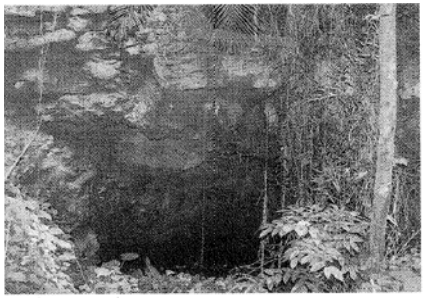
ブナビダヤ内部

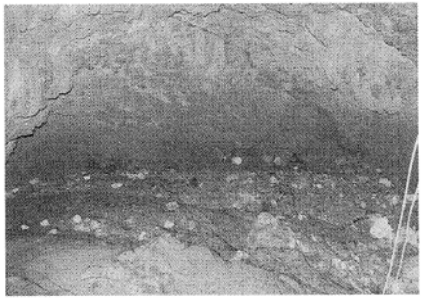

ブナビダヤ内部（床面を平坦に加工）

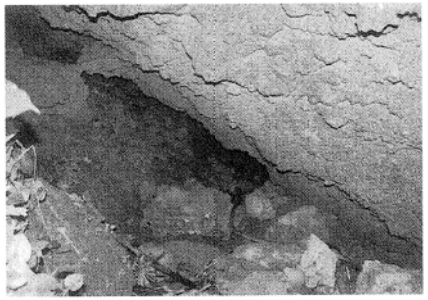
ブナビダヤ入口前石積


ブナビダヤにて聞き取り調査（中央が長濱一男氏）


クブラバルダヤ遠景（南西から）

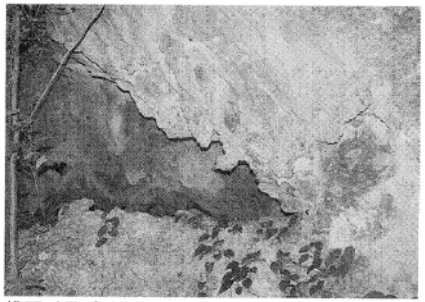

クブラバルダヤ入口


クブラバルダヤ内部

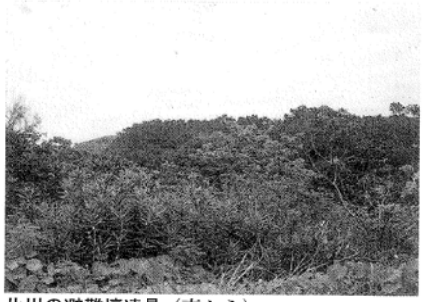

クブラバルダヤ湧水穴内部

桃原の避難壕遠景（北から）

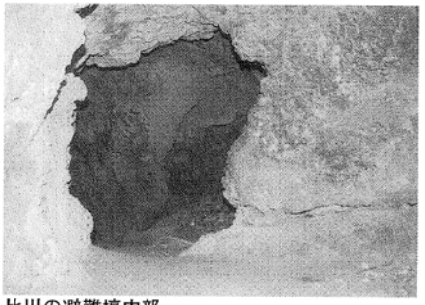
桃原避難壕岩陰（井戸跡近く）


桃原避難壕岩陰

桃原の避難壕周辺　井戸跡

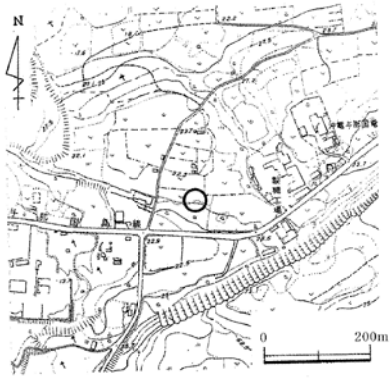

比川の避難壕遠景（南から）

比川の避難壕入口


比川の避難壕内部

比川の避難壕入口前（平坦に加工）

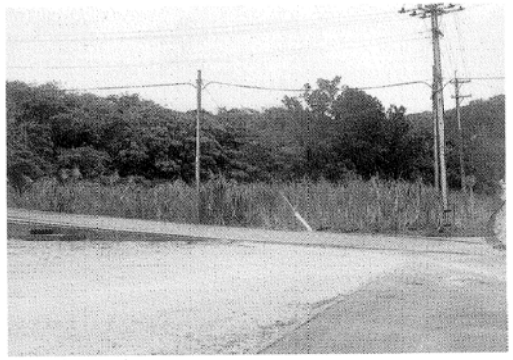
7.潮原の陸軍兵舎跡



所在地：与那国町与那国
立地（標高）：平地（約20m）
形態：構築物
種別：兵舎
現状：陸軍兵舎の基礎となる石積が残存
保存状況：畑地脇の原野に放置
築造者：独立歩兵第298大隊の小隊
築造年月日：1944年（昭和19）頃
戦時中の使用状況：陸軍兵舎として利用
主な遺構：兵舎跡の基礎となる石積み

概　要

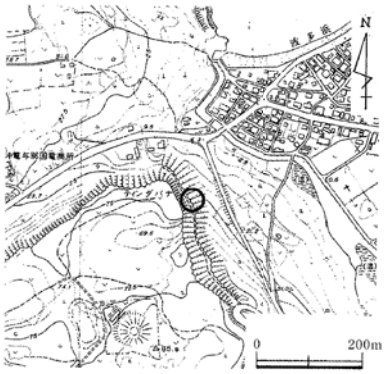
県道与那国島線（216号線）を祖納から久部良方面に進むと、比川方面に向かう交差点が見えてくる。その交差点の近辺には戦時中、独立歩兵第298大隊(通称・毛木部隊）の小隊が、駐屯地として兵舎を構築していた。現在、当該地は雑木が繁茂した状態であり、残存している遺構は、兵舎跡の基礎となる野面積みの石積みが高さ0.5m～1.1m、全長約9mに亘って東西方向に走る。近辺から採取できる拳大の石を積み上げており、ほとんど崩れが見られず良好に残存している。建物基礎は現在、撤去されているため、建物規模や間取りといった詳細は掴めないが、聞き取りによると茅葺きの小規模で簡易な建物であったとのことである。


遠景（西から）

与那国島に派兵された軍隊は、陸軍の独立歩兵第298大隊の守谷秋蔵隊長が率いる小隊30人で、1944年（昭和19）当該地に兵舎を構築した。また、海軍は沖縄方面根拠地隊所属の監視哨が、与那国島の最高峰である宇良部岳頂上に1942年(昭和17)設置され、「与那国島見張所」と称した。44年には平石良一兵曹長以下15名が守備につき、電波探知機を備えて沖縄方面根拠地隊と無線で連絡を取り合った。宇良部岳頂上には現在、鉄塔が建てられており、その鉄塔を建築する際に監視哨は破壊されてしまったとのことである。

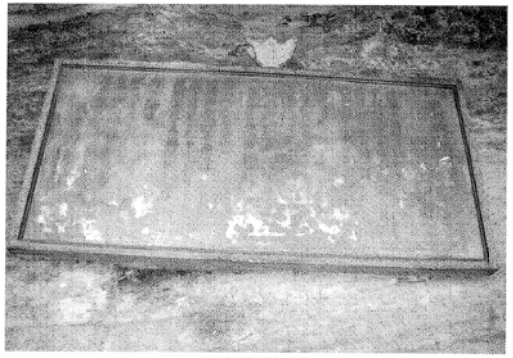
兵舎跡の石積基礎部分

8.伊波南哲詩碑



所在地：与那国町与那国
立地（標高）：丘陵（標高40m）
形態：碑銘
種別：記念碑
現状：一部、銘が削られている。
保存状況：良好
築造者：不明
築造年月日：1943年（昭和18）
戦時中の使用状況：国威高揚のために設置
主な遺構：額型の石版

概　要



八重山出身の詩人・作家である伊波南哲作の詩文が額型の石版に刻まれて、ティンダハナ下の展望台壁面に嵌め込む形で掲げられている。砂岩製の石版を横長の額形に彫り上げ、その枠内に文字を刻む。文字の部分にのみ、朱が塗布されており、字体は行書体に近い。枠外の上部中央には鳥を基調としたレリーフが刻まれており、その中央には四角枠に文字状のデザインが見られるが詳細は解らない。ティンダハナは祖納集落の南西部に位置しており、集落内のどこからでも見ることができる。因みに1974年（昭和49）には景勝地として県指定名勝となっている。この詩碑も集落内からも望むことができるため、集落住民の国威を高揚させていく上では格好の場所に設置していると言える。

伊波南哲は1902年（明治35）現在の石垣市登野城で生誕し、1922年（大正11）に近衛兵に選抜され、上京。その後、警視庁に入庁、1941年（昭和16）に辞職して以降、作家生活に入る。この「讃・與那國島」は作家生活2年目に創作されたもので、与那国島の風土、景観を謡ったものである。創作時は太平洋戦争の真っ只中であり、「南海の防壁」「皇国南海の鎮護に挺身」「沈まざる二十五万噸の航空母艦」と軍事色の強い内容となっている。詩文の最後の行が削られている以外は判読は可能である。以下に前文を掲載する。

『讃・與那國島』　伊波南哲

「荒潮の息吹にぬれて　千古の伝説をはらみ 美と力を兼ね備えた　南海の防壁與那国島　行雲流水己の美と力を信じ　無限の情熱を秘めて　太平洋の怒濤に拮抗する　南海の防波堤與那国島　宇良部岳の霊峰　田原川の尽きせぬ流れ　麗しき人情の花を咲かせて　巍然とそそり立つ與那國島よ　おお汝は黙々として　皇国南海の鎮護に挺身する　沈まざる二十五万噸の航空母艦だ」

紀元二千六百三年三月

第5章　結　語

平成16年～17年度にかけて実施した八重山諸島地区の戦争遺跡詳細分布調査において所在を確認した戦争遺跡は、111ヶ所であった。これら戦争遺跡は人工壕、自然壕が主として確認され、他に建造物、砲台跡、記念碑等も確認された。各市町ごとの内訳は以下の通りである。

石垣市　69ヶ所　　竹富町　34ヶ所　　与那国町　8ヶ所

沖縄県内でも八重山諸島は1922年（大正11）、西表島船浮において要塞建設が予定されていたことから日露戦争直後から東中国海における戦略的位置付けは高かったものと見られている。1941年（昭和16）の船浮要塞建設に始まり、1944年（昭和19）石垣島にも旧日本陸軍が本格的に駐屯するようになると、石垣島各所に陣地壕やトーチカ、銃眼等が配置されるようになる。同時に空襲が激しくなると八重山諸島住民は同時に避難壕を集落内外に構築、若しくは自然洞穴を避難壕に利用するようになる。このように八重山諸島は大正期から戦略的に重視され、太平洋戦争開始期から終戦直前まで旧日本軍が関係し、住民も日常生活に支障をきたしていたという、それぞれの状況を明示させる戦争遺跡が当該地域において確認することができた。以下に、各地域ごとに触れていくこととする。

1）石垣島

まず石垣島においては地域の研究者による実地調査の成果が既に挙がっており、それを追認していく形で調査を進めた。未だ図化されていない壕の概要や建物跡のプランを把握していくことに努めたが、当初の予想以上に戦争遺跡の数が多く、時間的制約も有り、全てを把握することができなかった。とりわけ広範囲に施設を配置させる戦争遺跡に関してはより広域の踏査を行う必要性があるように思われた。そのいくつかを以下に掲げる。

於茂登岳東麓の戦争遺跡群は広範囲でかつ残存状況も良好な遺構も多く見られた。今回の調査では特に遺構が密集している区域の把握に努めたが、谷沿いに壕を構築している状況を見ると隣接する谷筋にも施設が配置されていた可能性は高い。また、白水の戦争遺跡群でも広範囲に地下壕、塹壕、タコ壺、カマド跡、平場が配置されていることが確認され、中でも大川住民避難地においてはかなりの密集度で塹壕、タコ壺が掘られていることが今回の調査で新たに判明した。踏査範囲を広げれば、遺構が更に確認されるものと思われる。広範囲に遺構が残存する戦争遺跡で、上記の於茂登岳東麓の戦争遺跡群、白水の戦争遺跡群以外ではバンナ岳の戦争遺跡群を掲げることができる。バンナ岳頂上の壕、麓の塹壕やタコ壺、コンクリート造りの壕といった多様な遺構を確認することができた。周辺は公園となっているため、一部を除いて良好に残存しており、今後において遺構が確認される可能性が高い戦争遺跡と言える。

壕群ではフルスト原の海軍壕群、川平湾の特攻艇秘匿壕群、宮良の特攻艇秘匿壕群がある。何れも一直線上に掘り込んだ壕で、崖下にほぼ同方向で壕口を開けている。後2者は海岸に近くに構築された特攻艇秘匿壕で、現在も枕木痕や石積みが壕内に残されている。川平湾並びに宮良川近くの湾状汀線に配置されていることから石垣島においては湾状地形が特攻艇秘匿壕の立地条件として最適であったことが窺われる。フルスト原の海軍壕群はかつての海軍南飛行場（現・石垣空港）と隣接しているため、飛行場と連動した形で使用されていたと考えられ、川平湾の特攻艇秘匿壕群、宮良の特攻艇秘匿壕群とは性格を異にしていると言える。

今回の調査に関しては住民避難壕（以下、避難壕）が多く残されていたことも改めて確認された。避難壕は陣地壕と比較しても小規模で、加工度が低いためにあまり認識されにくく、戦後の開発で埋没ないし破壊された避難壕は数多くある。石垣氏宅の避難壕といった民家の敷地内に構築された壕や、集落から距離を置いた場所にある自然洞穴を避難壕として利用した宮良牧中の避難壕を始めとして、石垣島各地に多様な形で残存している。これらの壕も八重山地域の戦争を語る上で欠かすことのできない戦争遺跡であることは言うまでもなく、今後において平和学習等で活用されていく格好の材料となっていくものと思われる。余談ではあるが、これら避難壕に関しては各地域の研究者および地元の有識者から多大な情報を頂いたことと同時にこれまでの地道な調査成果の積み重ねがあったからこそ、場所の特定や現状を把握すること等、調査が円滑に実施することができたと言える。地域の文化財は地域住民によって認識されていることを調査を通して感じることができた。

2）竹富町

離島から成る竹富町の島々では西表島を除いて避難壕が最も多く確認された。石垣島の避難壕と同様に自然洞穴を利用したものであり、主に聞き取り調査によって数多くの避難壕が確認された。海岸縁や海岸から少し内陸に入った場所にある自然洞穴を利用している避難壕が一般的に見られ、何れも集落近くに立地している。中には新城島（上地島）のニスヌガマのように波の浸食を受けてノッチ状となった石灰岩を一時的な避難所として利用すると言った場所や島の最高地点が17.2mという黒島にある竪穴の避難壕といった、各島の地域性に則した避難壕が設定されていたことを窺うことができた。数は少ないものの旧日本軍が構築した壕も確認され、それらは竹富島南海岸の銃眼跡・小浜島のアールムティ特攻艇秘匿壕といった、石垣島から近い離島に見ることができ、石垣港を中心として旧日本軍の施設が配置されていたことを読み取ることができる。

そして西表島の西側には船浮要塞跡がかなり良好な状態で残っているのが確認できたのは今回の調査では大きな成果であった。かつて船浮要塞は祖納半島、外離島、内離島、サバ崎の4管区に分かれており、各区において要塞に係わる遺構が残されていた。具体的には兵舎跡や付属のトイレ跡、砲台跡、避難壕、病院跡、擬砲跡、桟橋跡といった一連の施設跡を把握することができた。戦後は無人島であったことからそのまま60年間、放置された状態で残されていたと言え、国内でもこれほど残存状況が良好な要塞跡は極めて少ないと言える。また、船浮集落南側にある戦争遺跡群でも桟橋跡の残る砂浜を中心として多くの壕が残存していた。一帯は地形改変等が全く行われておらず、船浮要塞同様に戦後はそのまま放置された状態で残されている。これらの戦争遺跡からは石垣港から竹富島、小浜島にかけての一帯と船浮湾一帯が旧日本軍の戦略的重要地点として認識されていたことを容易に理解することができる。同時に各施設の配置状況からかなり広域的な戦闘を想定しており、あくまで軍主体の政策が当該地域において遂行されていたことを窺い知ることができる。

3）与那国町

与那国町は与那国島1島から成る。戦時中は旧日本海軍沖縄方面根拠地隊所属の監視哨が1942年（昭和17）宇良部岳山頂に設置されていた。1945年（昭和20）に空襲を受け、戦後の鉄塔建設時に破壊されてその痕跡は現在、見ることができない。一方で1944年（昭和19）に独立歩兵第298大隊の小隊守谷部隊が祖納西側に配置された。その兵舎跡が潮原に残り、与那国町で唯一の旧日本軍関係の戦争遺跡として現在も見ることができる。

大規模な軍備は与那国島内には配置されなかったが久部良・祖納集落で空襲があったため、住民は避難壕を利用している。今回の調査でそのほとんどが集落から徒歩で20分程の距離にあり、自然洞穴を利用したものが大半であることが判明した。中にはカマヌタの避難壕のように昔から祖納集落住民の休憩場所として親しまれていた自然洞穴を避難壕として利用していることから、身近な場所にある洞穴を空襲時には一時的な避難所として使い、新たに壕を掘り込んで構築するといったことはなかったものと思われる。石垣島や西表島船浮のように、本格的に軍が駐屯していなかったために壕構築の指示が住民に行き渡っていなかったのか、自然洞穴利用の壕で事足りていたのか、何れかの理由が考えられる。軍民間における有事の際の対応が与那国町ではどのようなものであったのか、更に考えていく必要があることをこのような戦争遺跡の有り方から提起させられた。

4）今後の課題

今回の調査では当初確認されていた戦争遺跡の確認に加えて新たに確認された戦争遺跡が多数あった。遺構で見ると建物跡を最も多く確認することができたのは大きな成果であったと最後に掲げておく。船浮要塞で確認された建物跡が最も多いが、他に与那国町の潮原の陸軍兵舎跡や石垣市の平久保崎の海軍特設見張所跡、名蔵のトーチカに見られるような地上に構築した建造物が予想以上に残存していた。戦争遺跡においては地下壕やタコ壺といった地下に掘り込んだ遺構が良く残存し、地上の構築物は戦後のスクラップ回収等で建物基礎まで破壊されてしまうケースがほとんどである。建物跡から当時の兵舎の規模や部屋割り、更に配置された人員の数等、新たな沖縄戦のあり方を提示できる資料になってくるものと思われる。当然ながらこれらに関する聞き取り調査も早急に行っていく必要があり、実際の遺構の状況とをあわせて検討していかなければならない。

地域で見ると竹富町、与那国町において避難壕を始めとする戦争遺跡が新たに確認された。石垣島以外の離島における戦争遺跡の実態がかなり明確になったものと思われる。このことは従来まで竹富町、与那国町内の戦争遺跡が不明瞭であったことの裏返しで、戦争体験者が語ることがなければ、その存在が知られることなく歴史の闇に置き去りにされていく遺跡で有ったともいえる。去る大戦が終わって60余年が経過しているが未だ戦時体験者は存命である。しかし、戦時体験者の多くが高齢となり、聞き取り対象者もかなり限られてきている。

今回の沖縄県戦争遺跡詳細分布調査事業がこの報告書の刊行をもって終了となり、ひとつの区切りとして位置付けることもできるが、決して戦争遺跡の調査がこれで完結したわけではない。一人でも多くの戦時体験者から言質を取り、未だ確認されずにある戦争遺跡の確認を今後も地道に続けていく必要性は当然ながらある。当時の沖縄県における戦争の新たな側面を提起していける原材料として戦争遺跡を位置付け、更にその意味を問い続けていくべきである。

（参考文献）

瀬名波栄『宮古島戦記』先島戦記刊行会　1966
瀬名波栄『石垣島防衛戦史』先島戦記刊行会　1970
沖縄県教育委員会『沖縄県史10　沖縄戦記録２』国書刊行会　1974
石垣市史編集室『市民の戦時・体験記録　第一集』石垣市役所　1983
沖縄大百科事典刊行事務局『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社　1983
石垣市史編集室『市民の戦時・体験記録　第二集』石垣市役所　1984
石垣市史編集室『市民の戦時・体験記録　第三集』石垣市役所　1985
木崎甲子郎『琉球弧の地質誌』沖縄タイムス社　1985
石垣市史編集室『市民の戦時・体験記録　第四集』石垣市役所　1988
大田静男『八重山の戦争』南山舎　1996
竹富町史編集委員会　町史編集室『竹富町史　第十二巻　資料編　戦争体験記録』竹富町役場　1996
石垣市総務部市史編集室『平和祈念ガイドブック　ひびけ平和の鐘』石垣市　1996
瀬名波栄『太平洋戦争記録　石垣島方面陸海軍作戦』沖縄戦史刊行会　1996
八重山戦争マラリア犠牲者追悼祈念誌編集委員会『悲しみをのり越えて—八重山戦争マラリア犠牲者追悼平和祈念誌—』沖縄県生活福祉部援護課　1997
大城将保「第32軍の沖縄配備と全島要塞化」『沖縄戦研究Ⅱ』沖縄県教育委員会　1999
竹富町史編集室『竹富町史資料集①　鉄田義司日記—船浮要塞重砲兵連隊の軌跡—』竹富町役場　2000
沖縄県立埋蔵文化財センター『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査（Ⅰ）—南部編—』沖縄県立埋蔵文化財センター　2001
沖縄県立埋蔵文化財センター『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査（Ⅱ）—中部編—』沖縄県立埋蔵文化財センター　2002
高良倉吉『沖縄県の地名』平凡社　2002
与那国町史編纂委員会事務局「交響する島宇宙　日本最西端　与那国島の地名と風土」『与那国町史　第1巻』与那国町役場　2002
菊池実・十菱駿武『しらべる戦争遺跡の事典』柏書房　2002
沖縄県立埋蔵文化財センター『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査（Ⅲ）—北部編—』沖縄県立埋蔵文化財センター　2003
沖縄県立埋蔵文化財センター『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査（Ⅳ）—本島周辺離島及び那覇市編—』沖縄県立埋蔵文化財センター　2004
沖縄県教育庁文化課『沖縄県近代化遺産（建造物等）総合調査報告書』沖縄県教育委員会　2004
沖縄県立埋蔵文化財センター『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査（Ⅴ）—宮古諸島編—』沖縄県立埋蔵文化財センター　2005

沖縄県立図書館蔵
平成
18.8.10

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第41集

沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(VI)

ー八重山諸島編ー

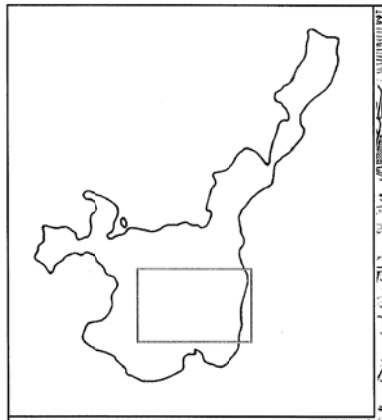
2006年（平成18）3月27日

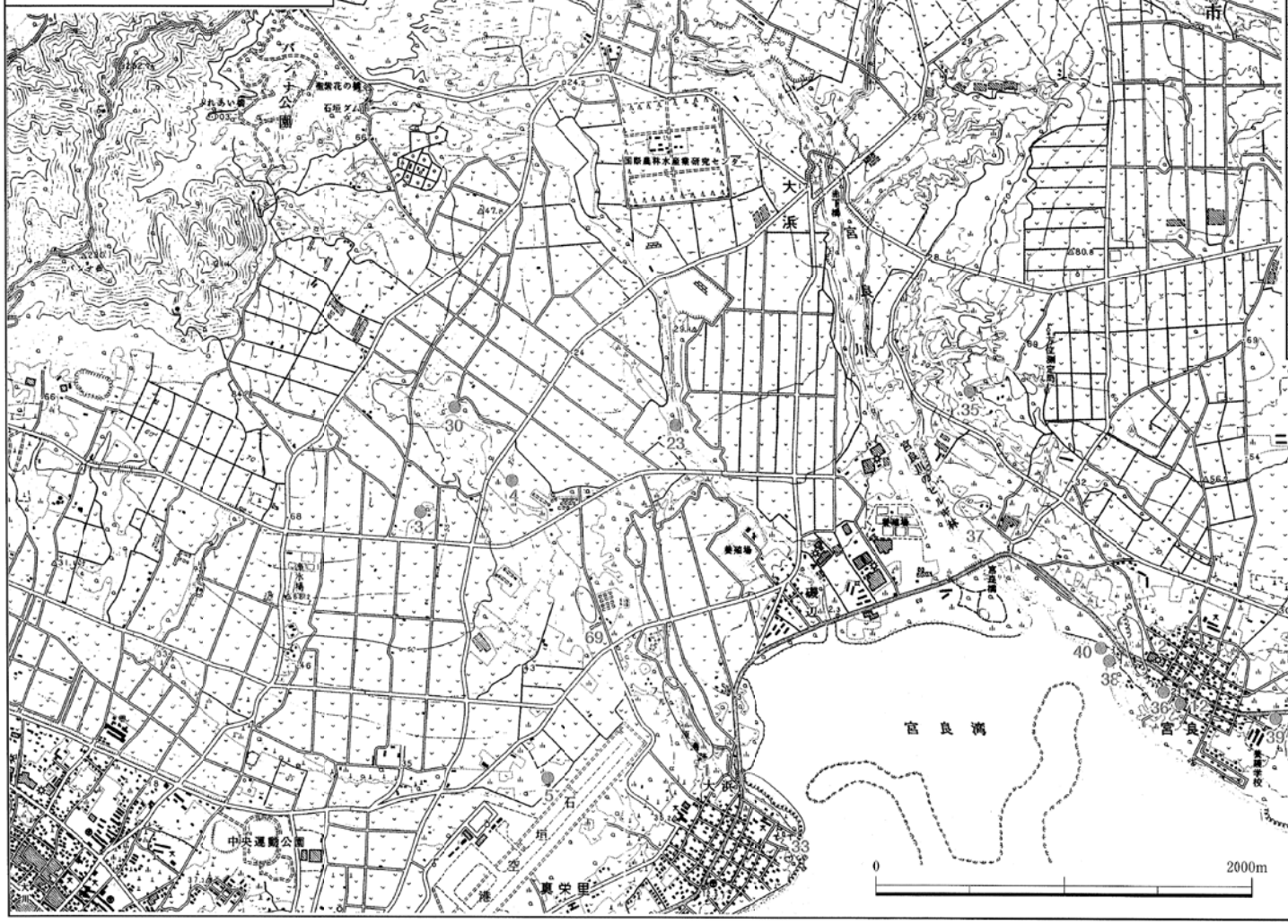
発　行　沖縄県立埋蔵文化財センター
編　集　沖縄県立埋蔵文化財センター
〒903-0125　中頭郡西原町字上原193ー7
TEL 098(835)8751～8752
http://www.maizou-okinawa.gr.jp/

印　刷　丸正印刷株式会社
〒903-0211　沖縄県西原町小那覇1215番地
TEL 098(835)8181（代）

© 沖縄県立埋蔵文化財センター　2006　Printed in Japan
許可なく本書の無断複製、転載、複写を禁ずる。

① 石垣市

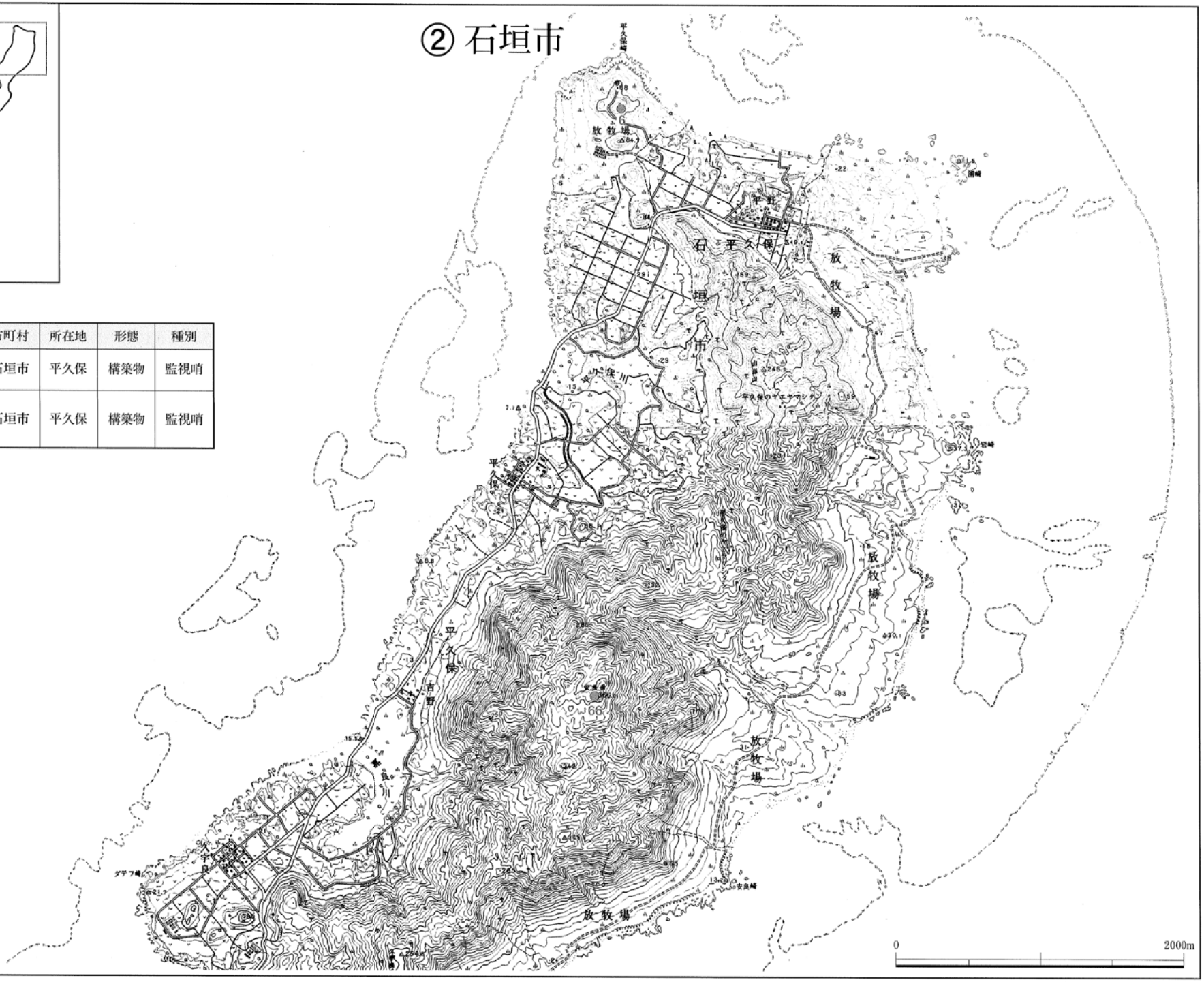




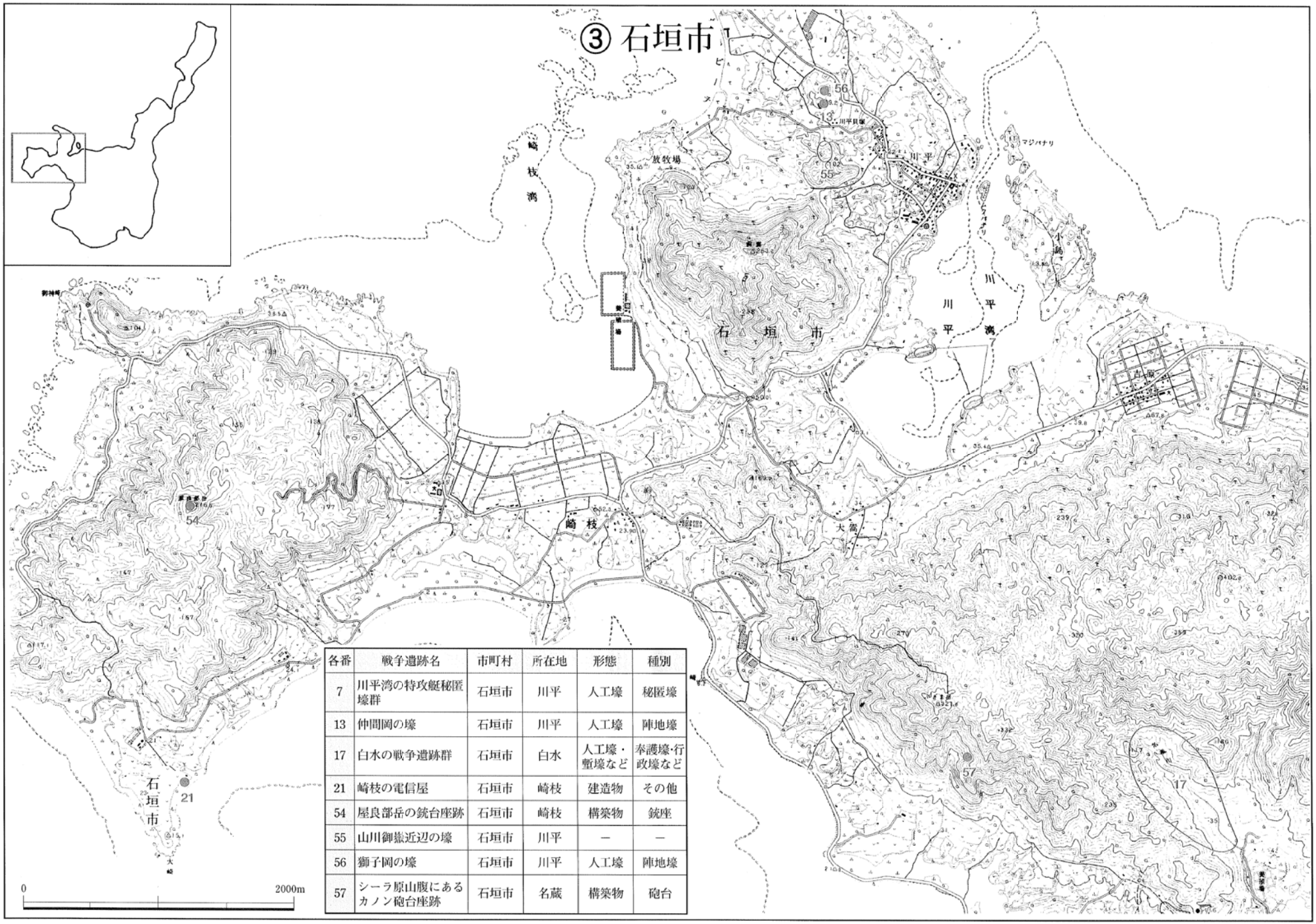
各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	形態	種別
1	フルスト原の海軍壕群	石垣市	大浜	人工壕	弾薬庫
2	宮良の特攻艇秘匿壕群	石垣市	宮良	人工壕	秘匿壕
3	地城御嶽の壕	石垣市	平得	人工壕	陣地壕
4	シイ原の壕	石垣市	真栄里	人工壕	陣地壕
5	大浜の掩体壕	石垣市	大浜	構築物	掩体壕
12	石垣氏宅の避難壕	石垣市	宮良	人工壕	避難壕
23	大浜ナーカーラの壕	石垣市	大浜	人工壕	陣地壕
30	サンニの慰安所	石垣市	登野城	構築物	その他
33	大浜東海岸の銃眼跡	石垣市	大浜	人工壕	機関銃壕
35	宮良・高山原の垂直L字型壕	石垣市	宮良	人工壕	陣地壕
36	ナカノオンの壕	石垣市	宮良	自然壕	避難壕
37	宮良住民避難壕(ナーバカ)	石垣市	宮良	自然壕	避難壕
38	幕田隊銃眼跡	石垣市	宮良	人工壕	機関銃壕
39	宮良バタンジ洞窟	石垣市	宮良	自然壕	避難壕
40	宮良河口の震洋特別攻撃隊特攻艇桟橋跡	石垣市	宮良	構築物	桟橋
69	海軍弾薬庫壕	石垣市	大浜	人工壕	弾薬庫壕

② 石垣市

各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	形態	種別
6	平久保崎の海軍特設見張所跡	石垣市	平久保	構築物	監視哨
66	安良岳の海軍特設見張所跡(石垣特設見張所)	石垣市	平久保	構築物	監視哨



③ 石垣市

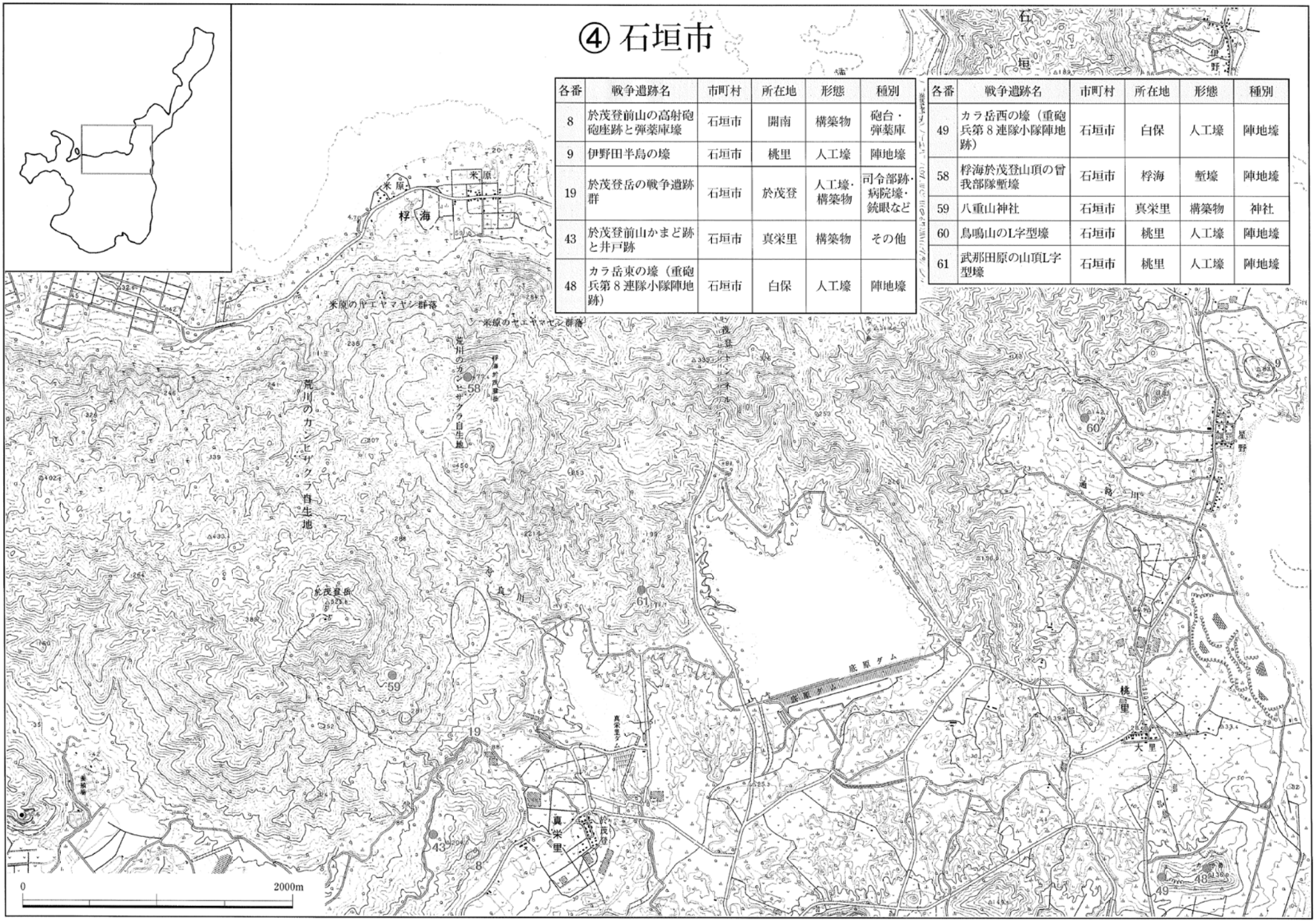


各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	形態	種別
7	川平湾の特攻艇秘匿壕群	石垣市	川平	人工壕	秘匿壕
13	仲間岡の壕	石垣市	川平	人工壕	陣地壕
17	白水の戦争遺跡群	石垣市	白水	人工壕・塹壕など	奉護壕・行政壕など
21	崎枝の電信屋	石垣市	崎枝	建造物	その他
54	屋良部岳の銃台座跡	石垣市	崎枝	構築物	銃座
55	山川御嶽近辺の壕	石垣市	川平	―	―
56	獅子岡の壕	石垣市	川平	人工壕	陣地壕
57	シーラ原山腹にあるカノン砲台座跡	石垣市	名蔵	構築物	砲台

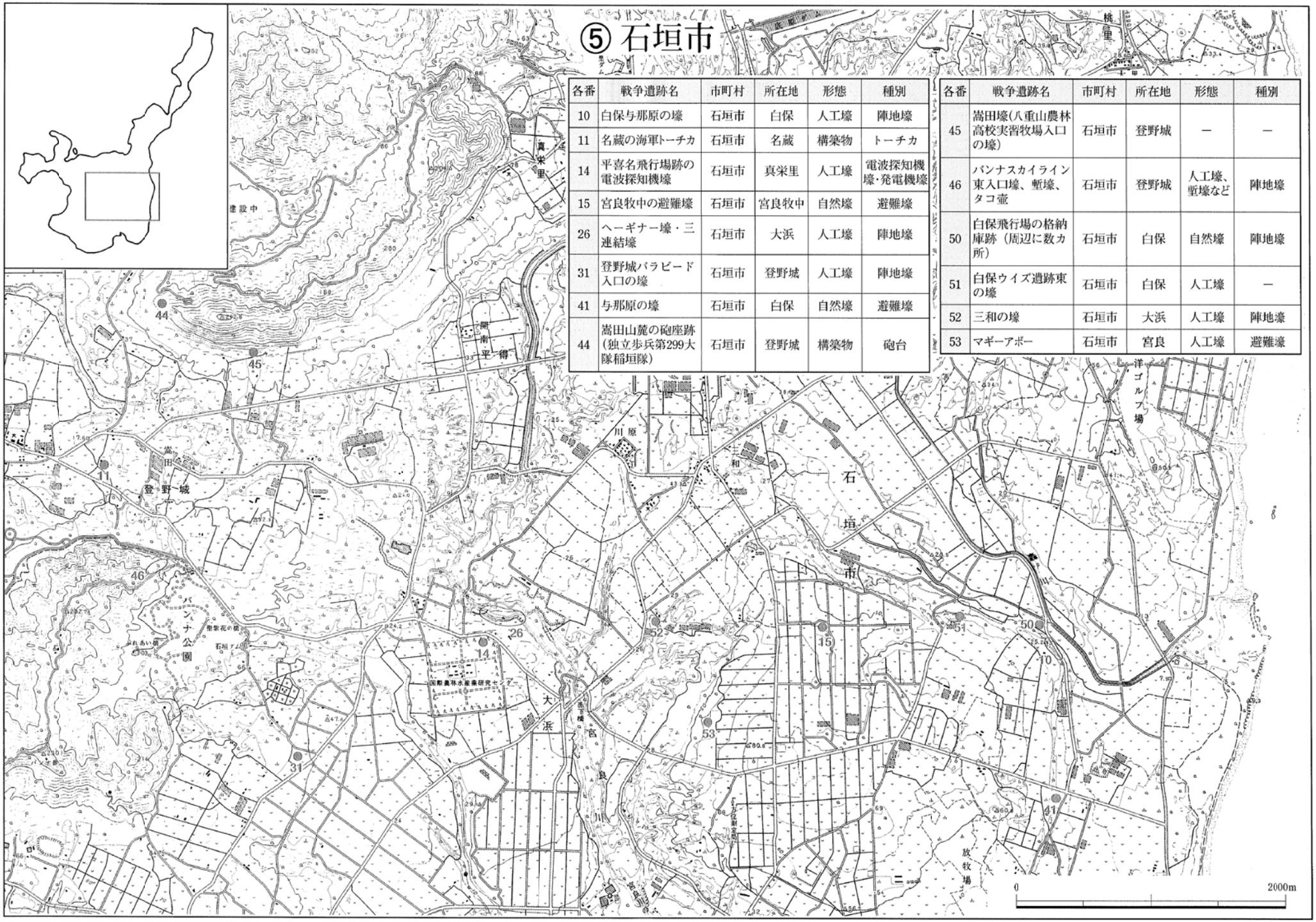
④ 石垣市

各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	形態	種別
8	於茂登前山の高射砲砲座跡と弾薬庫壕	石垣市	開南	構築物	砲台・弾薬庫
9	伊野田半島の壕	石垣市	桃里	人工壕	陣地壕
19	於茂登岳の戦争遺跡群	石垣市	於茂登	人工壕・構築物	司令部跡・病院壕・銃眼など
43	於茂登前山かまど跡と井戸跡	石垣市	真栄里	構築物	その他
48	カラ岳東の壕（重砲兵第８連隊小隊陣地跡）	石垣市	白保	人工壕	陣地壕

各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	形態	種別
49	カラ岳西の壕（重砲兵第８連隊小隊陣地跡）	石垣市	白保	人工壕	陣地壕
58	桴海於茂登山頂の曾我部隊塹壕	石垣市	桴海	塹壕	陣地壕
59	八重山神社	石垣市	真栄里	構築物	神社
60	鳥鳴山のL字型壕	石垣市	桃里	人工壕	陣地壕
61	武那田原の山頂L字型壕	石垣市	桃里	人工壕	陣地壕



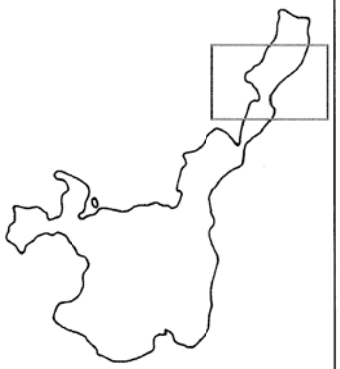
⑤ 石垣市



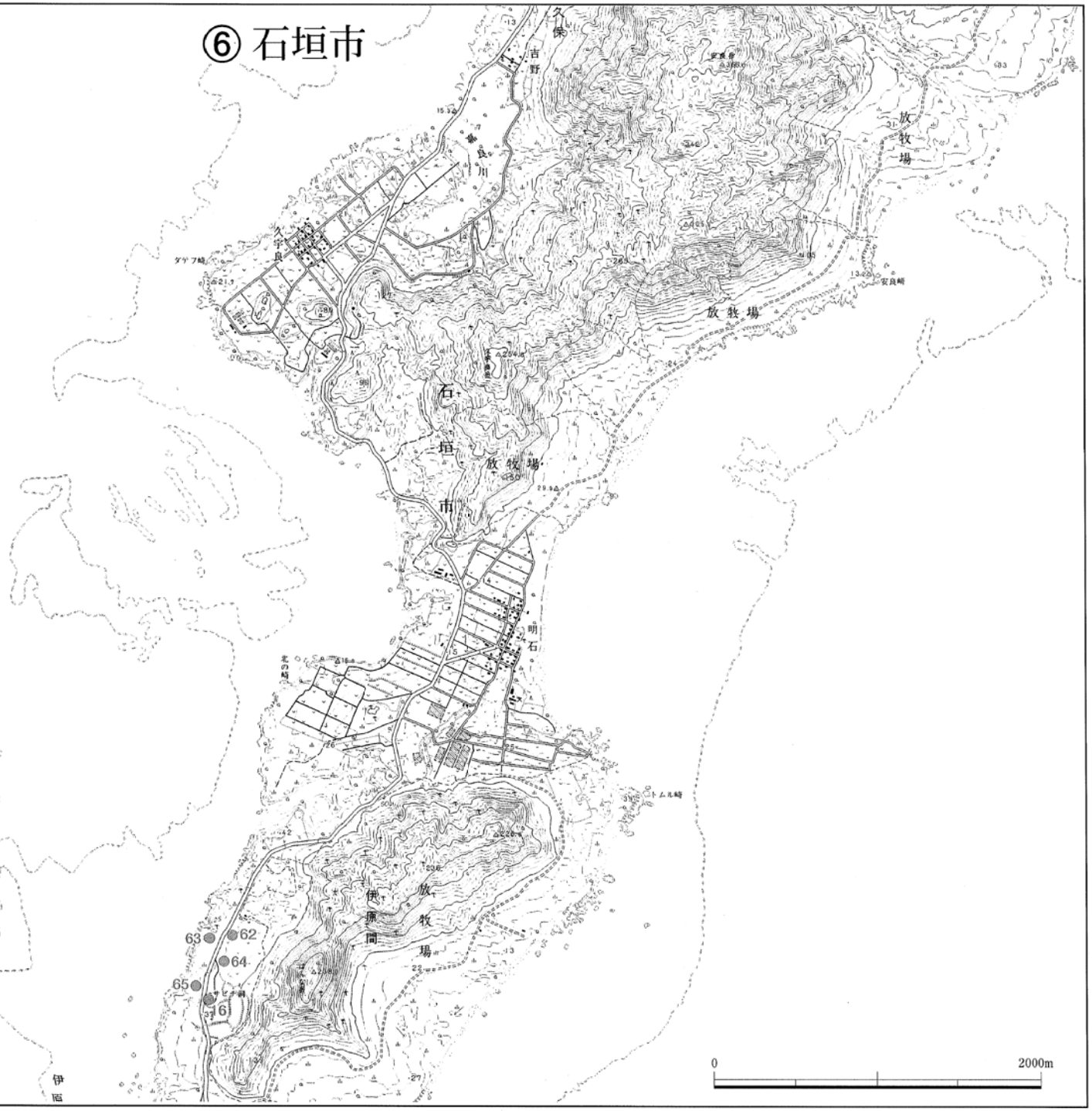
各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	形態	種別
10	白保与那原の壕	石垣市	白保	人工壕	陣地壕
11	名蔵の海軍トーチカ	石垣市	名蔵	構築物	トーチカ
14	平喜名飛行場跡の電波探知機壕	石垣市	真栄里	人工壕	電波探知機壕・発電機壕
15	宮良牧中の避難壕	石垣市	宮良牧中	自然壕	避難壕
26	ヘーギナー壕・三連結壕	石垣市	大浜	人工壕	陣地壕
31	登野城バラビード入口の壕	石垣市	登野城	人工壕	陣地壕
41	与那原の壕	石垣市	白保	自然壕	避難壕
44	嵩田山麓の砲座跡（独立歩兵第299大隊稲垣隊）	石垣市	登野城	構築物	砲台

各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	形態	種別
45	嵩田壕(八重山農林高校実習牧場入口の壕)	石垣市	登野城	―	―
46	バンナスカイライン東入口壕、塹壕、タコ壺	石垣市	登野城	人工壕、塹壕など	陣地壕
50	白保飛行場の格納庫跡（周辺に数カ所）	石垣市	白保	自然壕	陣地壕
51	白保ウィズ遺跡東の壕	石垣市	白保	人工壕	―
52	三和の壕	石垣市	大浜	人工壕	陣地壕
53	マギーアボー	石垣市	宮良	人工壕	避難壕

⑥ 石垣市

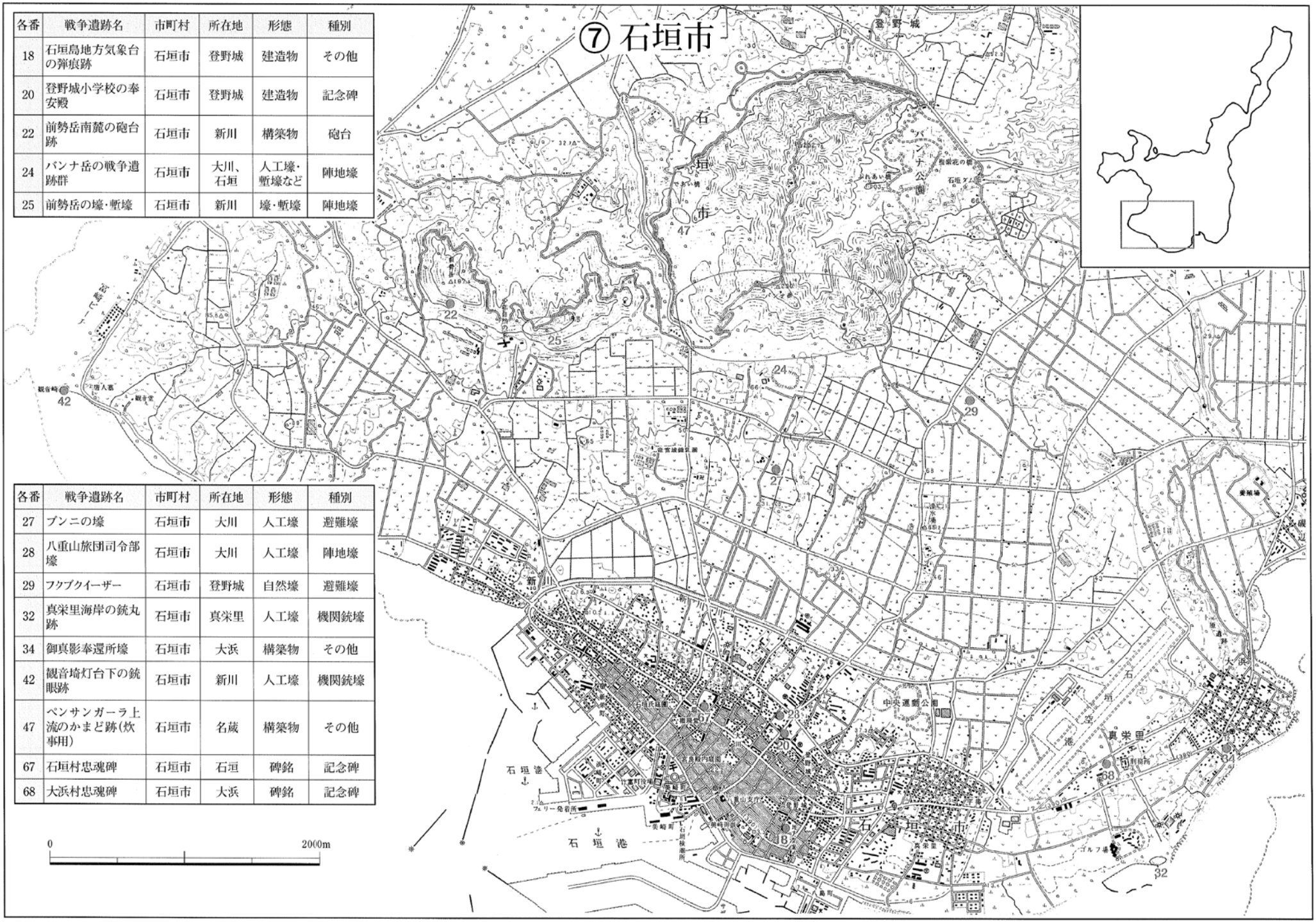


各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	形態	種別
16	伊原間のサビチ洞	石垣市	伊原間	自然壕	避難壕
62	ヌーダアブ（1）	石垣市	伊原間	自然壕	避難壕
63	ミッチャアブ	石垣市	伊原間	自然壕	避難壕
64	イガイズ	石垣市	伊原間	自然壕	避難壕
65	ヌーダアブ（2）	石垣市	伊原間	自然壕	避難壕



⑦ 石垣市

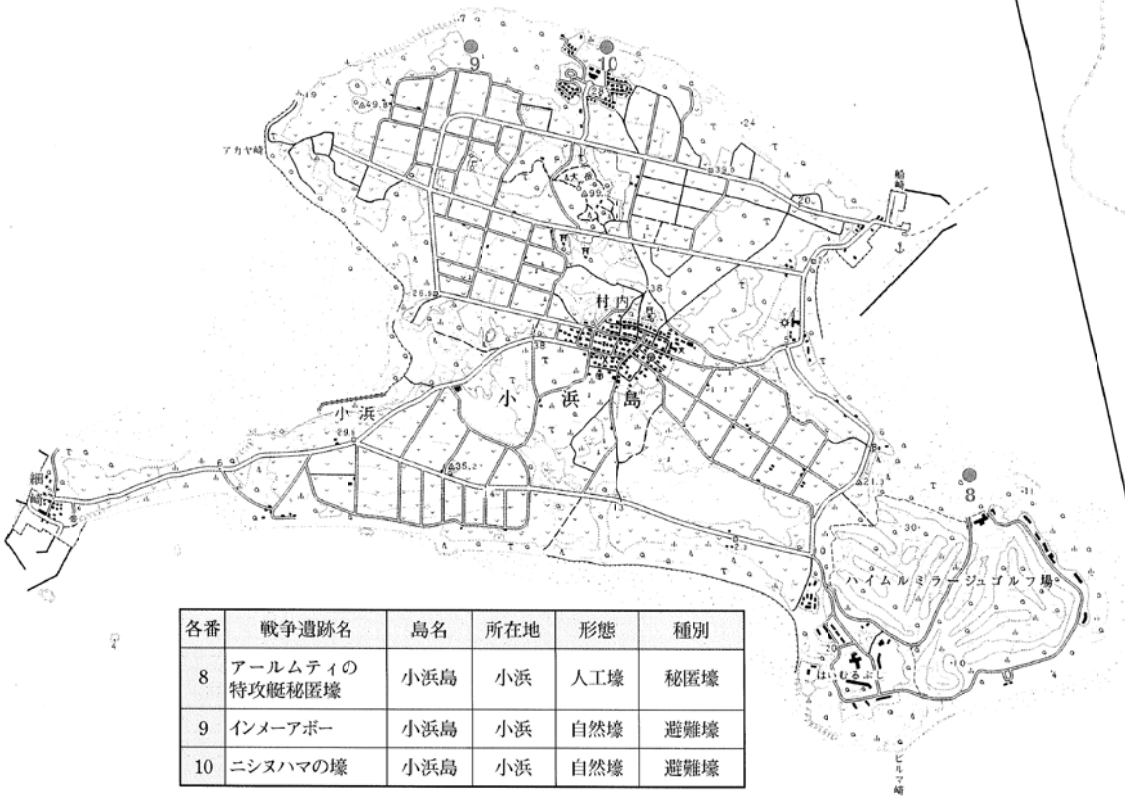
各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	形態	種別
18	石垣島地方気象台の弾痕跡	石垣市	登野城	建造物	その他
20	登野城小学校の奉安殿	石垣市	登野城	建造物	記念碑
22	前勢岳南麓の砲台跡	石垣市	新川	構築物	砲台
24	バンナ岳の戦争遺跡群	石垣市	大川、石垣	人工壕・塹壕など	陣地壕
25	前勢岳の壕・塹壕	石垣市	新川	壕・塹壕	陣地壕



各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	形態	種別
27	ブンニの壕	石垣市	大川	人工壕	避難壕
28	八重山旅団司令部壕	石垣市	大川	人工壕	陣地壕
29	フクブクイーザー	石垣市	登野城	自然壕	避難壕
32	真栄里海岸の銃丸跡	石垣市	真栄里	人工壕	機関銃壕
34	御真影奉還所壕	石垣市	大浜	構築物	その他
42	観音埼灯台下の銃眼跡	石垣市	新川	人工壕	機関銃壕
47	ペンサンガーラ上流のかまど跡(炊事用)	石垣市	名蔵	構築物	その他
67	石垣村忠魂碑	石垣市	石垣	碑銘	記念碑
68	大浜村忠魂碑	石垣市	大浜	碑銘	記念碑

① 竹富町

各番	戦争遺跡名	島名	所在地	形態	種別
19	アンヌカー	鳩間島	鳩間	自然壕	避難壕
20	パチンガカー	鳩間島	鳩間	自然壕	避難壕



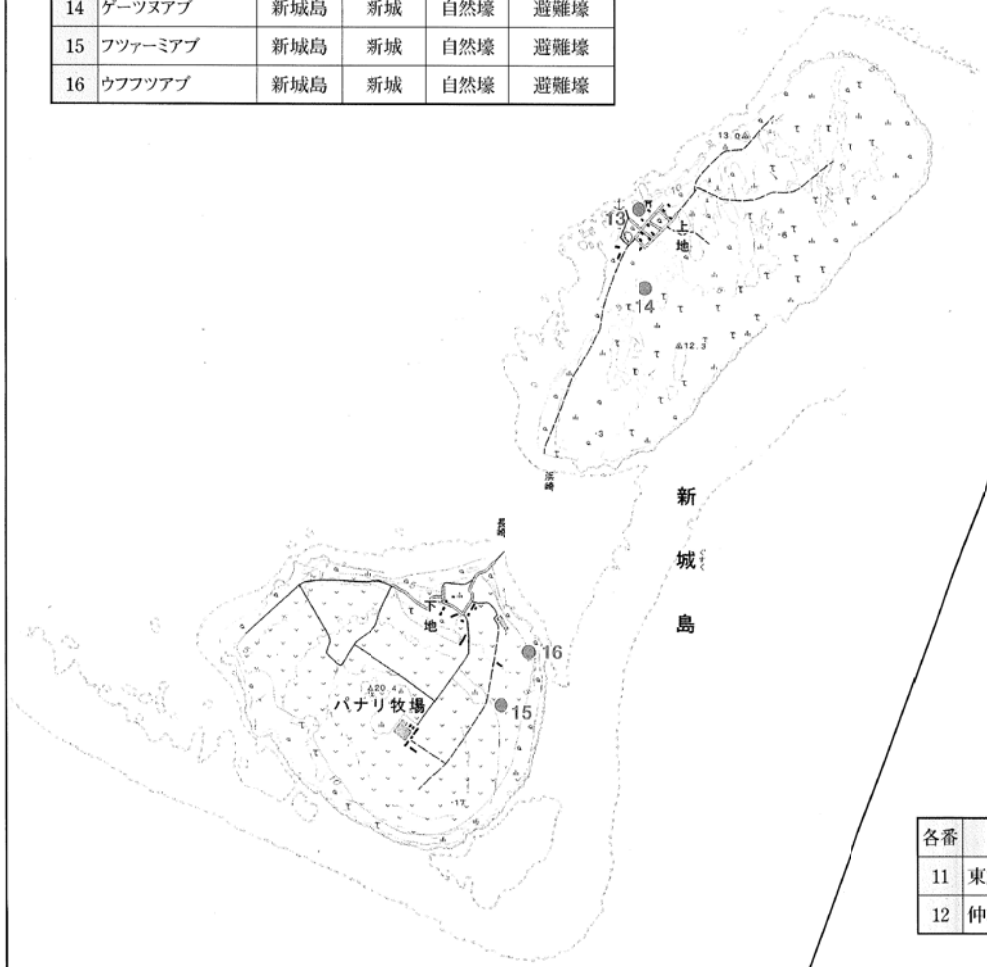
各番	戦争遺跡名	島名	所在地	形態	種別
8	アールムティの特攻艇秘匿壕	小浜島	小浜	人工壕	秘匿壕
9	インメーアボー	小浜島	小浜	自然壕	避難壕
10	ニシヌハマの壕	小浜島	小浜	自然壕	避難壕

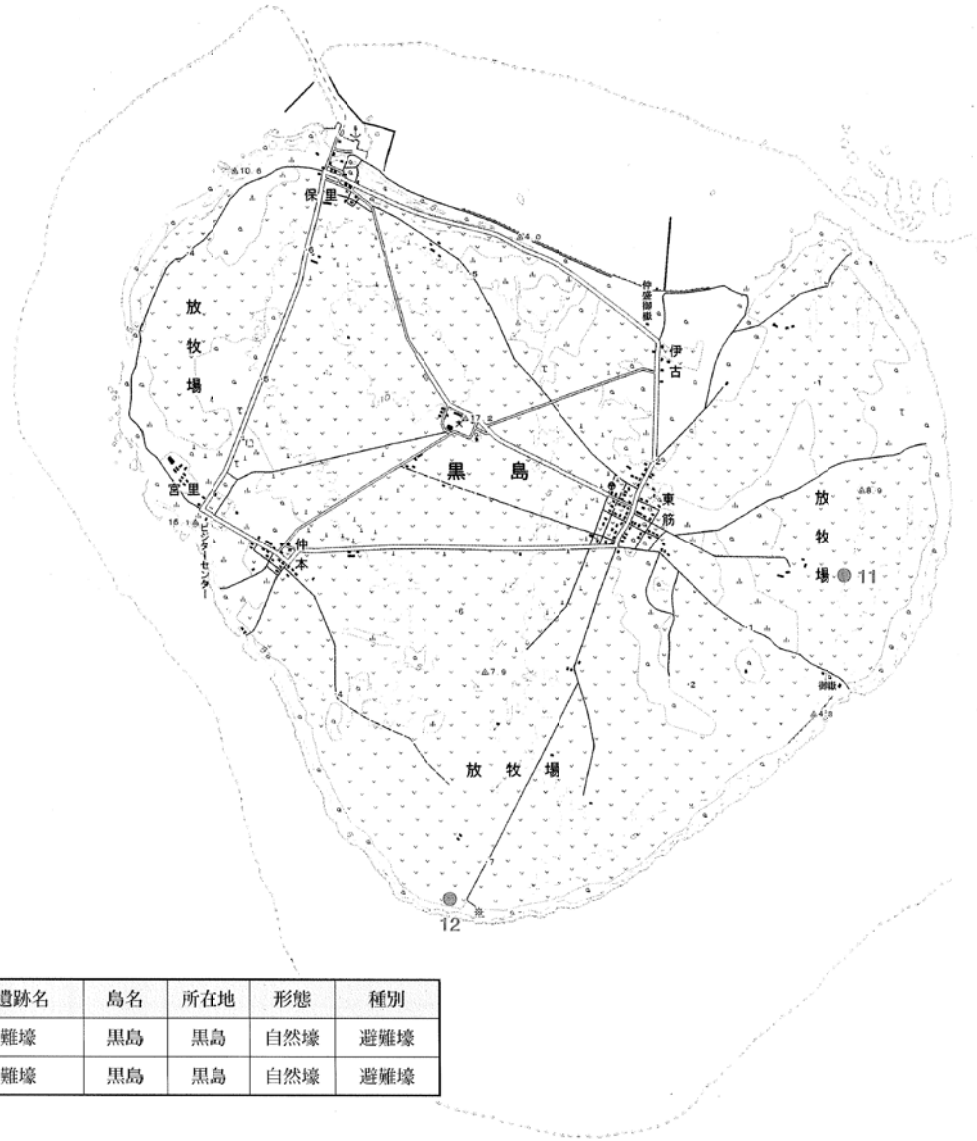
各番	戦争遺跡名	島名	所在地	形態	種別
1	竹富島南海岸の銃眼	竹富島	竹富	人工壕	機関銃壕
2	ヤンガー	竹富島	竹富	自然壕	自然壕
3	ティラクガマ	竹富島	竹富	自然壕	自然壕
4	トゥールングックの地下壕	竹富島	竹富	人工壕	陣地壕
5	竹富村忠魂碑	竹富島	竹富	碑銘	記念碑
6	国吉家の弾痕跡	竹富島	竹富	建造物	その他
7	河上家の弾痕跡	竹富島	竹富	建造物	その他

0　2000m

② 竹富町

各番	戦争遺跡名	島名	所在地	形態	種別
13	ニスヌガマ	新城島	新城	自然壕	避難壕
14	ゲーツヌアブ	新城島	新城	自然壕	避難壕
15	フツァーミアブ	新城島	新城	自然壕	避難壕
16	ウフフツアブ	新城島	新城	自然壕	避難壕





各番	戦争遺跡名	島名	所在地	形態	種別
11	東筋の避難壕	黒島	黒島	自然壕	避難壕
12	仲本の避難壕	黒島	黒島	自然壕	避難壕

0　2000m

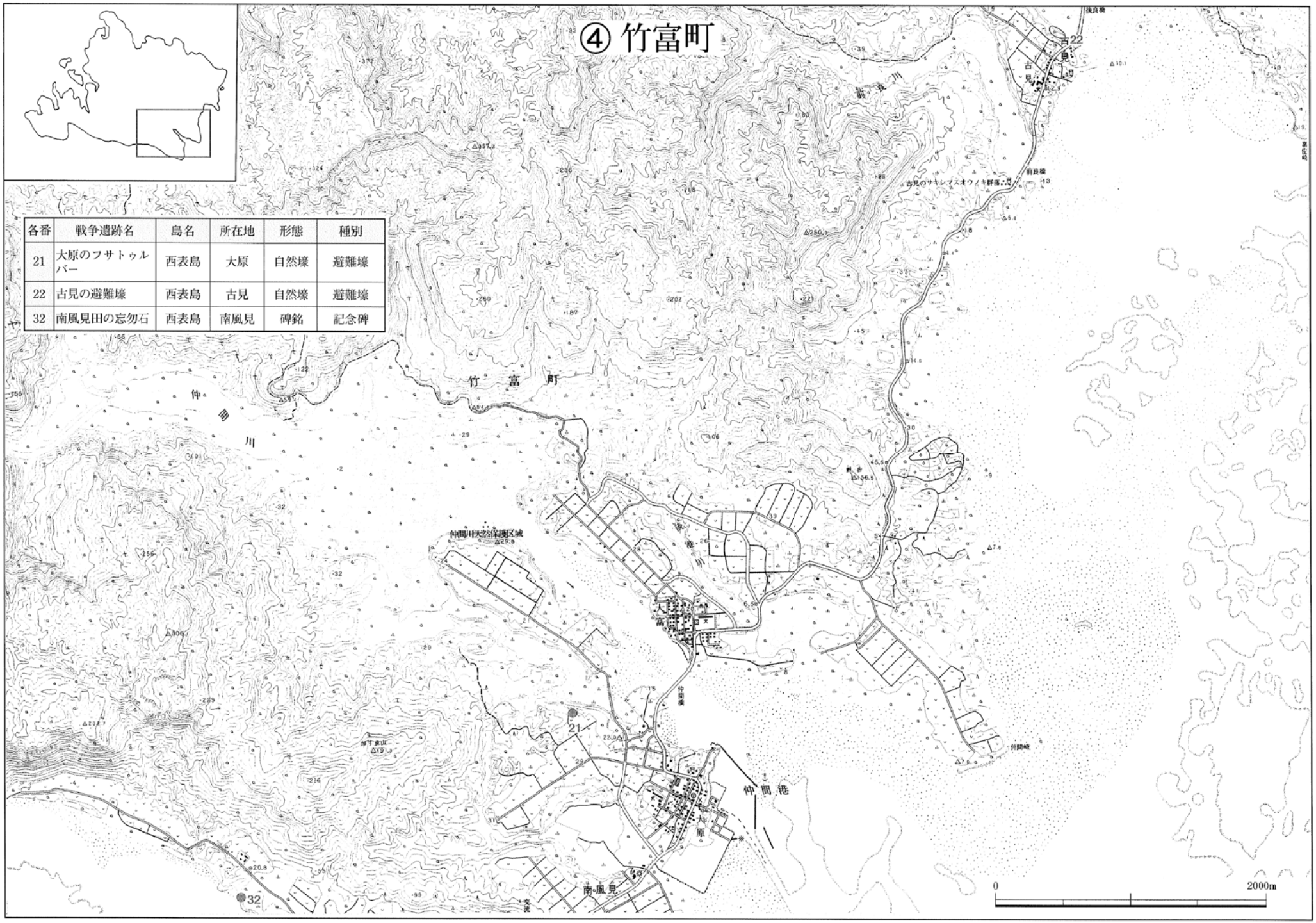
③ 竹富町

各番	戦争遺跡名	島名	所在地	形態	種別
17	北集落の避難壕	波照間島	波照間	自然壕	避難壕
18	キッパリヤマの壕	波照間島	波照間	自然壕	避難壕

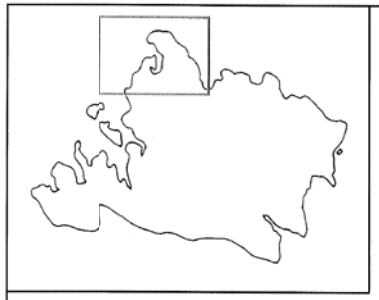
0 2000m

④ 竹富町

各番	戦争遺跡名	島名	所在地	形態	種別
21	大原のフサトゥルバー	西表島	大原	自然壕	避難壕
22	古見の避難壕	西表島	古見	自然壕	避難壕
32	南風見田の忘勿石	西表島	南風見	碑銘	記念碑

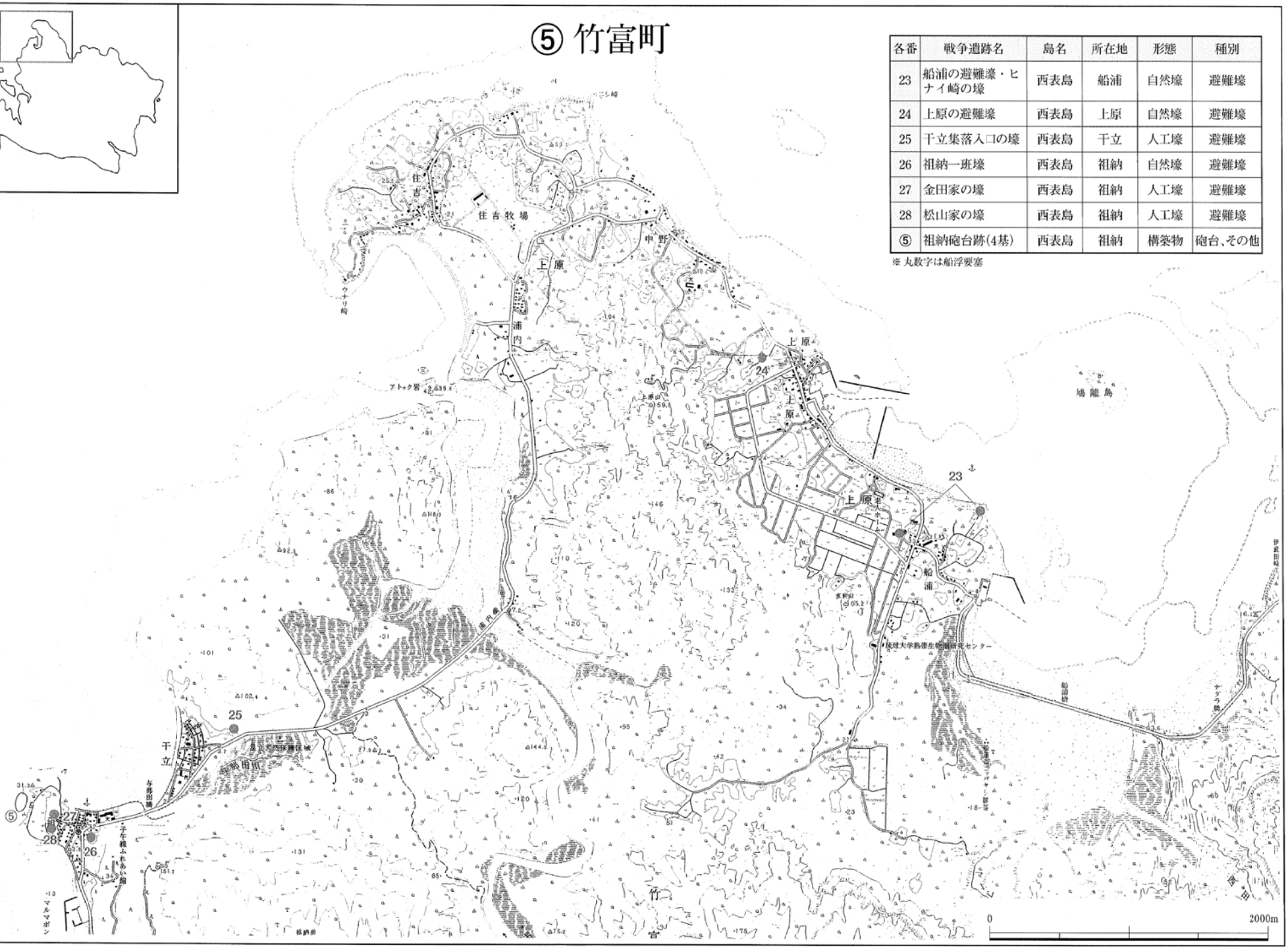


⑤ 竹富町

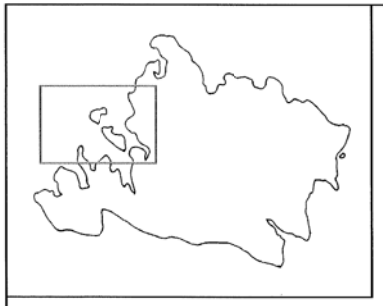


各番	戦争遺跡名	島名	所在地	形態	種別
23	船浦の避難壕・ヒナイ崎の壕	西表島	船浦	自然壕	避難壕
24	上原の避難壕	西表島	上原	自然壕	避難壕
25	干立集落入口の壕	西表島	干立	人工壕	避難壕
26	祖納一班壕	西表島	祖納	自然壕	避難壕
27	金田家の壕	西表島	祖納	人工壕	避難壕
28	松山家の壕	西表島	祖納	人工壕	避難壕
⑤	祖納砲台跡(4基)	西表島	祖納	構築物	砲台、その他

※ 丸数字は船浮要塞



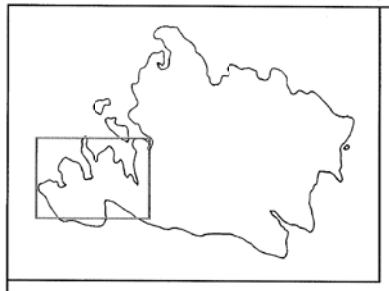
⑥ 竹富町



各番	戦争遺跡名	島名	所在地	形態	種別
29	白浜の避難壕	西表島	白浜	人工壕	避難壕
30	船浮の避難壕	西表島	船浮	人工壕	避難壕
31	船浮の戦争遺跡群	西表島	船浮	人工壕・構築物	秘匿壕・発電機壕・弾薬庫壕・水源ダム・桟橋跡
①	内離島砲台跡	西表島	内離島	構築物	砲台
②	陸軍病院跡	西表島	内離島	構築物	病院
③	船浮要塞司令部跡	西表島	内離島	構築物	その他
④	成屋の慰安所跡	西表島	内離島	構築物	その他
⑤	祖納砲台跡(4基)	西表島	祖納	構築物	砲台、その他
⑥	軍避難壕	西表島	外離島	自然壕	避難壕
⑦	外離島砲台跡	西表島	外離島	構築物	砲台
⑧	擬砲跡、塹壕、避難壕	西表島	外離島	人工壕・塹壕等	避難壕、その他
⑨	兵舎跡	西表島	外離島	構築物	兵舎
⑩	兵舎跡	西表島	外離島	構築物	兵舎
⑪	小野隊兵舎跡	西表島	外離島	構築物	兵舎
⑫	防空壕	西表島	外離島	人工壕	避難壕
⑬	サバ崎の擬砲跡	西表島	サバ崎	構築物	その他
⑭	桟橋跡	西表島	サバ崎	構築物	桟橋
⑮	サバ崎の兵舎跡	西表島	サバ崎	構築物	兵舎

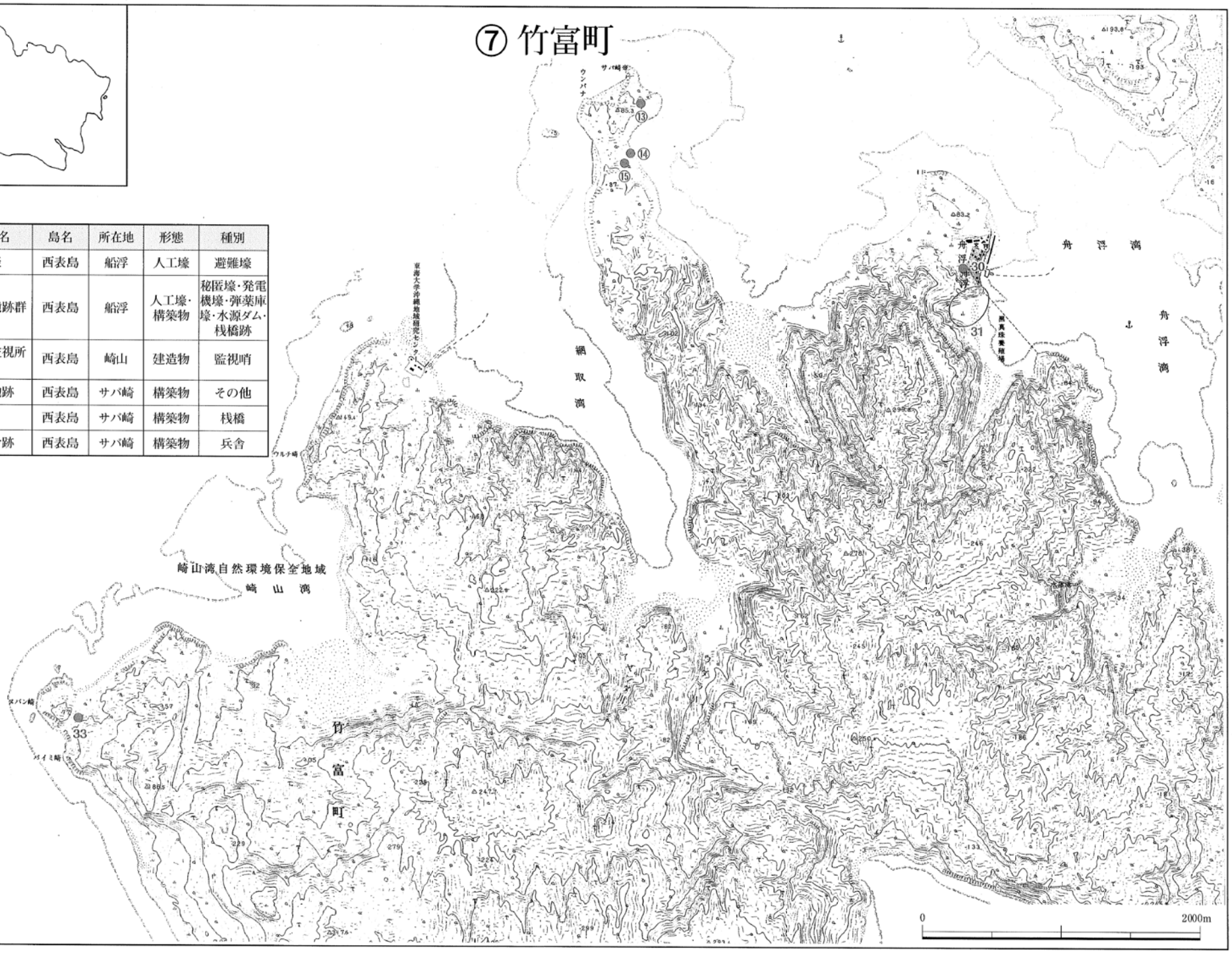
※ 丸数字は船浮要塞

⑦ 竹富町



各番	戦争遺跡名	島名	所在地	形態	種別
30	船浮の避難壕	西表島	船浮	人工壕	避難壕
31	船浮の戦争遺跡群	西表島	船浮	人工壕・構築物	秘匿壕・発電機壕・弾薬庫壕・水源ダム・桟橋跡
33	バイミ崎の監視所跡	西表島	崎山	建造物	監視哨
⑬	サバ崎の擬砲跡	西表島	サバ崎	構築物	その他
⑭	桟橋跡	西表島	サバ崎	構築物	桟橋
⑮	サバ崎の兵舎跡	西表島	サバ崎	構築物	兵舎

※ 丸数字は船浮要塞



① 与那国町

各番	戦争遺跡名	市町村	所在地	形態	種別
1	田原川の壕	与那国町	祖納	自然壕	避難壕
2	カマヌタ	与那国町	祖納	自然壕	避難壕
3	ブナビダヤ	与那国町	久部良	自然壕	避難壕
4	クブラバルダヤ	与那国町	久部良	自然壕	避難壕
5	桃原の避難壕	与那国町	久部良	自然壕	避難壕
6	比川の避難壕	与那国町	比川	自然壕	避難壕
7	潮原の陸軍兵舎跡	与那国町	祖納	構築物	兵舎
8	伊波南哲詩碑	与那国町	祖納	碑銘	記念碑